

第2節 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は整理箱に約200箱あり、種類には土器類（須恵器・土師器・灰釉陶器・緑釉陶器・黒色土器・陶器・磁器）、土製品（陶棺・土錘・土馬）、瓦類（軒丸・軒平・丸・平瓦・磚）、石製品（叩き石・管玉・砥石・石鍋）、金属製品（金環・鉄器・鉄製農工具・帯金具・不明品・銭貨）、鉄滓、焼土塊などがある。中でも土器類が150箱と最も多くを占め、次いで瓦類が30箱ほどある。これらが属する時代は古墳時代前期から鎌倉時代の長期間にわたる。最も遺物量が多いのが飛鳥後期～奈良時代であり、次いで古墳時代、平安時代、鎌倉時代の順である。この様相は集落の消長を、比較的直接的に反映しているものであろう。以下に、時代ごとの概要を述べてゆくこととする。

A. 古墳時代

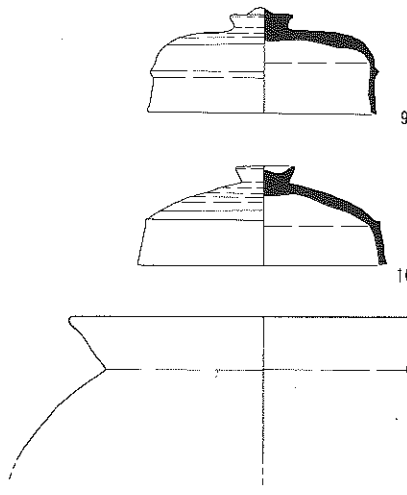
主に、堅穴住居・土壇および古墳から出土している。前2者は概ね5世紀中頃を中心とした時期のものであり、後者は7世紀初頭に比定できるものである。

S B 2001（第43図・写真図版51；9～11） 須恵器杯蓋もしくは有蓋高杯蓋が2点、土師器甕が2点以上ある。いずれも堅穴住居床面の遺物である。9と10はいずれもつまみを持つ杯蓋であるが、形態がやや異なっている。9では口縁部が直線的であるのに対し10はやや外方に開くほか、前者は天井部の肩が張りつつ盛り上がるの対し、後者はなだらかに盛り上がる。また、前者はつまみ中央の突出が大きく後者は低い。いずれの天井部にもヘラケズリが施されている。9は口径12.4cm、器高7cm。10は口径13.5cm、器高5.4cm。11は甕口縁部であるが、口縁端部は肥厚しない。口径21.5cm。陶邑TK216ないし208型式に併行する。5世紀中葉。

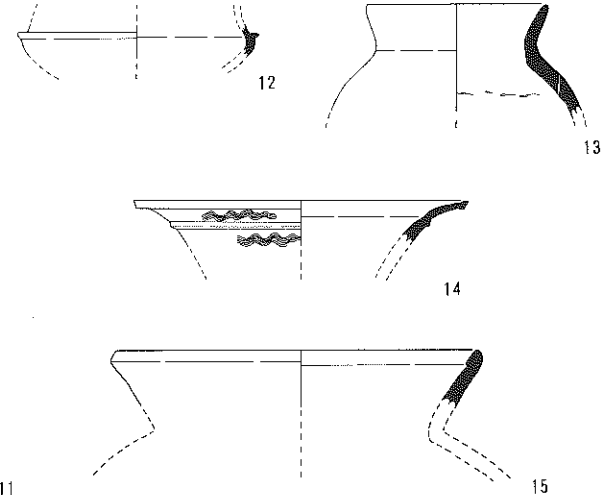
S B 2002（第43図；12～15） 須恵器の杯・甕、土師器の甕などがある。コンテナに2箱ほどの量があるが、いずれも小片で土師器甕の体部片が大半である。図示したものは堅穴住居床面の遺物である。12は須恵器の杯。小片であるが体部は比較的浅く収まるものと推測される。14は須恵器甕で、同様に小片である。口縁部は浅く大きく外反するもので、端部上下は強いナデにより稜が立つ。13・15は土師器甕である。15の口縁端部は肥厚している。その一方で13の器壁は厚く、内面のヘラケズリはない。須恵器は概ね陶邑TK208型式ころのものであり、S B 2001と併行するかやや新しい時期のものと考えられる。5世紀中葉から後葉。

S K 2005（第43図・写真図版51；1～8） 須恵器の杯・鉢・高杯・甕、土師器の高杯・甕・鉢・ミニチュア土器がある。土壇埋土の上層から中層付近からまとまって出土しており、一括遺物群と考えてよい。2は完形の須恵器鉢である。全体的には杯に近い形態であるが受部を持たない。またやや小振りである。浅い器高の中央やや上方に最大径を持ち、緩やかに内彎しつつ口縁部に向かう。端部内側には面を持つ。底部にはヘラケズリが施されている。口径9.6cm、器高4.4cm。3は須恵器の杯である。口縁端部上面には面を持つ。底部にはヘラケズリが施されている。口径11.1cm。6は須恵器の無蓋高杯である。口径が底径を大きく凌駕しており、杯部の量感が大きい印象を受ける。杯部は口径が広く浅い皿状で口縁部は外方に大きく開き、中央付近の突出す

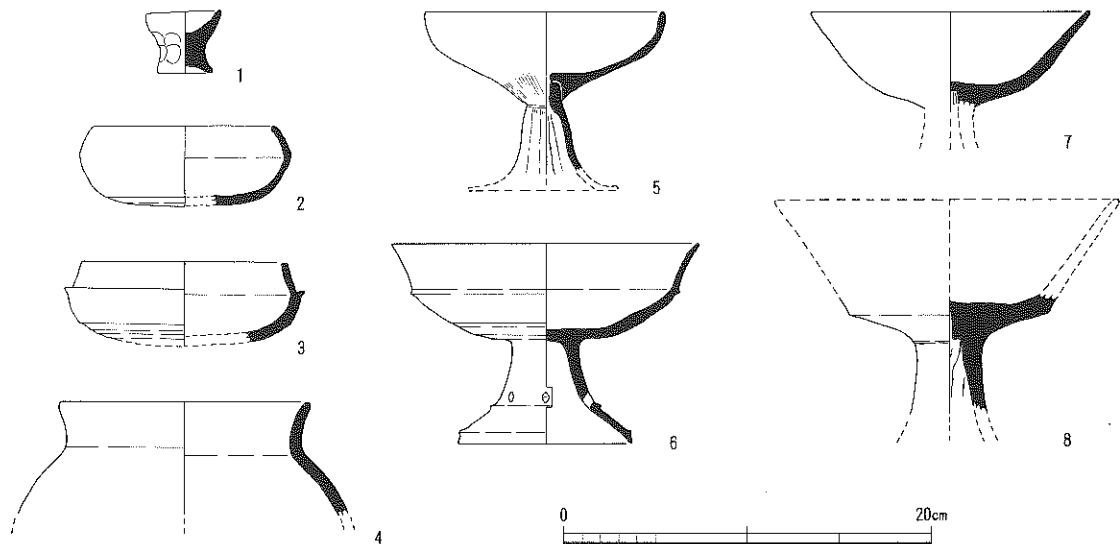
S B 2 0 0 1



S B 2 0 0 2



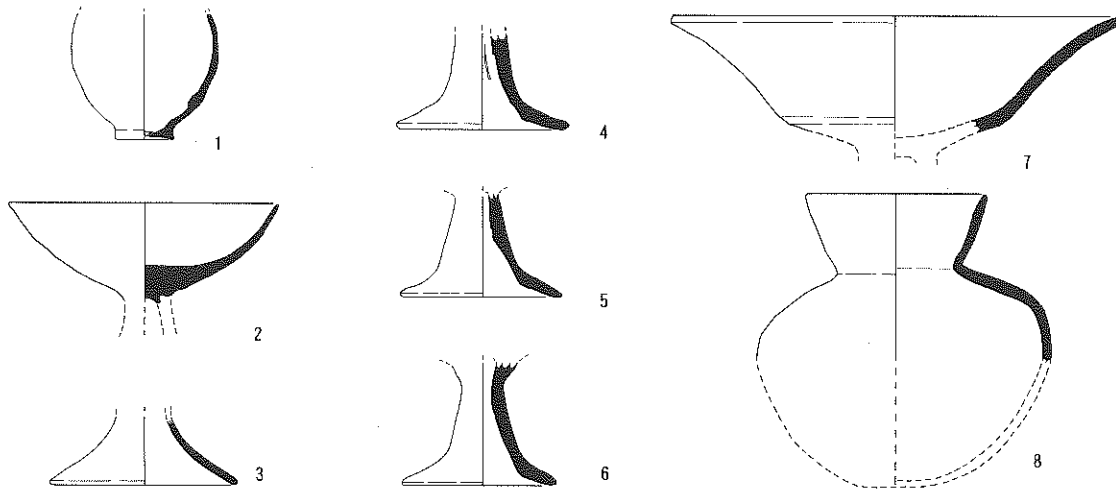
S K 2 0 0 5



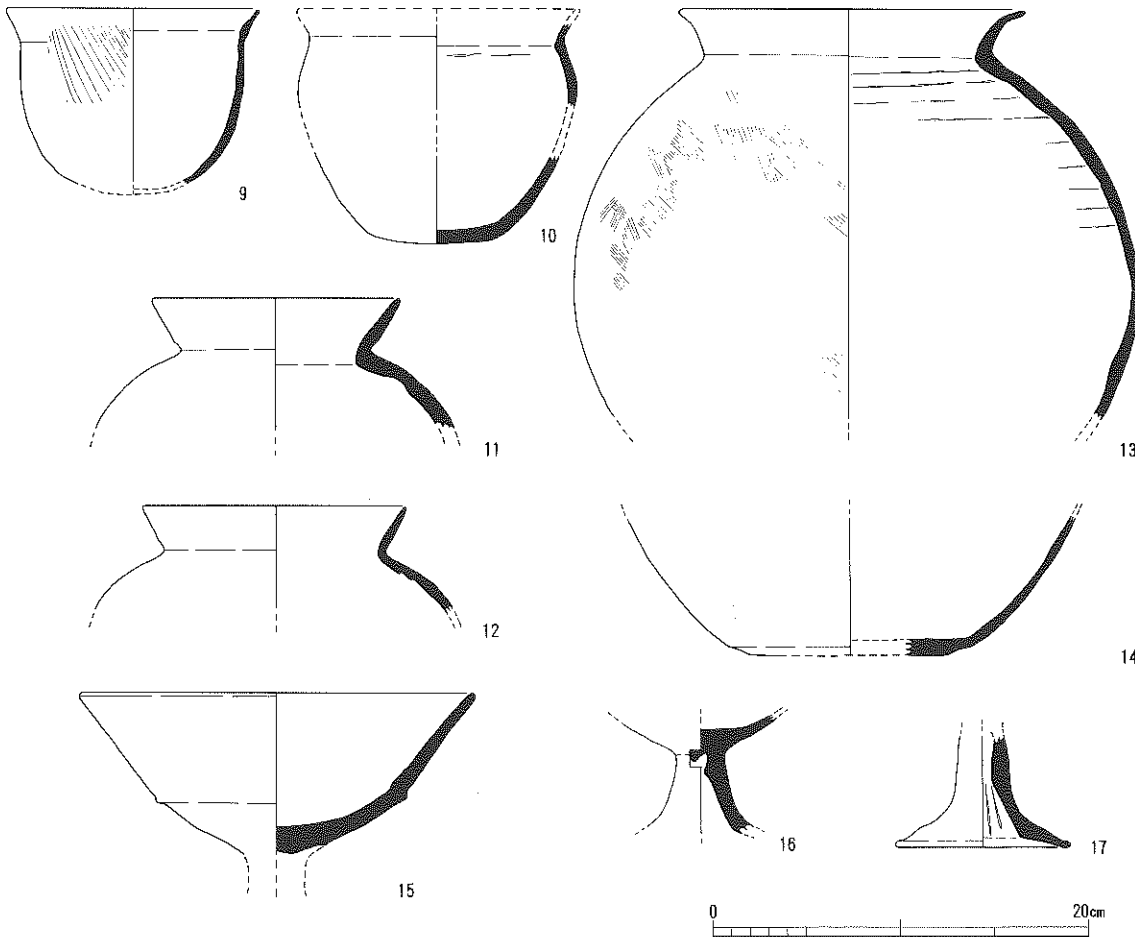
第43図 S K 2005・S B 2001・2002出土土器実測図

る稜を境に脚部に向けてすぼむ。脚部との接合部付近にはヘラケズリが施されている。脚部はハの字状に開き端部は肥厚しない。また脚部には6方向に菱形の小さな透し孔を持つ。口径16.8cm、器高10.9cm。1は高杯を模したミニチュア土器と考えられる。粘土塊を手づくねで整形したのみで、指頭圧痕が顕著に残る。口径4.1cm、器高3.3cm。5・7・8は土師器の高杯で、大小2法量がある。5・7は小型高杯である。なお、小型高杯は、脚部のみのものが他に3片ある。5は口径12.9cm、杯部高4.8cm。7は口径15.0cm、杯部高5.0cm。ほぼ同法量であるが、口縁部の形態および脚部との接合方法が異なっている。5の杯内面中央には径2mmの刺突痕が貫通している。8は大型高杯である。脚部内面には刺突痕が認められる。4は土師器の甕で外面ハケ、内面ナデ調整である。口径15.4cm。6の無蓋高杯脚部透し孔の形状は、高杯脚部に長方形透し孔が定着する以前の要素とみられ、陶邑TK216型式に併行すると考えられる。5世紀中葉。

SB3002



SB4014

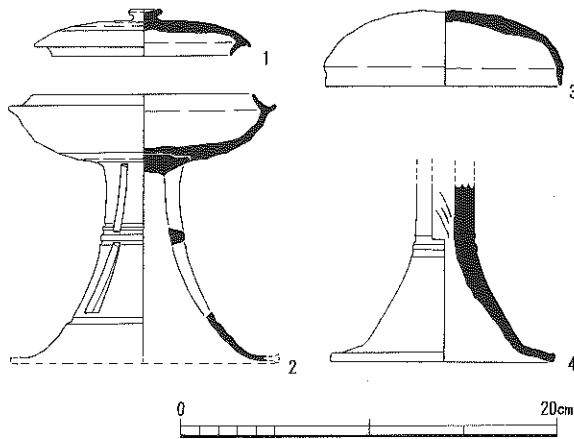


第44図 SB3002・4014出土土器実測図

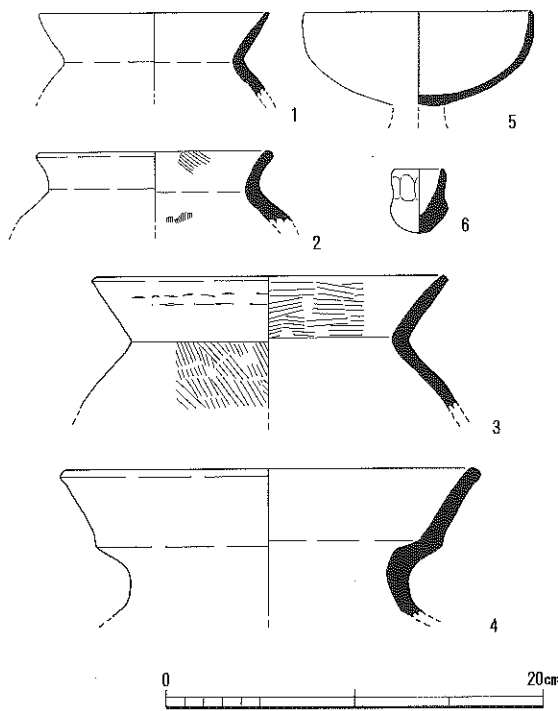
SB3002 (第44図; 1~8) 土師器の高杯・壺・鉢、須恵器の甕片がある。竪穴住居床面および埋土内の遺物である。どれも状態が悪く調整は観察できない。1は小型の鉢で小平底を持つ。2~6はほぼ同法量の小型高杯である。脚部のみのもが多い。2と接合する脚はない。2は口

径14.4cm、杯部高4.8cm。7は大型高杯である。口径23.8cm。8は小型の直口壺で肩部上半に最大径を持つ。口径9.6cm。5世紀中葉か。

S B4014 (第44図; 9~17) 土師器の甕・高杯がある。いずれも床面上の遺物である。9・10は小型甕である。両者とも頸部の締まりが緩く成形・調整ともに粗雑である。被熱が強い。11・12は単純口縁の甕であるが、やや内彎気味の口縁には布留式の様子を残す。外面はハケ、内面はナデ調整。口径13.1cm(11)、13.6cm(12)。13は大型で口縁が外反する甕である。器壁はナデによって比較的薄く仕上げられており、外面には不定方向のハケを施す。口径18.4cm。高杯15・16の杯部中央は三角形の粘土塊が充填され閉塞されている。須恵器を含まない土器群であるが、布留式の影響が看取され、S B2001やS K2005と概ね併行すると考えられる。5世紀中葉ころ。



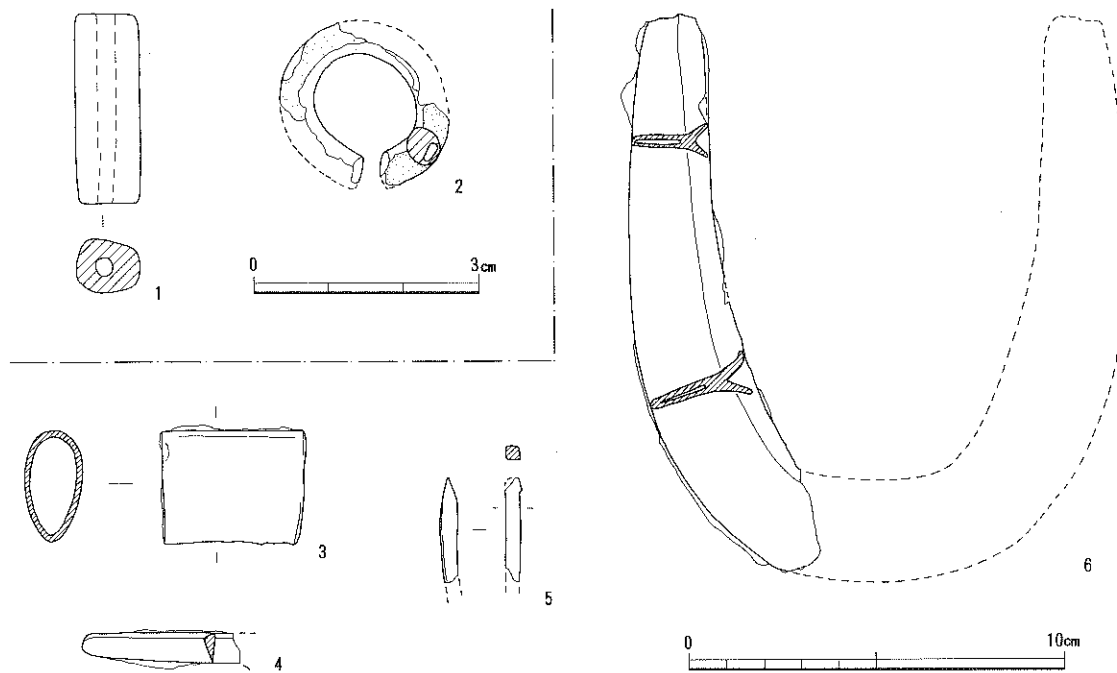
第45図 菟道谷下り1号墳石室・前庭部出土土器実測図



第46図 菟道谷下り1号墳盛り土内出土土器実測図

菟道谷下り1号墳 菟道谷下り1号墳に伴う遺物には石室・前庭部内出土遺物、墳丘盛り土内出土遺物、周濠埋土内出土遺物の3者がある。なお、周濠は奈良時代には溝として再利用されていたが、明らかに再掘削されたことがわかった部分以外から出土した遺物については、周濠出土遺物としてまとめて取り上げた。そのため、ここには古墳時代以降の遺物も多く含んでいる。

石室・前庭部内 (第45図・写真図版51; 1~4、第47図・写真図版52; 1・3~6) からは須恵器と少量の土師器片、金属製品がある。多くは床面上で出土しているが、原位置をとどめていない。第45図; 1は壺蓋である。天井に偏平なつまみを持つ。ヘラケズリが施されている。口径9.4cm。石室内埋土出土。2は長脚2段有蓋高杯である。杯部底にはヘラケズリが施されている。口径11.8cm。3は杯蓋である。天井部はヘラ切り後ナデのみ。口径12.3cm、器高4.0cm。4は高杯脚部である。2~4は前庭部出土。これらは、陶邑TK209~TK217型式に併行するものであり、古墳築造時期を示す資料である。6世紀末~7世紀初頭。第47図; 1は前庭部床面上から出土した碧玉製管玉で、直径0.85cm、長さ2.40cmを測る。3~6は石室内床面上から出土し



第47図 菟道谷下り1号墳石室・周濠内出土遺物実測図

た鉄製品である。3は柄頭である。径2.9cm×1.6cm、長さ3.7cm。鍍金や象眼は認められない。4は刀子の柄部分、5は鉄釘の破断片。6は鉄製U字形鍔先の一部である。

墳丘盛り土内(第46図;1~6)の遺物には、土師器と須恵器片が少量ある。整理箱2箱ほどである。1~4は土師器である。1~3は単純口縁の比較的粗雑な甕で、器壁は厚く内面はナデとハケ調整である。5世紀代。4は山陰地方に通有な複合口縁壺である。4世紀代。5は小型高杯である。口径12.0cm、杯部高5.0cm。6は手づくねのミニチュア壺である。口径2.6cm、器高3.5cm。5世紀代か。

周濠埋土中(第47図・写真図版52;2、図版33~35・写真図版53~55;1~53)からは、土器類と金属製品が出土している。土器類には須恵器(1~27・29・30・32~42・47~53)と土師器(28・31)・緑釉陶器(43)・灰釉陶器(44~46)があり、7世紀初頭から10世紀頃までのものを含む。大きくは3群のまとまりがあり、7世紀初頭の古墳に伴う一群、7世紀後半から8世紀の溝の機能時から廃絶までの一群、9~10世紀の溝が埋没した後に投棄された一群に分かれる。7世紀以降の土器群の器種名・属性分類については、次項の奈良~平安時代に準じる。

第47図2は金環である。銅芯に薄い銀を巻き鍍金している。直径2.75cm。

土師器(図版33)には杯B・鍋Bがある。28は土師器杯Bである。口縁端部はやや外反気味に広がっている。内面には放射状の暗文が施されている。31は鍋Bである。軟質で摩滅が著しく調整はわからない。口径29.8cm。

須恵器(図版33~35)には、杯G・杯A・杯B・杯蓋・盤A・高杯TA・高杯TB・高杯TC・高杯TD・高杯TE・壺B・壺C・壺K・壺L・壺・平瓶・横瓶・すり鉢・甕TAがある。

1・2は杯Gもしくは杯H蓋である。底部から口縁部への明瞭な屈曲をもたない。底部はヘラ切りのままである。口径9.9cm、11.0cm。杯A(3~8・10~12)は、口径10.5~10.9cmのもの

(3~5)と、12.0~12.8cm(6~8・10~12)のものに大きく2分できる。杯H(9)の底部下半にはヘラケズリが施されている。口径10.5cm。杯G蓋(13)の天井部はナデのみ。口径10.8cm。杯B蓋(14)は内面かえりを持たないb形態で、直径19.8cmを測る。杯B(15~19)には、a類(16・18)、b類(17)、c類(15・19)の型式差がある3形態のものが含まれている。口径も11.0(15)~17.7(18)cmと幅がある。

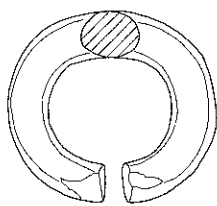
高杯(20~27)は多くの型式を含んでいる。20・23は高杯TBと推測される。23の杯部底にはヘラケズリが施されている。高杯TB(26)は3方向に2段の透し孔を持つ。高杯TA(25)は低脚で透し孔を持たない。口径9.0cm。高杯TD(24)杯部の立ち上がりはなだらかで、口縁付近までヘラケズリが施されている。21・27は高杯TCであるが、法量に大小がある。22もおそらく高杯TCの脚部であろう。脚部径が大きい。27の口縁上半部にはカキ目が残る。

29・30は平瓶であるが、両者では器形の全体バランスが異なっている。29では体部が全体的に丸みを持ち、体部径・器高比が2:1であるのに対し、30では肩部・底部境の屈曲が強く体部径・器高比が7:3と体部径の比率が大きく全体的に偏平な印象を与える。また、頸部径が体部径に占める割合も30では大きくなっている。

壺K(32~34)にも形態的な差があり、肩部に丸みを帯びるもの(34)と稜をもって屈曲するもの(32・33)がある。なお、34は焼成時の破損が大きく使用することは不可能である。35・36は壺Cである。37はすり鉢で上半部のほとんどを欠失している。壺L(38)の体部下半には縦方向の手持ちヘラケズリが施されている。39は肩部が有稜屈曲する壺Bで、高台はない。体部下半にはヘラケズリが施される。口径11.4cm、器高16.1cm。40は、39同様、肩が稜をもって屈曲し、長く外反する口縁を持つ壺であるが全形は不明。

41・42・48・49は甕TA口縁部である。48・49は大きく外反する口縁外面に波状文が施されている。肥厚する端部先端は上方につまみ上げられている。50は横瓶である。全体的に丸みを帯びた俵形で、短く外反する口縁を持つ。端部は内外面に肥厚している。焼成が硬質であり、タタキの当て具痕跡が明瞭に観察できる。ここからは、横に開口する筒状の部分を先に成形し、後に両端を閉じたことがわかる。口径11.9cm、器高25.3cm、横幅36.8cm。47は鉢である。口縁は底部から直線的に立ち上がるが、端部付近でやや内彎し、端部では内傾する面を持つ。底部は平底である。口径23.4cm、器高7.8cm。

51~53は器高47.5cm以上を測る大型の甕である。いずれも土圧で割れていたものの、接合作業



第48図 2号墳金環実測図

によってほぼ完形になった。51の口縁部は無文で、端部を外面に肥厚させ上方をつまみ上げている。体部外面上半にはカキ目を施している。なお、この個体は、焼成時のひずみによる大きな亀裂を持つ。52の口縁部も無文で、端部は上下と外方に肥厚する。口径22.2cm、器高47.5cm。53は口縁部に波状文を施す最も大型の甕で、体部最大径が体部高を上回るため、偏平な印象を与える。底部は平底である。体部外面全体にカキ目を施している。口径36.0cm、器高60.2cm。

緑釉陶器には皿(43)がある。削り出しの蛇の目高台を持つ。底部外面に施釉されないb手法で、トチン・重ね焼きの痕跡は残っていない。A群に分類できる。

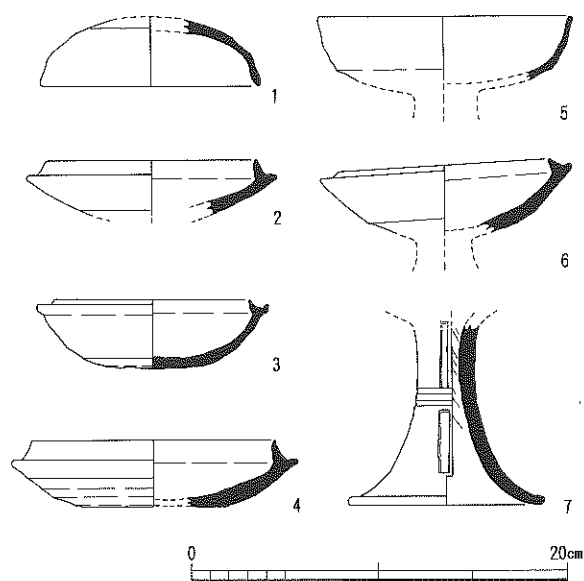
灰釉陶器には皿・段皿(44~46)がある。46は段皿である。優品で完形に近い。三日月高台を持つ。灰釉は内外面とも刷毛塗りのc手法。口径18.8cm、器高2.9cm。

菟道谷下り2号墳(第48図・写真図版52;1)金環が1点、天井石の落とし込み穴から出土している。周濠内には少量の土師器が含まれていたが、小片であった。金環は、銅芯に金を貼ったもので、銅芯は中実である。ほぼ完形品である。金は剥がれておらず鈍い金色を呈する。径は2.7cm×2.5cm。

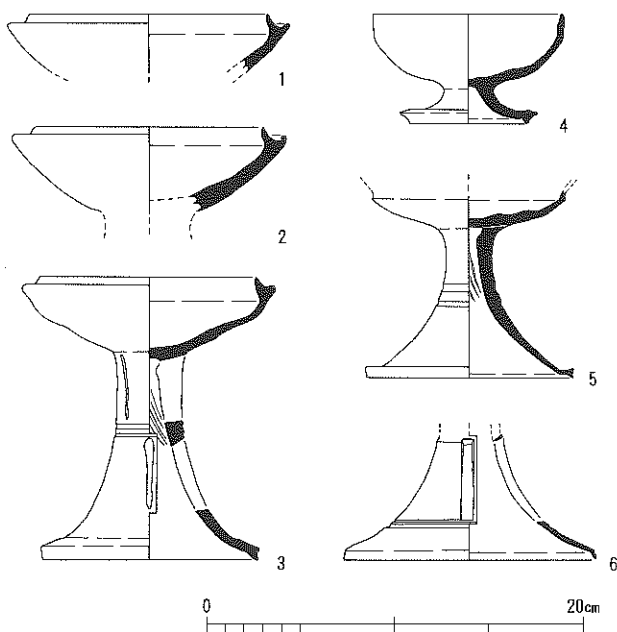
菟道谷下り3号墳(第49図;1~7)須恵器と小片の土師器がある。礫床およびその直上の埋土中に含まれていた。

1は杯蓋である。頂部はナデ。口径11.6cm。6は有蓋高杯杯部で、杯部底面にはヘラケズリが施されている。口径11.2cm。5は無蓋高杯で、口縁部は稜をもって屈曲し直線的に立ち上がる。口径13.2cm。7は2方向の長脚2段透し孔を持つ脚部である。透し穴は長方形。陶邑TK209からTK217型式に併行する。

SX4024(第50図;1~6)須恵器がある。この土器溜りは、菟道谷下り1号墳に伴う遺物である可能性が高い。器種はすべて高杯である。1~3は有蓋高杯である。口径は12.7cm(1)、12.2cm(2)。3は長脚2段透しを持つが、上下の透し孔は互違いに穿たれており、穴そのものも細く長方形になっていない。口径11.6cm。器高15.0cm。4は無蓋短脚高杯である。杯部は口縁に向かってなだらかに立ち上がる。口径10.0cm、器高5.9cm。5は長脚の無蓋高杯であると推測される。杯部は、口縁部と底部の境で有稜屈曲し、口縁部は外反しつつ立ち上がる形態になるとみられる。脚部は上下に2区画されているが、透し孔を持たない。6は長脚高杯の脚部である。長方形透し孔を持つ。陶邑TK209からTK217型式に併行する土器群である。



第49図 菟道谷下り3号墳石室内出土土器実測図



第50図 SX4024出土土器実測図

B. 飛鳥・奈良・平安時代

a. 土器の分類

今回の調査では、主に溝・土壇・不正形土壇などから7世紀後半から10世紀後半にかけての資料を得た。種類には土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・黒色土器などがある。

ここでは、まず各種別別に器種及び属性分類を行った後、この分類にそって各遺構出土土器の記述を行うこととした。

以下に各器種の属性分類を示した。このうち土師器・須恵器の器種区分については、第52・53図にまとめた。基本的には奈良国立文化財研究所の刊行する飛鳥・藤原宮や平城宮の発掘調査報告の分類を援用したものであるが、本報告で新たに設定した器種については、アルファベットの頭にTを付けた。なお、属性の分類については援用していない。

土師器 器種は別表に示すとおりである。また、色調・胎土・焼成については、飛鳥から奈良時代の食器類は次の様に大きく3群に分けることができる。

A群：橙褐色～暗橙褐色を呈し、1mm大砂粒を微量に含むもの。ほとんどのものがあてはまる。

B群：淡褐色で1mm大砂粒を微量に含むもの。大きな黒斑を持つ。1点（杯A:213）のみ。

C群：淡褐色で4mm大の砂粒を多く含むもの。1点（皿A:105）のみ。

焼成には良否があるが、概して遺存状況が悪いため器の表面が失われている。煮炊具は淡褐色・灰色・暗橙褐色・茶褐色と様々であり、胎土には1～8mm大の砂粒を多く含む。同様に焼成には良否がある。なお、平安時代の土器については各項で述べる。

須恵器 器種は別表に示すとおりである。飛鳥から奈良時代では土師器を圧倒する数量が出土しており、飛鳥や平城宮域で出土するほとんどの器種が認められる。杯蓋、杯Bの形態についてはさらに次の様に細分する。

杯Bの形態は身・蓋とも次の様に分類できる。

身a形態：高めの高台を持ち、底部から体部への屈曲が緩やかで外反気味に広がるもの。

身b形態：低く断面方形の高台を持ち、高台横から少しはなれて体部が立ち上がるもの。

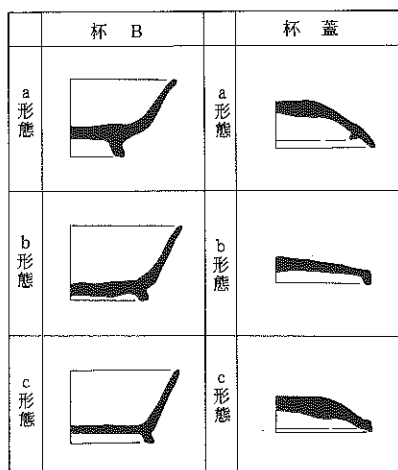
身c形態：低く、断面方形の高台を持ち、高台横から直線的に体部が立ち上がるもの。

蓋a形態：内面にかえりをもつもの。

蓋b形態：内面にかえりを持たず、天井部は平坦で、端部を短く下垂させるもの。

蓋c形態：内面にかえりを持たず、口縁付近に屈曲をもつもの。端部を短く下垂させる。

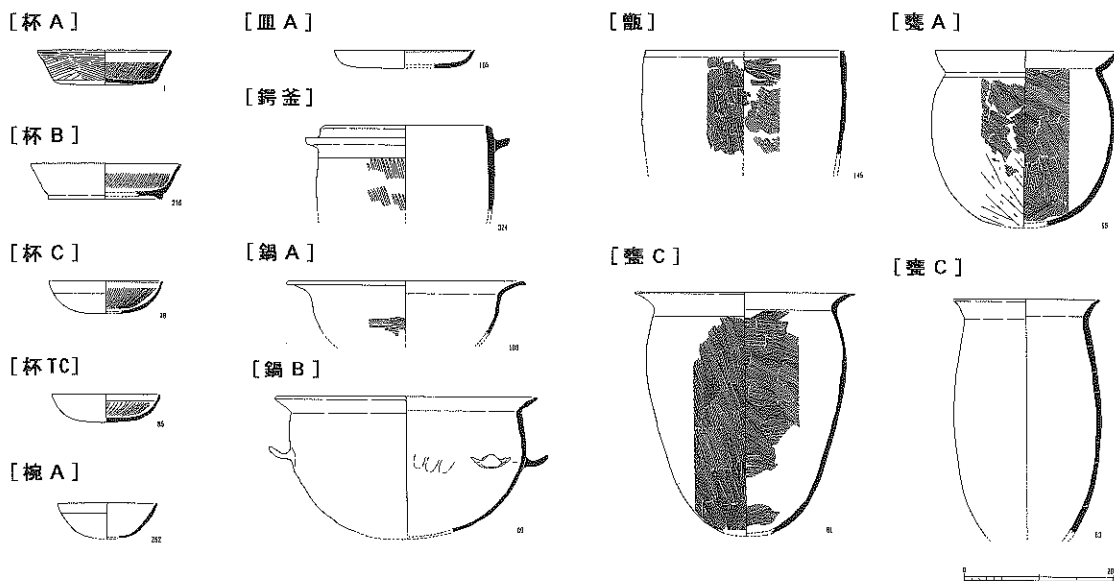
また、須恵器の焼成状況は硬質～軟質の幅があり、色調も青灰色から土師器程度の発色を呈するものまで多様である。胎土には砂粒を含まないもの、微量に含むもの、多く含むもの、黒色粒がケズリやナデにより墨を流したように見えるものな



第51図 須恵器の細部形態分類図

土師器器種分類表

名称	器種説明
杯 A	平らな底部と、やや外傾しつつ開く口縁部からなる。口縁端部の形態は単純に収まるものと、内側に丸く肥厚するものがある。内面に放射文を施すものがある。
杯 B	平らな底部に短い高台を付し、口縁部は外傾しつつ内彎気味に開くものである。内面に放射文を施すものがある。
杯 C	底部と体部の境が明瞭に屈曲しないもので、狭い平底ないしは丸底から斜め上に広がる。口縁端部は内側に内傾し面を持つ。内面には放射文が施される。
杯 TC	底部と体部の境が明瞭に屈曲しないもので、狭い平底ないしは丸底から斜め上に広がる。口縁端部は単純に収まり面を持たない。内面には放射文が施される。底部には木葉痕が残る。
椀 A	狭い平底から、内彎しつつ大きく開く口縁が立ち上がる。
皿 A	広く平らな底部と、短く外傾しつつ開く口縁部からなる。口縁端部の形態は単純に収まるものと、内側に丸く肥厚するものがある。
甕 A	球形に近い体部と、外反する口縁部を持つものである。口縁の形態は単純に収めるもの、内面に肥厚するものがある。
甕 C	底部の丸い長胴の体部と、強く外反する口縁部を持つものである。頸部でのすぼまりは少ない。
鍋 A	浅く、半球形に近い体部に外傾する口縁部を持つもの。
鍋 B	鍋Aの体部両側に把手が付されたもの。
罏 釜	頸部を持たず直立する口縁端部付近に突帯状の罏を付すもの。
甌	底部に向けてすぼまる円筒形の体部と直立する口縁部を持つ。底部に穿孔、体部両側に把手が付く。



第52図 土師器器種分類表・分類図

どが認められたが、産地を特定する要素に欠くものが多いため、同定が概ね可能なもののみをそれぞれに特記する。

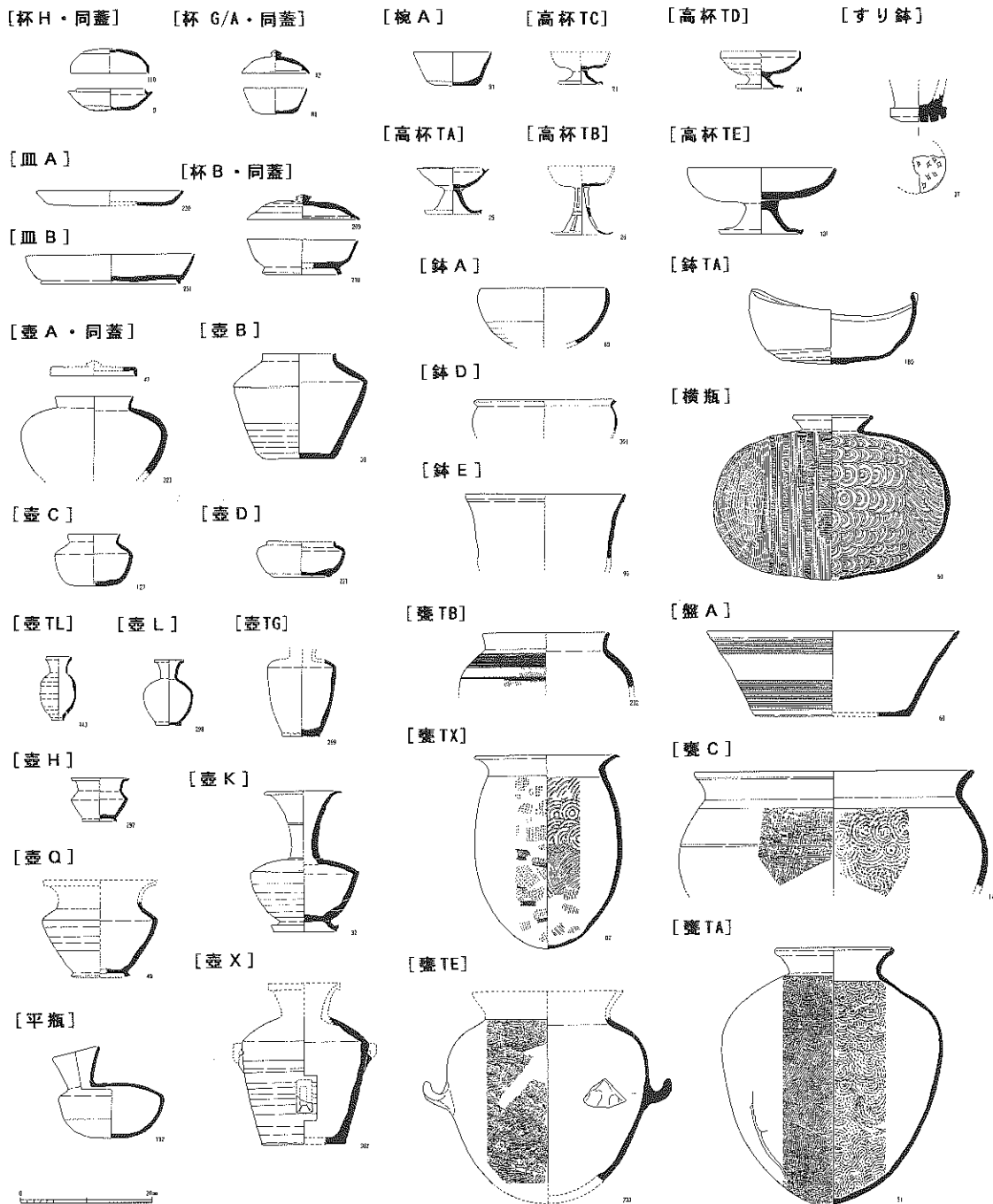
灰釉陶器 器種には椀、皿、段皿、壺、小瓶がある。いずれも色調・胎土は灰褐色で硬質に焼きしまっており、猿投産のものである可能性が高い。椀・皿の施釉の手法・焼成痕跡には、次の3種がある。

a 手法：内面全体にのみに掛けられる。外面に施釉はない。

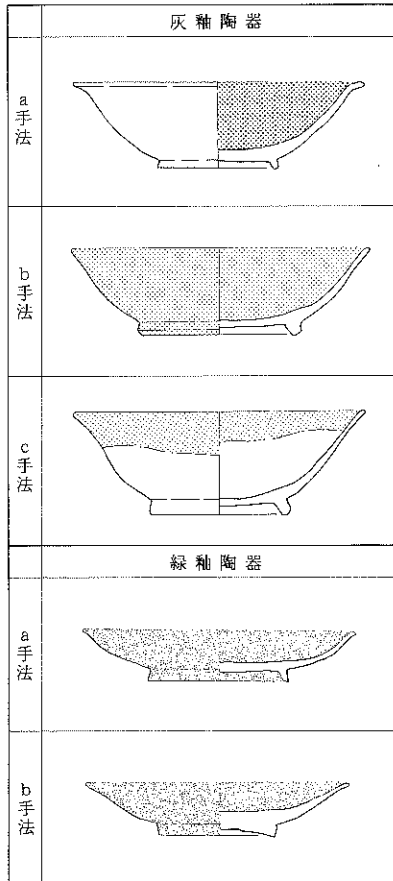
須恵器器種分類表

名称	器種説明
杯 H	丸みを帯びた狭い平底からなだらかに立ち上がる体部と、受け部および内傾する短いちあがりをもつもの。
杯H蓋	丸い天井部からなだらかに口縁部に向かい、端部は単純に収められるもの。
杯 G/A	平底あるいは狭い平底から屈曲をもってまっすぐ体部がたちあがるもの。
杯G蓋	丸い天井部からなだらかに口縁部に向かい、内面にはかえりを、天井部には宝珠つまみを持つもの。
杯 B	平底から屈曲をもってまっすぐ立ち上がる体部と、底部に高台を付すもの。
杯B蓋	丸い天井部からなだらかに口縁部に向かい、天井部中央には宝珠つまみを持つもの。内面にかえりを持ち口縁端部を単純に収めるものと、かえりを持たずに端部を垂直に屈曲させるものがある。
椀 A	平底から屈曲をもってまっすぐ長く体部がたちあがるもの。杯 G/Aをやや深くした器。
皿 A	広い平底から屈曲をもって短い体部がまっすぐ立ち上がるもの。
皿 B	皿Aに高台を付すもの。
鉢 A	内彎して立ち上がる口縁部と平底を持つもの。いわゆる鉄鉢形。体部外面はヘラケズリによって平滑に仕上げられている。
鉢 TA	内彎して立ち上がる口縁部と平底を持つが、両側面から押圧し片口状に変形させているもの。
鉢 D	丸みを帯びて張る肩部と、短く外反する広口の口縁部を持つものである。
鉢 E	口縁部から底部まで直線的に外傾しつつ長く伸びるバケツ状のものである。
すり鉢	円板状の底部と直線的に外傾して開く口縁部からなり、底部には多数の刺突が施されているもの。
盤 A	平底から大きく外傾しつつ口縁部まで伸びる洗面器状の器。口縁端部は上面に面を持つものと、外面に薄く肥厚するものがある。
壺 A	丸みを帯びて張る肩部から底部に向けてすばまる体部と、直立する短い口縁部を持つもの。高台が付される。
壺A蓋	平坦な天井部からほぼ直角に折れる口縁部を持ち、天井部には宝珠あるいは偏平なつまみが付されるもの。
壺 B	屈曲をもって張る肩部から直線的に底部に向けてすばまる体部と、直立する短い口縁部を持つもの。
壺 C	体部半ばから上半部で屈曲する肩部から底部に向けてすばまる体部と、直立あるいは外反する短い口縁部を持つもの。器高10cm以下と小型である。
壺 D	横幅が広い偏平な体部と、頸部のすばまりがほとんど無いまま直立する短い口縁部を持つもの。高台を付す。
壺 TG	細く銅長の体部に、長い口縁部を持つもの。ロクロ水挽成形でつくられている。
壺 H	稜をもって屈曲する肩部から直線的にすばまる体部と、広口で外反しつつ立ち上がり端部を上方につまみ上げる口縁部を持つもの。高台を付す。器高10cm以下と小型である。
壺 K	細長く外反する口縁部をもつ、いわゆる長頸壺。肩部は丸みを帯びるものと有稜のものがあり、高台が付される。
壺 L	倒卵形の体部と、細頸で直立し端部を上方につまみ上げる口縁部を持つもの。
壺 TL	卵形の体部と小平底、外反する口縁部を持つものである。器高10cmと小型である。
壺 Q	稜をもって屈曲する肩部から直線的にすばまる体と、広口で外反しつつ端部を上方につまみ上げる口縁部を持つもの。高台を付す。
壺 X	頸部から肩部にかけては丸みをもち、以下は直線的にすばまる胴長の体部を持つもので、平底である。肩部と底部付近それぞれ2カ所に台形の把手が付されている。
壺 TX	肩の張った体部と、太い頸部を持つもの。口縁・底部形態は不明。
高杯TA	内面にかえりを持つ有蓋の杯部と、短脚を持つものである。
高杯TB	口縁部が屈曲をもって立ち上がる杯部と、2段に区画された長脚を持つものである。
高杯TC	口縁部が屈曲をもって立ち上がる杯部と、短脚を持つものである。
高杯TD	口縁部がなだらかに立ち上がる杯部と、短脚を持つものである。
高杯TE	口縁部がなだらかに立ち上がる大型の杯部と、短脚を持つものである。
横 瓶	横に長い俵状の体部と、その中央に外反する口縁部を持つもの。

名称	器種説明
平瓶	上面が閉じられた偏平な体部に、直線的な口縁部をもつもの。口縁部は上面に付されるもので、位置は中央より側面に寄っている。逆U字の把手・高台を付すものもある。
甕 TA	肩の張った倒卵形の体部と広口で外反する口縁部を持つもの。口縁部の形態は外面に肥厚するもの、外面上下に肥厚するもの、上面が外傾気味に面を持つものなどがある。
甕 TB	体部半ばに最大径をもつ球形の体部と、ほぼ直立する口縁部をもつもの。
甕 C	平底の底部と肩の張った体部を持つ広口の器で、短く直立する口縁部を持つもの。肩幅が器高を上回る。
甕 TE	甕TAの肩部に把手を付すもの。
甕 TX	卵形で長胴の体部と外反する単純口縁を持つもの。



第53図 須恵器器種分類表・分類図



第54図 施釉手法分類図

b手法：底部外面を除く内外面に施釉されているもので、ハケ塗りの単位が観察できる。

c手法：口縁端部のみを釉に浸し、外面底部・内面中央部には釉が及ばないもの。

また、高台の形状には角高台、三日月高台、内彎気味のやや高い高台の3種があり、底部外面にはヘラケズリを施すものと糸切り痕跡を残すものがある。

緑釉陶器 器種には碗、皿があり、総数で8点出土している。色調・胎土・釉調・焼成から大きく次の4群に分けられる。ただし数量的制約から、個体差も分類に反映している可能性があり、直接的に産地や生産時期の特徴を示すものではない。

A群：色調が黄灰色～灰色で、焼成が軟質～硬質のもの。釉調は緑色～淡黄緑色を呈する。

B群：色調が淡青灰色で、焼成が硬質のもの。釉調は淡緑色を呈する。

C群：色調が青灰色で、焼成が硬質（須恵質）のもの。釉調はにぶい緑色を呈する。

D群：色調が褐色で、焼成が軟質（土師質）のもの。釉調は濃緑色～緑色を呈する。

また、施釉の方法・焼成痕跡には、次の2種がある。ただし焼成痕跡については判別に十分な残存率を有するものは少ない。

a手法：内面・外面全体に薄く施されるもの。

b手法：底部を除く内外面に薄く施されるもの。

なお、高台には削り出し高台と貼り付け高台があり、前者の形態には平高台・蛇ノ目高台・輪高台が、後者には輪高台がそれぞれ伴う。貼り付け輪高台の底部には、糸切り痕が残るもの(326)がある。また、陰刻花文をもつもの(237)がある。

黒色土器 黒色土器には内面のみ黒化するA類と、内外面ともに黒化するB類がある。器種には碗・甕がある。碗には高台の付かない碗Aと、高台の付く碗Bがある。

b. 遺構出土の土器類

SK1001 (図版47・写真図版62 ; 326～340) 土師器 (327～330・334～338・340) と須恵器と緑釉陶器 (326) と黒色土器 (331～333・339) が出土している。これらは概ね10世紀後葉を中心とする時期の土器群である。

土師器には皿、甕、罏釜がある。皿 (327～330) は器壁が2～3mmと極めて薄く、口縁端部はナデにより大きく外反する。いわゆる「て」字状口縁の祖形である。白褐色～褐色を呈する。なお、330には「ハ」字状に開く高台がつく。他の個体よりやや器壁が厚い。口径10.7cmの小と、16.5

cmの大の2法量が認められる。甕(336~338・340)には口径12.9~17.0cmの小規格と、25.2cmの大規格の、概ね2法量がある。

緑釉陶器には皿(326)がある。D群に分類できるもので、施釉はb手法である。完形で出土した。貼り付け高台で、内底面には糸切り痕が残る。器壁は厚い。口径10.6cm、器高2.15cm。黒色土器にはA類椀A・椀B、B類椀Bと広口の甕がある。331・332はA類椀Bである。331は摩滅しているが、内面口縁端部付近まで横方向のヘラミガキが施されている。332も同様に見込み部分および内面全体に密なヘラミガキが施されている。333はB類椀Bである。ヘラミガキは内面の3分の1程度である。339はB類の甕で、口縁端部は内側につまみ出されている。なお、この他に図示しなかったB類椀Aがある。

SD2006(図版36;64~67) 土師器(66)と須恵器(64・65・67)がある。66は大型高杯の脚部で混入品とみてよい。64は杯B蓋でa形態。天井部はヘラケズリの後ナデが施されている。口径16.1cm。65は壺K。7世紀後葉。

SD2007(図版36;62・63) 須恵器がある。62は杯Bのa形態で、口径12.8cm。63は壺Kの脚部である。高台には円形の透し孔を持つ。7世紀後葉。

SD2008(図版36・写真図版55;54~61) 須恵器(54~61)と土師器の甕片がある。埋土各層より出土している。須恵器の器種には杯G蓋、杯A、杯B、盤A、甕TA、甕TBがある。杯G蓋(54)の天井部はヘラケズリが施されていない。口径9.6cm。杯Aは口径10.2cm(55)、12.2cm(56)を測る。b形態の杯B(57)は口径16.0cm。甕TB(59)の口縁部はタタキ後ナデ。体部には方向の揃わないカキ目がみられる。大型甕(61)はほぼ完形であるが、焼成時の大きな亀裂がある。口径21.8cm、器高48.0cm。7世紀後葉。

SD2009(図版37・写真図版56;69~84) 土師器(78~81・83・84)と須恵器(69~77・82)がある。埋土上・中層から集中して出土している。7世紀後葉を中心時期とする土器群である。

土師器の器種には、杯C、鍋B、甕Cがある。杯C(78)の口縁部内面には放射状の暗文が施されているが、底部には認められない。外面調整は摩滅により不明。口径15.0cm、器高4.4cm。鍋・甕外面にはいずれも煤が付着している。

須恵器の器種には杯H、杯H蓋(杯G)、杯A、甕TXがある。杯H(73)は唯一溝下層から出土したものである。口径9.5cm。杯H蓋は口径10.7cm、器高2.8cm(71)、同11.1cm、3.6cm(72)を測る。69・70は杯蓋として図化した。杯Gの可能性もある。口径8.8cm、器高3.6cm(69)、同9.4cm、3.0cm(70)。杯A(74~77)には口径10.0~13.0cmのものがある。甕TX(82)は、類例の少ない形態のものである。プロポジションは土師器甕Cに近いが、タタキ工具を用いて成形されている。焼成はかなり軟質で灰白色を呈する。完形で出土している。

SB3003(第55図;1~10) 土師器(10)と須恵器(1~9)がある。埋土内のものを一部に含むが、竪穴住居床面出土遺物群である。

土師器の器種には甕(10)ほか甕体部片がある。摩滅が著しく、調整は観察できない。

須恵器には杯A、杯B、椀A、壺蓋、小型壺、高杯TD、高杯TEがある。杯A(4・6)は、

第2節 出土遺物

口径11.4cm、器高3.2cm（4）、同10.2cm、3.9cm（6）を測る。いずれも底部はヘラ切り後ナデ。杯Bにはa・b形態があるが、後者は混入品と考えられる。口径12.0cm、器高4.35cm（3）。高杯TD・TEの杯部高は4.0cm（7）、3.8cm（8）とほぼ変わらないが、口径の大小（20.0cm、13.8cm）がある。7世紀後葉。

SD3006（図版38・写真図版56；85～92）土師器（85）と須恵器（86～92）がある。ほとんどのものが溝最下層から出土している。

土師器には杯TCがある。通例の杯Cとは異なり、口縁端部に面を持たない。内面には放射状暗文が施されるが外面には無い。外面調整は摩滅により失われている。口径14.1cm、器高3.7cm。

須恵器の器種には杯、杯A、壺K、鉢A、鉢E、把手付の甕Cがある。杯（88）は古墳時代のもので、5世紀後半代のものである。混入品。杯Aは2点ある。口径11.1cm、器高3.6cm（86）、同12.2cm、3.3cm（87）を測る。鉢A（89）の体部下半にはヘラケズリの後ナデが施されている。口径19.4cm。把手付甕（92）の把手は、粘土紐の輪を横方向に取り付けたものである。7世紀後葉を中心時期とする土器群である。

SD3007（図版38・写真図版56；93～95）土師器（95）と須恵器（93・94）がある。埋土各層から出土している。土師器には甕A（95）がある。内彎気味に立ち上がる単純口縁に、球形の体部をもつ。内外面ともハケ調整である。底部内面は薄くヘラケズリが施されているが、器壁そのものは厚い。口径24.2cm、器高約24cm。

須恵器の器種には壺蓋、杯Bがある。壺蓋（93）は口径7.6cmと小さく小型壺に伴う可能性が高い。偏平なつまみを持つ。杯Bはやや外反気味に広がる杯部に高台が付されている。口径12.2cm、器高4.0cm。7世紀後葉。

SD3008（図版38；96～103）土師器（96）と須恵器（97～103）がある。埋土内各層から出土している。

土師器甕A（96）は、端部つまみ上げの口縁をもつもので、体部は比較的球形に近い形態を呈すると考えられるが、95に比べて肩部の張りが弱く、器壁も薄い。口径16.0cm。

須恵器の器種には杯H蓋、杯G/A、杯G蓋、杯B、鉢Dがある。杯H蓋（100）は、口縁部がやや外反気味に開くため蓋として図化した。杯Gとの判別は難しい。底部はヘラ切りのままである。口径10.6cm、器高3.1cm。杯G（97）は口径8.9cm、器高3.0cm。底部にはヘラ切り時の段差がそのまま残る。杯A（98）は口径12.2cm、底径3.7cmを測る。杯Bは2点ある。101の口縁部は大きく外反気味に開くが、成形後に何らかの圧力が加わって開いたものと考えられる。口径15.0cm、器高2.7cm（101）。同15.5cm、4.3cm（102）。鉢Dと考えられる103は、体部が浅く鉢状のものであるが底部形態は不明である。口径21.8cm。7世紀後葉。

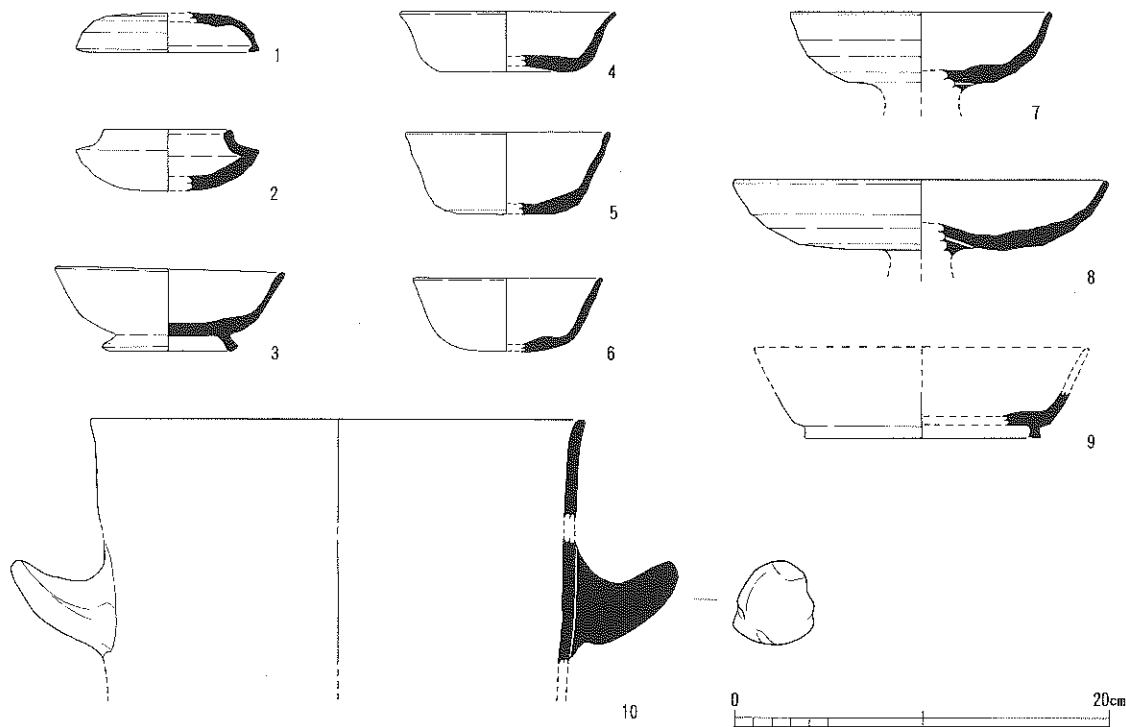
SD3009（図版39～41・写真図版57・58；104～142）土師器（104～108）と移動式カマド（135・136）と須恵器（109～134・137～142）がある。掘立柱建物群に近いため、多くの土器が出土している。溝埋土の中位に遺物の集中は認められたが、上下層からも一定量出土している。一時廃棄ではないが、埋没時間はわりあいと短かいとみてよい。

土師器には、杯C、皿A、甕A、鍋Aがある。杯C (104) は内外面とも摩滅が著しく、器面調整は失われている。口径約14.8cm。同じく皿A (105) も摩滅が著しく、内外面の調整は不明。口縁端部は軽くつまみ出され水平である。口径18.8cm、器高2.4cm。小型の甕A (106) は、内面に顕著な指頭圧痕を残すものである。外面はハケ。口縁端部はややつまみ上げられている。口径16.7cm、器高17.0cm。

須恵器には、杯H蓋、杯G/A、杯蓋、壺C、壺K、壺TL、高杯TA、高杯TC、高杯TE、平瓶、横瓶、鉢A、盤A、甕TA、甕Cがある。杯H蓋 (109~112) は、いずれも天井部と口縁部の境が明瞭に屈曲しないもので、杯Gとなる可能性のあるものを含む。天井部はヘラ切りのままのもの (111・112) と、ナデを施すもの (109・110) がある。109・110・112の口縁端部はヨコナデにより垂直気味に弱く屈曲する。口径12.9cm、器高3.8cm (109)、同11.8cm、3.7cm (110)、同10.6cm、3.2cm (111)、同9.1cm、3.0cm (112)。杯A (113~120) は、口径10.1~12.6cm (平均11.2cm)、器高3.2~3.9cm (平均3.5cm) を測るもので、どれも口縁部はやや外反し緩やかに広がる。ナデを施すもの (118~120) と底部はヘラ切りのままのもの (113~116) がある。また、ヘラ切りには回転によるもの (118) がある。杯Bにはa形態 (121) とb形態 (122) がある。口径13.0cm、器高4.3cm (121)、同13.8cm、4.5cm (122)。杯蓋はb形態のもののみで、天井部にはいずれもヘラケズリが施される。123は口径11.1cmで杯G/A蓋、これ以外は口径12.5cm (124)、14.9cm (125)、15.9cm (126) で杯B蓋と考えられる。

横瓶は2点ある。128は樽型で側面との屈曲の境目には稜がある。一方139は俵型で側面との境

SB3003



第55図 SB3003出土土器実測図

第2節 出土遺物

目は明瞭でない。高杯には3型式ある。高杯TA(129)は杯部が浅く器高も低い。口径は9.4cm、器高は3.8cm。高杯TC(131)は比較的大型で脚部もやや長い。口径は23.0cm、器高は10.1cm。盤A(138)は口縁外面に薄い粘土を貼り付け肥厚させるものである。同様の口縁を持つ鉢E(90)がある。甕TA(141)の底部には敲打による穿孔が行われている。壺TL(143)は、ロクロ水挽きでつくられている。

移動式カマドは2個体ある。このうち136は破片化して溝内に散乱していたものの、全体の9割程度は残存していた。135は破片が少なく、全体の2割程度が残存している。両者の法量は概ね等しく、胎土や焼成の状況では個体識別が不可能な程に似ている。136は断面楕円形で立面円錐形の体部を持ち、上面に開口部と前面に焚口を持つ。焚口周囲には大きな鏝が付されている。また、体部外周囲には横方向のタガを持ち、その両端には三角形の把手が付されている。内外面ともにハケ目が顕著に残るが、内面付近は指ナデが残る。法量は横幅が54.3cm、奥行きが32.5cm、器高は42.2cmを測る。上部の開口部は135に比べてやや狭い。なお、内面には薄く煤が付着しているため使用されたことは確かであるが、状態としては多回数の使用を窺うようなものではない。135は136とほぼ同形態であろう。上部の開口部は長辺側で28.5cmを測る。

SD4002(図版43;181~195) 土師器(181~183)と須恵器(184~195)がある。いずれも埋土より出土したものである。

土師器には杯Cと皿Aがある。杯C(181)は内面に放射状の暗文を持ち、口径11.0cm、器高2.9cmを測る。182は摩滅により暗文・調整は失われている。口径は13.6cm、器高は2.5cm。皿A(183)は口径が21.4cm、器高は2.3cm。

須恵器には杯H蓋あるいは杯G、杯A、杯B、皿A、壺B、壺K、甕TBがある。杯H蓋とした187の口径は9.9cm、器高は3.6cm。杯A(188~191)には稜をもって屈曲するものとなだらかに屈曲するものがある。口径は12.2~13.2cm程度、器高は3.4~4.2cm程度。杯Bはb形態で口径は17.4cm、器高が4.9cm。7世紀後葉から8世紀代。

SD4003(第56図;1) 須恵器の壺Lがある。高台を持つもので口縁を欠く。

SD4004(図版44・写真図版60;211~241) 土師器(211~218)、須恵器(219~233・238)、緑釉陶器(234・236・237・239)、灰釉陶器(235・240・241)がある。7世紀後葉~8世紀と9~10世紀のものがある。

土師器には杯A、杯B、皿A、甕C、小型甕がある。杯A(212・213)は口縁部内外面ともにヨコナデを施し、底部をナデ調整するものである。皿A(211)は摩滅が著しく調整が不明。杯B(216)は内面に2段の放射状の暗文をもつ。外面は不明。口径は19.9cm、器高は4.8cm。皿B(214)の内面にも放射状の暗文が認められる。甕C(217)は頸部のしまりが緩く、つまみ上げられた口縁端部は圧力により内傾している。小型甕(218)は手づくねで成形されており、器壁は0.8cmを測りかなり厚い。被熱痕跡はない。

須恵器の器種には杯A、杯B、杯B蓋、皿A、皿B、壺D、壺L、高杯TE、甕TB、甕TEがある。杯Bにはb形態(225・228)とc形態(224・226・227・229)がある。器高・口径で法量

を4分することが可能である。238は杯B蓋で、自然釉が広範囲にかかっている。

緑釉陶器には椀(234・236・237)と皿(239)がある。椀には2破片あるが、釉調から別個体であるとみられる。236はC群である。施釉は残存部については内外面ともに施されている。口縁端部内面には沈線が認められる。237は削り出しの輪高台を持つもので、高台内外高が異なっている。A群でa手法に分類できる。内面には陰刻花文が認められる。また内面には重ね焼きの痕跡が残る。239は削り出しの蛇の目高台を持つもので皿と考えられる。A群でb手法。234は削り出しの平高台を持つもので、同じく皿である可能性が高い。極めて軟質でD群でb手法に分類できる。

灰釉陶器の器種には椀、皿、小瓶がある。椀(235)は外面下方に大きな面を持つ三日月高台を持ち、b手法に分類できる。底部内面には塗り残された部分がある。器壁は薄い。240は皿の一部で三日月高台を持つ。b手法であり、重ね焼きの痕跡が明瞭に残る。底部外面にはヘラケズリが施されている。小瓶(241)はロクロ水挽き成形で、底部には糸切り痕が残る。釉は比較的厚く、流しかけられている。

SD4005(図版41・42・写真図版59;144~180)土師器(144~146)と須恵器(147~180)がある。

土師器には皿A、甕C、甕がある。皿A(144)は内外面ともにヨコナデ、ナデ調整のみ。145は甕で把手は失われている。甕C(146)は単純口縁であるが、強く外反する。

須恵器の器種には杯H蓋、杯A、杯B、杯B蓋、皿A、高杯TE、盤A、鉢TA、甕TAがある。杯H蓋(147~149)はいずれも口縁端部がヨコナデにより垂直気味になるもので、口径が10.6~11.0cm、器高は2.8~3.3cmを測る。杯A(150~161)は口径が10.0~12.6cm、器高が3.2~3.7cmを測る。口径にはやや幅があるが、法量区分が認められる程の明瞭な分化はない。杯Bにはa形態(162~165・174・175)、b形態(172・173)、c形態(166・171)がある。また、口径の大小があり、小規格のものは口径が13.5cm、器高が4.4cm、大規格のものが口径は15.3cm、器高は4.0cmを中心とする。杯B蓋はa形態のもの(168・169)とb形態のもの(170)がある。鉢TA(178・180)は鉢Aを胎土がやわらかい間に変形させたもので、特に180はずいぶん歪んでいる。両者共に底部外面にはヘラケズリを施す。7世紀後葉~8世紀後葉。

SD4006(第56図;7・8)須恵器の高杯TAと杯Aがある。

SD4007(第56図;2)須恵器の平瓶がある。口縁部を欠く。胎土がカオリン質の高い灰白色を呈し、焼成が硬質である。猿投産と考えられる。7世紀中葉から後葉。

SD4008(図版43・写真図版60;196~203)須恵器があり、器種には杯A、壺Kがある。杯は口径10.6~12.2cm、器高3.2~3.8cmである。瓦製の土馬(202)が出土している。7世紀後葉。

SD4009(第56図;10・11)須恵器があり、器種は杯B、高杯TCがある。杯B(11)はa形態で口径が17.6cm、器高は5.0cmを測る。7世紀後葉。高杯TCは7世紀前葉。

SD4010(図版43・写真図版62;204~210)須恵器があり、器種には杯A、杯B、杯B蓋、鉢がある。杯A(204~207)の口径は9.8~12.6cm、器高は3.1~4.3cm。杯B(210)、同蓋(209)

はいずれも口径17.4cmを測る。杯Bはb形態。鉢(208)の底部形状は不明。7世紀後葉。

S D4011(第56図;3~6) 土師器(6)と須恵器(3~5)がある。土師器甕は小型で厚手のものであるが、体部内面下半にはヘラケズリが施される。須恵器杯H蓋(3)は口径11cm、器高2.6cmを測る。4は口径が10.4cm、器高は3.4cm、5は口径が12.4cm、器高は3.4cmを測る。7世紀後葉。

S D4012(図版47・写真図版62;311~325) 土師器(324)、須恵器(311~314・322・323)、緑釉陶器(316)、灰釉陶器(315・317~321)がある。S D4012には上下層があり、発掘調査時において両者の分別取り上げが困難であったため、ここでは一括して扱うこととした。概ね7~8世紀のもの(311~314・323)と9世紀~10世紀のもの(315~322)に分かれ、基本的には前者が下層に後者が上層に伴うと理解してよい。なお、須恵質の土馬(325)と帯金具の巡方が出土している。下層に含まれる遺物である。

土師器には罽釜(324)がある。体部にはタタキ痕跡が残る。茶褐色を呈する。

須恵器には杯A、杯B、壺A、壺、甕TAがある。杯Bはb形態のもので、口径15.4cm、器高3.3cm(313)、同16.6cm、4.4cm(314)を測る。

緑釉陶器皿(316)はB群でb手法、貼り付けの輪高台を持つ。輪高台底面は有段状である。口縁端部は外側へ軽くつまみ出されている。内外面全体に単位の細かい密なヘラミガキが施されている。口径は14.3cm、器高が2.7cm。

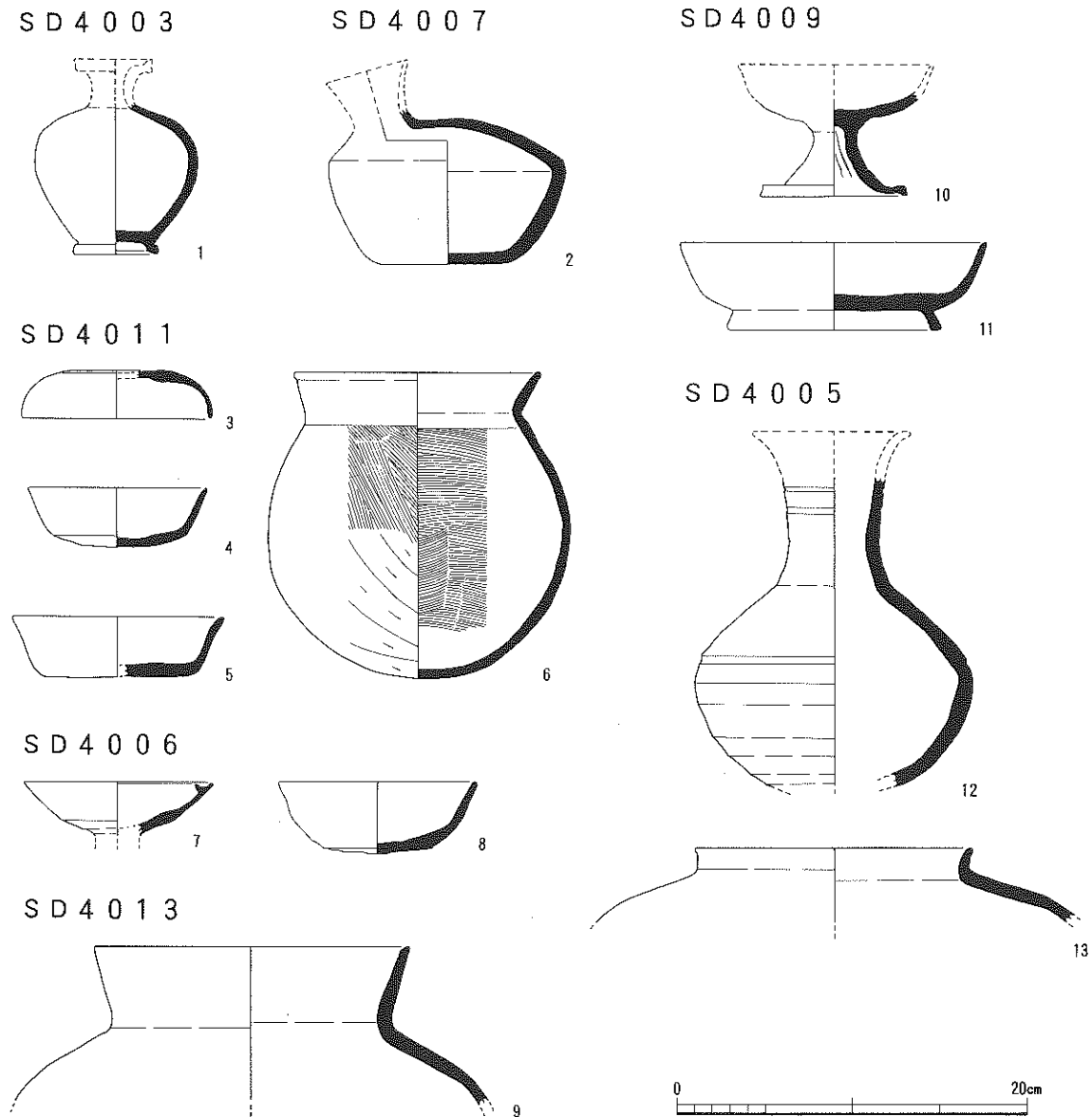
灰釉陶器には碗、皿、小瓶がある。317はc手法で三日月高台を持つ。底部には丁寧なヘラケズリが施されており器壁も薄い。318はc手法で断面三角形に近い角高台を持つ。底部外面には糸切り痕が残っている。器壁も厚い。319はa手法で釉層が厚い。短い角高台を持つ。口縁端部は外方に短くつまみ出されている。外面は、底部も含め全体にナデが施されており、平滑に仕上げられている。なお、内面には重ね焼きの痕跡はない。口径15.1cm、器高4.6cm。320はc手法で三日月高台を持つ。底部外面には糸切り痕をそのまま残す。口径15.7cm、器高4.6cm。皿(315)はc手法で三日月高台を持つ。口径は11.6cm、器高は2.6cmを測る。小瓶(321)は、体部上半のみに施釉されている。

S D4013(第56図;9) 須恵器甕TBがある。

S X5001(図版45・46・写真図版61;242~310) 土師器(242~278)、須恵器(279~304)、灰釉陶器(306・307)、緑釉陶器(308)、黒色土器(309・310)、白磁(305)がある。概ね9世紀代を中心とする土器群で、10世紀のものも含まれる。

土師器の種類には杯A、碗A、皿A、甕A、鍋Aがあり、図示しなかったものに高杯脚部片、杯蓋つまみ片がある。

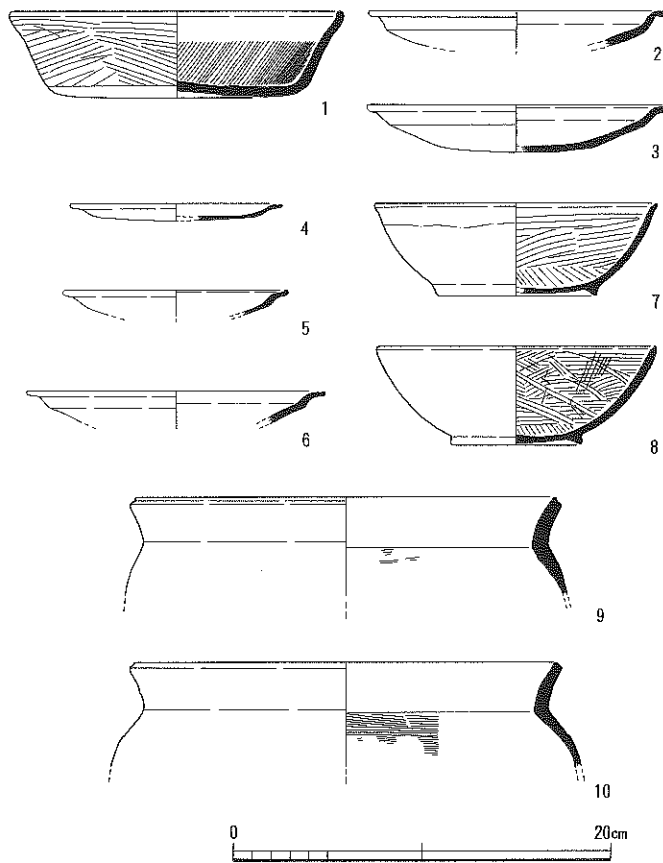
杯A(242~246)はいずれも内外面ともにナデのみで調整されているもので、中には端部付近に1条の強いヨコナデを持つもの(246)がある。法量は口径13.6~14.4cm、器高3.3~3.8cm程度であり偏差が少ない。端部の形態には単純に収めるものと、内傾する面を持つもの(244)、内側にやや肥厚させるものがある。



第56図 溝出土土器実測図

椀A (247~256) は、杯Aに比べて平底がやや狭く口縁部の傾斜が緩い。摩滅のため調整を観察できない個体が多いが、基本的には内外面ともにナデ調整のみである。口縁端部付近に1条の強いヨコナデを持つもの(247・250)が含まれている。法量は口径が12.1~14.7cm、器高は2.7~4.6cmの間にあり、器高の高い252と低い253を除けば法量分化は認めがたい。口縁端部の形態は単純に収めるものがほとんどであるが、内面に肥厚するものも含まれる。

皿A (257~268) は杯Aや椀Aと比べて法量差が大きい。また、本器形についても摩滅が進んでいる個体が多いが、概ねナデ調整のみとみられる。形態的には口縁部が屈曲をもって単純に立ち上がるもの(257~262・264・266・267)と、緩い屈曲をもって立ち上がり口縁端付近にヨコナデによる1段のくぼみが認められるもの(263・265・268)がある。両者は型式的な差と考えられる。口径には11.2cm程度の小、14.3~16.2cmの中、17.5~18.8cmの大的3種があるものの、器



(1; S K5281, 2・3; S K5383, 4~10; S K5325)

第57図 土壌出土土器実測図

高は1.5~2.0cmと大きな差はない。口縁端部の形態には単純に収めるものと、内側に肥厚するものがある。

甕A (269~276) の口径には21.8~22.9cmの大、16.0~18.6cmの中、12.3~13.8cmの小の3種が認められる。体部成形は基本的にはタタキによってなされ、その後に内外面にハケ調整するものがある。タタキは縦方向に残るものがほとんどである。内面はナデのままのものと、部分的にハケを施すものがある。ハケは頸部付近にのみ施されている傾向がある。なお、270の口縁部内面にはタタキ痕が残る。

須恵器の種類には杯A、杯B、杯蓋、皿A、壺TG、壺H、壺L、壺X、鉢D、平瓶、甕TA、杯蓋の裏面を利用した転用硯がある。この他にも壺Kなどの破片がある。

杯A (279~284・286・287・289・290) は口径が10.8~11.8cm程度の小、12.4~13.7cmの中、16.6~17.4cmの大的3法量が認められる。器高も小と中が3.2~4.2cm、大は3.8~4.7cmと法量分化が明瞭である。形態的には小は底部から口縁部の屈曲が急なものが多く、法量が大きいものほど外傾気味になる。底面は全てヘラ切り後にナデ調整。なお、杯Aについては焼成が甘く軟質のものも多く、土師質に近いものも含まれている。この様な焼成状態にあるものは、皿を除く他の器種にはない。

杯B (292~296) は総てc形態である。法量の分化は明瞭ではないが、口径12.6cm程の小、13.8~16.4cmの中、17.6cm程の大的3法量があるものとみられる。杯蓋 (285・291) はc形態のみで、杯Bの法量小・中と対になるものと考えられる。

皿A (288) は口径14.8cm、器高2.8cmを測る。焼成は軟質である。壺TG (299) はいわゆる壺Gの形態に似るが、同型式に顕著なロクロ水挽きによる体部の凹凸はなく、肩の張りも強い。底面には糸切り痕を持つ。壺L (298) の底面も同様である。壺X (302) は体部肩と中位付近に互い違いの把手を持つものである。底部は平滑にナデが施されている。

緑釉陶器には皿 (308)、灰釉陶器には椀 (306・307)、白磁には椀 (305) がある。308は、口縁端部付近は強いヨコナデにより屈曲し外反するもので高台が付く。C群。306の施釉方法はb手法で、底部外面には釉が及んでいない。307はc手法で、底部内外面ともに釉は及んでいない。

高台はやや高く断面形は台形である。底部外面にはヘラケズリが丁寧に施されている。白磁碗は混入品であろう。

黒色土器には碗A (309・310) がある。いずれもA類であるが、摩滅のため調整は不明。外面は基本的には土師質同様の褐色を呈するが、口縁端部付近は黒化している。309は口径16.1cm、器高4.8cm、310は口径20.3cm、器高6.1cmを測る。

SK5281 (第57図; 1) 土師器杯Aがある。内面には1段の放射状の、外面には粗い横方向の暗文をもつ。内面底部には認められない。口径18.2cm、器高4.8cm。8世紀前葉。

SK5325 (第57図; 4~10) 土師器(4~6)と黒色土器(7~10)がある。ここに図示したもの以外にも、整理箱半分ほどの細片化した土器片がある。

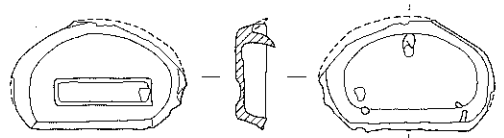
土師器には皿と甕がある。皿(4~6)は器壁厚は3mmほどであり、SK1001のものよりやや厚い。胎土は橙褐色~褐色を呈し比較的变化に富む。また、口縁端部の内側への肥厚がやや大きい。口径には15.8cmの大、11.4~12.0cmの小の概ね2法量がある。

黒色土器の器種には碗Bと甕があり、A・B類の両者がある。碗B(7・8)はともにA類で、内面には見込みから口縁端部まで密にヘラミガキが施されている。7の口径は14.8cm、器高5.0cm、8の口径は14.8cm、器高は5.2cmを測る。10世紀後葉。

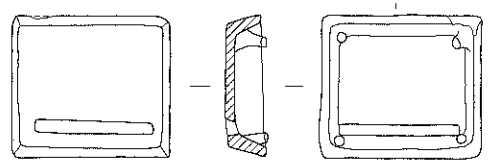
SK5383 (第57図; 2・3) 土師器皿がある。SK5325のものと似る。2の口径は15.8cm、3の口径は16.0cm、器高2.4cm。10世紀後葉。 (吹田)

c. 金属製品

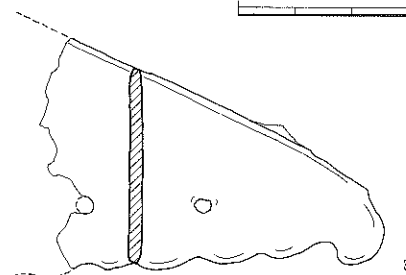
丸 柄 (第58図・写真図版64; 1) 帯金具である。銅製品。長さは3cm、幅は上端を欠くが約2.05cmを測る。透し孔は1.7cm×0.5cmの大きさに仕上げる予定であったようだが、裏面まで貫通していない。鉸足も3本の内1本は鋳出しきれていない。周縁には湯バリが比較的多く残る。未製品あるいは失敗品の可能性が指摘できる。SD4012出土。



巡 方 (第58図・写真図版64; 2) 帯金具である。銅製品。概ね正方形を呈する。裏面には4本の鉸足を鋳出するが、2本が欠失している。長さ2.8cm、幅2.5cm、厚さ0.2cm、透し孔2.1cm×0.25cmを測る。表面には砂粒が付着し未製品の可能性が指摘できる。SX5001出土。



不明鉄製品 (第58図・写真図版64; 3) 全体形状は不明で、用途は判然とせず上下の位置も不明である。図上で下にした部位は波状に切り込まれている。厚さは2mmである。火打金の可能性が考えられる。これまでの出土事例と形状・厚さが



第58図 金属製品実測図

異なる。S D4012出土。

銭貨（第59図・写真図版64） 隆平永寶が9枚、紐に通された状態で出土している。この銅銭は国産古代銭貨として4番目に鑄造されたもので、初鑄は延暦十五年（796）である。いずれもほぼ完存品である。総じて鑄上りはよい。孔内に有機質が残るものが多く見受けられる。範傷から同範と認定できるものはない。S K1001出土。

d. 土製品

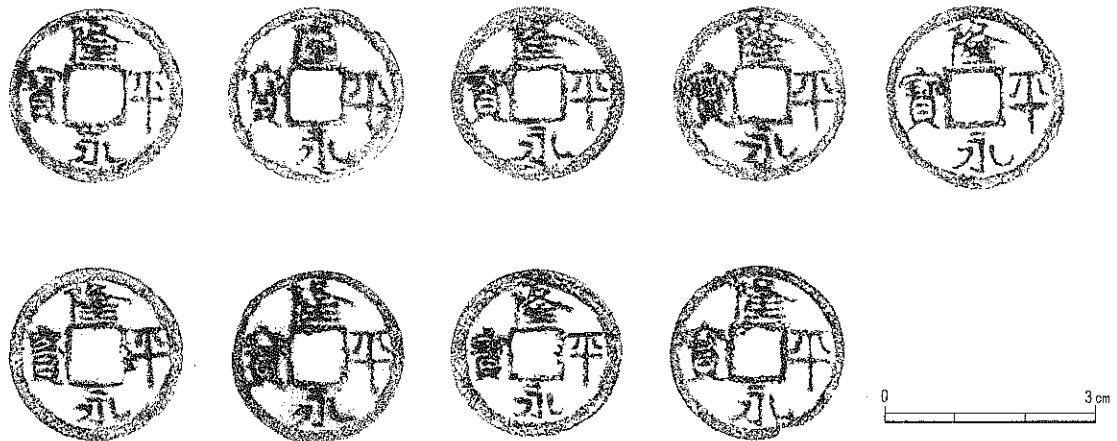
土馬（図版43・写真図版60；202、図版47・写真図版62；325） 202は馬装した大型の土馬である。尻尾、足、胴体部の馬具は脱落する。尻尾は斜め上方に反りながら立ち上がる。腹部での最大幅は6.6cmを測る。立て髪は基部が2cm、先端が0.4cmの厚さを有する。残存部での計測値は全長約24cmを測る。目・鼻穴はヘラ状工具によって穿たれる。目は先端が半円形のもの、鼻穴は先端が円形のものである。頭頂部分の立て髪の先端は、突起状に表現され、結び飾風の表現がなされているものと思われる。耳は貼り付けられている。下腹部と尻部に棒状の刺突痕跡が認められる。表面は炭素が吸着し黒灰色を呈する。S D4008出土であり、共伴土器から7世紀後半代のものと考えられる。

325は202よりも大型の馬装した土馬である。いずれも定型化する以前のものであり、表現が立体的である。頭部、胴部下半、脚部などは破損して失われており、頸部の一部と胴部上半部分のみが残存している。立て髪は粘土板の貼り付けおよび線刻で、手綱は円形スタンプ文で表現されている。頸部裾付近に突起状粘土粒が貼り付けられているが、何を表現したものか不明である。また、前者とは成形方法が異なっており、本土馬では胴部が粘土板を丸めて作られているため、中空部分が大きい。内面には成形時の粘土しぼり目が残る。須恵質を呈する。S D4012出土であり、7世紀後半のものと考えられる。

土 錘（図版36；68） 1点出土している。土師質で、直径3.0cm、長さ7.0cmを測る。芯棒に粘土を巻き付けて成形している。S D3005出土。

e. 瓦磚類

今回の発掘調査で出土した瓦磚類は整理箱にして約30箱分ある。最も多いのが平瓦で、出土数



第59図 隆平永寶拓本

の半数を占め、次いで丸瓦・軒丸瓦・軒平瓦・磚の順となっている。平瓦・丸瓦は摩滅が著しいために、その諸特徴を述べるには自ずと限界があるが、判断できる範囲で述べていく。なお出土地としてはIVトレンチからのものが約8割を占める。

軒丸瓦（図版48・写真図版63；1～3） 2種類4点出土している。白鳳期のもの（1～3）と平安時代後期のもので、前者はいわゆる「川原寺式軒丸瓦」で後者が「河内系軒丸瓦」である。

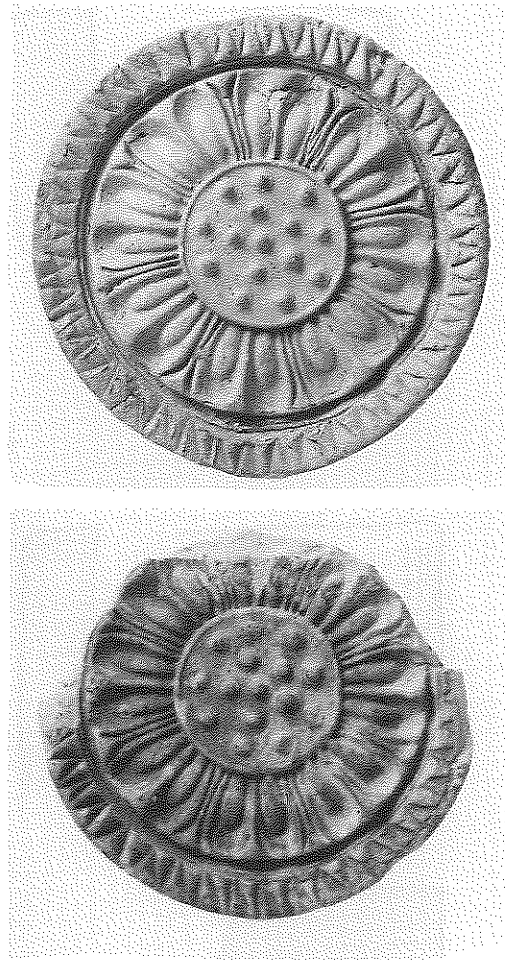
まず前者からみていく。複弁八弁蓮華文を主文とするもので、弁端は反転し、弁の彫りこみは比較的深い。中房はやや突出し、外周には界線がめぐる。蓮子は1+5+9。外縁には面違鋸歯文が巡る。直径約20cm。瓦当厚は3cm程である。胎土は精良で、焼成は硬質と軟質とがあり、色調は前者が青灰色、後者が乳白色を呈する。瓦当と丸瓦接合部強化のためにヘラによりキズを付けている。大鳳寺跡創建瓦と同範であり、大鳳寺跡出土の瓦よりも文様がより鮮明にみられることから、今まで知られている大鳳寺跡出土例より先行するものと思われる。

次に後者をみる。外縁と複弁蓮華文の一部が確認できるのみの断片であるが、河内系軒丸瓦と認識するには十分である。弁が互いに接し、子葉周囲に圏線を有するものである。胎土は精良、焼成は良好、色調は淡青灰色である。図示していない。

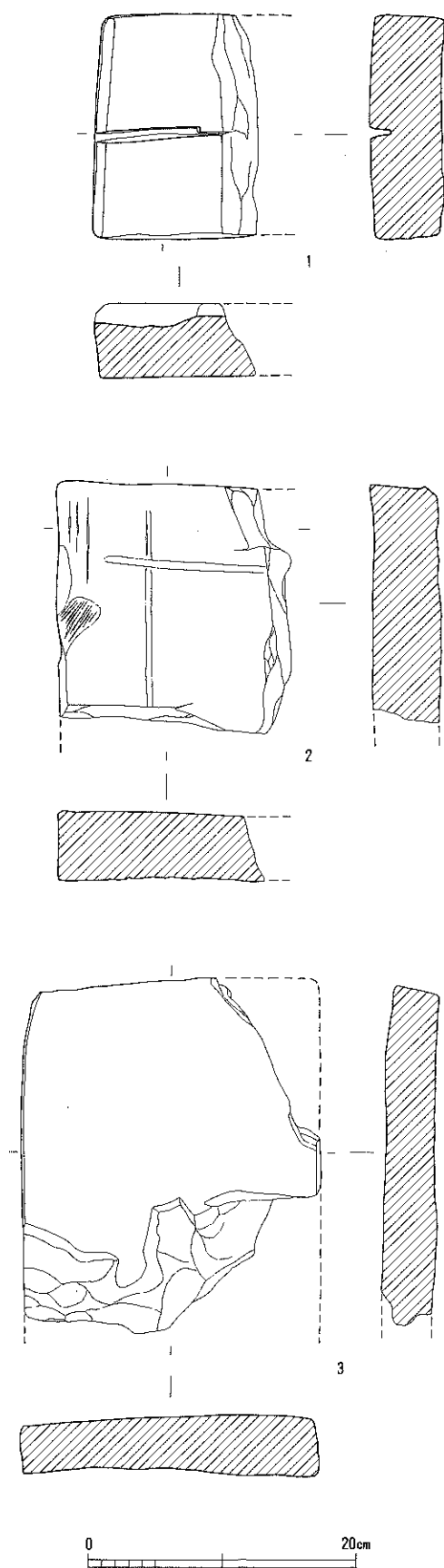
軒平瓦（図版48～50・写真図版63；4～11） 2種類13点が出土している。重弧文軒平瓦（4～9・11）と唐草文軒平瓦（10）の2種類で、前者は川原寺式軒丸瓦と組み合うものである。

重弧文軒平瓦は、いずれも型挽きの四重弧文である。顎部の形態はすべて段顎である。顎部の形態から2種類（A・B）に分けられ、さらにB類としたものは顎部側面の面取りの状況から2種類（a・b）に分別される。A類（8）は、段顎であるがその段差は極めて低い。顎部の幅10.5cm、厚さ3.5cmを測る。青灰色。硬質。B類（4～7・9・11）については、いずれも大鳳寺跡出土のもの¹⁾と合致する。顎部の幅は8.5cm前後で、厚さ3.5～4cm前後を測る。

唐草文軒平瓦は、幾何学的な唐草を表現しており極めて稚拙である。凹面には模骨の痕跡及び布目痕がみられ、桶巻き作りによる成形であることが窺える。凸面は縄タタキの後、広端部から19cm付近のところまで横方向のケズリを行い、縄タタキを消している。胎土は精良で、色調は灰白色。顎の形態は曲線顎である。



第60図 大鳳寺跡出土軒丸瓦(上)と菟道遺跡出土軒丸瓦(下)



第61図 磚実測図

丸瓦（図版50；12）計251点出土している。ほぼ全体の様相が窺えるものは溝SD3007から出土した1点しかなく、ほとんどが破片である。このため、玉縁の有無により大きくA・Bの2型式に分類した。

丸瓦Aは、玉縁のない行基式丸瓦。今回出土丸瓦の大半がこのタイプである。ここでは前述のSD3007より完形で出土した丸瓦の諸特徴を述べる。全長は39.5cmで、広端幅19.3cm、狭端幅11.3cmを測る。胎土はやや粗く、色調は黒灰色を呈し、焼成はやや軟質である。凹面には布目跡が残る。凸面はナデ消しである。

丸瓦Bは、玉縁を有する玉縁式丸瓦。出土数は極めて少なく、また細片で極めて残りは良くない。このため、製作技法に関する詳細な情報は得られない。

平瓦（図版50；13～15）362点が出土したが、全体の様相を窺える資料はわずかしかない。凸面タキ具の違いにより大きくはA・Bの2種類に分別される。

平瓦Aは凸面に格子タキを施すものである。出土数258点で、全体の71%を占める。いずれも凹面に横骨の痕跡があり、桶巻き作りによるものと判断される。中には横骨の凹凸を無くすために、凹部を削って平板状にしているものが見受けられる。格子タキの原体は、確認した限りでは7種類認められる。基本的には1枚の瓦に1種類のタキ原体が対応するが、複数のタキ原体が見受けられるものもある。胎土は全体的にやや粗い。焼成は軟質で、色調は淡灰色のものが多い。

平瓦Bは凸面に縄タキを施すものである。計104点、全体の29%を占める。縄タキの痕跡は平瓦の側面に対して概ね平行につく。胎土は精良、焼成は硬質で、色調は青灰色のものが多い。（浜中）

磚（第61図・写真図版64；1～3）3点出土しているが、形状と規格が異なる。いずれも焼成は軟質で発色は赤褐色を呈する。

第61図; 1は長辺12cm以上、短辺16.8cm、厚さ5.5cmを測り、長方形を呈する。3点の中で厚手かつ小型品である。表裏は明確でないが、片面に模骨状の押圧痕が残りかつ未調整であるため、こちらが裏面であると考えられる。表面側中央には、ヘラ状の工具で深く刻目が入れている。側面にはヘラ状の工具による切り離し痕跡が残る。SD3006出土。

2は一辺17cm以上×18.3cm以上、厚さ5.0cmを測る。この個体にも片面に模骨状圧痕が残っており、この面が裏面と考えられる。ただし表面側にも少し板状圧痕・ヘラの押圧痕が認められる。側面にはヘラ状工具による切り離し痕跡が残る。SD3006出土。

3は長辺26.3cm以上、短辺22.2cm以上、厚さ3.6~4.6cmを測り、長方形を呈する。未調整面が片面あり、こちらが裏面であると考えられる。模骨状板の押圧痕は認められない。側面にはヘラ状の工具による切り離し痕跡が残る。SD3009出土。

(吹田)

C. 鎌倉時代

中世墓SX5005(図版51・写真図版62; 1~36) 土師器皿が5枚出土している。大小の2種類に分けられ、大が1枚(35)、小が4枚(31~34)である。

35は口径が14.6cm、器高が3cmを測る。口縁部は内彎気味に立ち上がり、端部は丸くおさめている。一段ナデを有する。底部に切り込み円板技法の痕跡が認められる。淡橙色。

小の法量を順に示していくと、31が口径9.2cm・器高1.5cm、32が口径9.6cm・器高1.9cm、33が口径9.6cm・器高1.2cm、34が口径10.1cm・器高1.9cmとなり、外観上でのばらつきはほとんどなく、規格性が存在する。32は2段ナデ状を呈するが、それ以外は1段ナデを施すものである。底部にいずれも切り込み円板技法の痕跡が窺える。これらは、作りの精粗としての識別がくっきりと見てとれる。精製品が32・34、粗製品が31・33である。色調は32が赤褐色、34が黄褐色を示し、34は胎土に砂粒を多く含んでいる。31・33は灰褐色を呈する。31については、底部ほぼ中央に焼成後の穿孔と思われる痕跡が認められる。33については、底部の真中の部位が残存していないため、明らかではない。砂粒を比較的多く含む。

白磁碗(36)は1点で、横田・森田両氏分類のⅡ類³⁾にあたる。口径15.6cm、器高6cmを測る。体部外面は比較的丁寧なヘラケズリ調整を施し、口縁部には小さな玉縁を有する。高台は外面を直に、内面を斜めに削り出したものである。釉はほぼ全体に薄くかけられるが、体部外面下部の約4分の1は施釉されていない。釉全体に貫入がみられる。釉の色調は淡オリーブ色である。

鉄釘は計30本出土している。その内、全体の形状が概ね把握できるものは12本ある。いずれもほぼ中程で、大きく折れ曲がっている。釘全体の本来の形状を推定すると、長さは、最短が4.0cm、最長が5.8cmであり、若干ながらばらつきが認められる。平均値は4.7cmである。幅は3~4.5mmの範囲におさまる。断面はほぼ四角形を呈する。

以上の出土遺物の年代については、土師器皿は概ね13世紀後半代の年代³⁾を与えることができ、白磁碗についてもこの年代観に齟齬はない。

(浜中)

【註】

第I章 序言

- 1) 宇治市教育委員会 『宇治市遺跡地図』(改訂版) 1986
- 2) 門ノ前古墳が所在する一帯の公称字名は大字「菟道」字「門ノ前」である。これは昭和20年2月20日、京都府告示第132号として京都府知事より広告された名称で、行政上はこの名称が使用されている。ただし、地域では「門ノ前」と通称されることが多く、都市計画図にも通称で記載されている状況にある。この経緯から、これまでに本墳を「門ノ前古墳」と発表しており、この名称で一般にも流布していることから、あえて公称字名への変更は行わないこととした。

第II章 位置と環境

- 1) 「たたかいがわ」とも読むが、『宇治市史』5ではこの呼称が使用されている。

第III章 門ノ前地区の調査

- 1) 三室戸寺子院跡出土のものなどにある。
- 2) 宇治市教育委員会 「下居遺跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第35集 1996
- 3) 山下峰司 「灰釉陶器・山茶碗」『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社 1995
- 4) 森島康雄 「瓦器碗」『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社 1995

第IV章 谷下り地区の調査

- 1) 宇治市教育委員会 『大鳳寺跡発掘調査報告』宇治市文化財調査報告第1冊 1987
- 2) 横田賢二郎・森田勉 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」『九州歴史資料館研究論集』4 1978
- 3) 伊野近富 「製作技法から見た京都系土師皿の伝播と受容」『第16回 中世土器研究会報告資料』 1997

【参考文献】

第II章 位置と環境

宇治市 『宇治市史』1～3 1973～1975

京都府埋蔵文化財調査研究センター 「羽戸山遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第2冊 1982

宇治市教育委員会 『単上り瓦窯発掘調査概要』宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第3集 1983

宇治市教育委員会 「滋賀谷瓦窯発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第10集 1987

京都府埋蔵文化財調査研究センター 「京滋バイパス関連遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第7冊 1987

宇治市教育委員会 『大鳳寺跡発掘調査報告』宇治市文化財調査報告第1冊 1987

宇治市教育委員会 「瓦塚古墳発掘調査概要」『宇治遺跡群』I 宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第11集 1988

宇治市教育委員会 「滋賀谷瓦窯発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第10集 1987

宇治市教育委員会 「三室戸寺子院跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第14集 1989

宇治市教育委員会 『宇治二子山古墳発掘調査報告』宇治市文化財調査報告第2冊 1991

宇治市教育委員会 『西単上り遺跡発掘調査概要』宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第33集 1995

第III章 門ノ前地区の調査

高橋克壽 「器材埴輪の編年と古墳祭祀」『史林』71巻2号 1988

宮本長二郎 『日本の美術No.348 家形はにわ』至文堂 1995

亀井正道 『日本の美術No.346 人物・動物はにわ』至文堂 1995

望月幹夫 『日本の美術No.3 器材はにわ』至文堂 1995

鎌方正樹・中島和彦 「菅原東埴輪窯」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』 奈良市教育委員会 1993

吉岡博之・木村泰彦 「山城地方出土陶棺集成」『長岡京跡発掘調査研究所調査報告書』第1集 長岡京跡発掘調査研究所 1979

森下浩之 「土師質亀甲形陶棺小考」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』 奈良市教育委員会 1993

松本百合子 「耳飾」『古墳時代の研究』8 雄山閣出版社 1991

第IV章 谷下り地区の調査

丸川義広 「横穴式石室の平面形態の分析」『大枝山古墳群』 京都市埋蔵文化財研究所調査報告第8冊 1989

佐藤亜聖 「大和における瓦質土器の展開と画期」『中近世土器の基礎研究』XI 1996

杉本宏 「平等院古瓦の新相—河内系軒瓦の様相・年代・背景—」『平安京歴史研究—杉山信三先生米寿記念論集—』 1993

第V章 まとめ

第1節 菟道門ノ前古墳の検討

A. 古墳の概要と評価

古墳の詳細については、前章までに述べてきたとおりである。ここでは、その内容を再度整理し、基礎的な項目の分析を行いたい。

a. 古墳の構造

墳形と規模 菟道門ノ前古墳は今回の調査で新発見した古墳である。前方後円墳であり、後円部南側くびれ付近に平面長方形の造出を有する。ただし墳丘は、後世の開墾によって削平されていた。また墳丘周囲には周濠を有する。周濠は墳丘周囲を概ね全周し、平面形は古墳外形に沿うものである。

墳丘裾で復元される古墳の規模は全長35.0mであり、後円部径20.5m、前方部長14.5mを測る。周濠を加えた総長は約43.0mとなる。造出は同じく墳丘裾で長辺側6.0m、短辺側2.7mを測る。なお、残存する墳丘高は、平均的周濠底の標高から約0.8mである。

外表施設 円筒・形象埴輪がある。ただし原位置で検出したものはない。葺石については、周濠内から石材の出土がなかったため、施されていなかったと判断できる。段築の有無については不明である。

主体部 削平により全く遺存していないが、前方部の土壌S K01・02が主体部痕跡である可能性を認めれば、後円部側と合わせて2基以上存在していたものと推定される。前方部中央に存在する土壌S K01・02は、調査手続き上2遺構に分断されたが1遺構となるもので、両者を合わせた規模は長さ7.0m以上×幅6.5mである。長辺両側には一段深い布掘り状のくぼみが認められる。また、周濠から出土している陶棺が複数個体であったことから、横穴式石室の存在が想定できる。¹⁾

b. 築造時期

埋葬施設や副葬品が旧状をとどめていなかったため、詳細な築造および埋葬時期の特定は困難である。一方、周濠からは土器類・埴輪類・陶棺類などが出土しており、これらは門ノ前地区内で同時期の遺構が認められないことから、本墳に帰属するものと判断できる。この遺物を基に、本墳の築造時期を推定することにしたい。

須恵器 周濠出土の古墳時代須恵器には、杯・高杯・ハソウ・器台・壺・甕などがある（図版20～22）。杯を採り上げることとする。蓋の形態に着目すれば、口縁部と天井部を画する稜線を持つものがなく、口縁端部にナデによる明瞭な面を持つものが認められない。これらの特徴は、陶邑ではTK43型式以降に認められるものである。²⁾ また、身のかえりの長さが約1.2～0.8cmと短く、端面を持たない。これらの特徴も同型式のものである。ただし図版20の2では口径に比べ体部高が大きいことや、図版20の5のようにかえりがやや長い個体は、古相をとどめているとみ

られる。これらの点を総合すると、TK43型式併行期を中心とし、形態的にやや古い要素を含む一群と評価できる。

他器種では、大甕（図版22；42）の内面のタタキ跡が丁寧に擦り消されており、一見、調整手法としては古い様相を残す。一般に甕内面タタキの擦り消しは、5世紀に多く認められる調整手法³⁾である。また、陶邑編年ではTK23型式以降は、内面のタタキ痕跡を擦り消していない個体が示されており、⁴⁾この調整は必ずしも型式の指標とならない現状にある。この他の比較的型式変化を追いやす器種では、TK43型式を大きくはずれるものは認められない。したがってこの甕を古墳の年代推定の手掛りとするのは留保したい。

築造時期 また、本墳出土の円筒埴輪はいずれも川西氏編年のV期に相当する特徴⁵⁾を備えている。V期の埴輪は一般的に畿内ではTK23型式からTK43型式、一部の地域ではTK209型式に併行する長い時間幅の中で製作されていることが明らかになっている。⁶⁾上述した須恵器の型式は、この中に収まるものである。両者に齟齬はない。一方陶棺については、大和・山城地域ではTK43型式からTK217型式間に製作・使用されている現状にある。⁷⁾先に示した須恵器型式と比較すれば、両者には併行する時期があり、本墳の陶棺形態が比較的古式である点を考えれば、やはり齟齬はない。したがってTK43型式の推定実年代である6世紀中頃⁸⁾が、本墳の築造時期および埋葬時期と考えられよう。

c. 墳丘の築造過程

これまでも述べたように、本墳の墳丘は削平を被っており、築造過程を考察する材料は少ないが、残された手掛かりのひとつに、墳丘盛り土中の溝SX09がある。

墳丘中の溝 SX09は、両くびれ部間に位置する溝で、後円部の外周から延長するように弧を描いて前方部側に連続する形状をしている（図版4・5）。ただし、正確には両くびれ間を貫通しておらず、南側はくびれ部手前で立ち上がっている。検出面は地山である。埋土は、黄褐色土と茶褐色土がブロック状に互層となっており、人為的に埋められたと想定される。遺物はまったく含まれない。溝幅は平均3.3m、深さ平均0.7mである。

この、溝が後円部円弧のちょうど延長上にあることは、古墳の築造時に関する遺構と切り離しては考え難い。調査区内で本墳を溯る時期の遺構が存在しないことも矛盾しない。古墳造成着手以降に掘削され、盛り土を行う以前に埋め戻された遺構であることは疑いない。

周濠との比較 では、このSX09はどのような目的で掘削されたのであろうか。まず、その性格については、①もともと古墳は円墳であったが、前方後円墳に造り替えられた際に埋没した円墳周濠の一部である。②円墳として造り始められたが、完成前に前方後円墳へ改造され、その際に埋没した溝である。③円墳ではなく、前方後円墳築造過程に埋没した遺構である。の3つの想定が可能である。そこで、SX09と周濠とを比較することで、上記の蓋然性を検討したい。

周濠の規模は平均幅6.0m、深さは平均0.8mを測る。SX09と比べると平面形態ではほぼ倍近くあり、やや深い程度となる。ただし、SX09両端にあたる両くびれ部は、周濠内でも最も深く掘削されている地点であり、ここでの深さと比較するとその差は0.3m程と、平均値との比較値

以上に異なってくる(図版5)。また、埋土の状況は、SX09にまったく遺物が含まれないことも含め、異なる状況にある。

これらを踏まえると、①のケースを選択した場合、現周濠は再掘削によって大幅に拡張されたものであり、改造までの期間、有機質を含む土砂や遺物が全く転落しなかったことになる。この可能性は低いといわねばならないだろう。

築造過程の2案 以上から、次の2案を示しておきたい。

A案：円墳の施工途中で、前方後円墳へ改造された。

B案：前方後円墳造成のための現地割り付け溝であり、後円部施工が先行した痕跡である。

A案を選択した場合、変更はかなり早い時期であり、古墳の規模が倍増することも含めて極めて大きな見直しであったことを評価しなければならない。また、B案を選択した場合、造出部分には割り付けが及ばなかったことになる。

以上2案が調査所見から考えられる一応のケースである。ここでは、築造の経過としてはA・B案として示したが、結果的には、円丘部分が前方部に先立って造成されているという、同一現象に対して解釈を与えた形となる。

最近に発掘調査された、墳丘築造過程を窺う好例として、大阪府羽曳野市の蔵塚古墳⁹⁾を挙げておきたい。蔵塚古墳は全長53.5mを測る平地に立地する前方後円墳で、築造時期は6世紀中頃である。墳丘の大部分が削平により失われていたが、地山上の盛り土部分が1.6m遺存しており、墳丘の築造工法が明らかにされた。ここでは、地山を平坦に整地した後、まず後円部のみを放射状土のう列によって割り付け、さらに外周を土のう列で区切った後に盛り土を行っている。この後、前方部の盛り土が行われていることが判明している。つまり、前方部に先立って、まず後円部の造成が行われているのである。さらに興味深いのは、土のう列の割り付けに先立って、前方部と後円部境に弧状の溝が掘削されており、この平面プランが外周土のう列と一致する事実が明らかになっている。ただしこの溝は、本墳のように全周近くまで掘削されない点で異なる。今後の調査例の蓄積を待ちたい。(吹田)

B. 形象埴輪の配置

菟道門ノ前古墳では、家・人物・動物・器材など計35点以上の形象埴輪が出土している。これらは一古墳出土の形象埴輪群としては、種類・数量ともに府下有数の豊かさである。形象埴輪の配置状況を復元し古墳祭祀の意義を解明する試みは過去にもなされており、注目すべき成果が得られている。¹⁾本墳では、残念ながら原位置に残された埴輪は皆無であるため、現状で判明している形象埴輪の出土状況を整理し、可能な範囲で配置状況の検討を加えることにしたい。

a. 出土状況の検討

形象埴輪は、全て周濠内から出土している。各個体は、墳丘から原形のまま転落したものはなく、ほとんどが小破片となっていたため、現地では動物埴輪の頭部・脚部などを除いて種類を確認することが困難なほどであった。そこでまず、各遺物の垂直・平面分布状況を参考に、埴輪類が埋没する経過と配置の復元への可能性を検討したい。

垂直分布状況 周濠埋土の層序は、大きくは3層である。下層から、遺物を含まない淡黄褐色～黒褐色土層、中層は埴輪他を多量に含む暗黄褐色～黒褐色土層、上層は埴輪他を含む茶褐色土層の順である(第15・16図)。下層は余り有機質を含まず、厚さは10～20cmほどである。中層は形象埴輪の大部分を包含していた層であるが、ここからは古墳時代後期の土器類をはじめ、奈良・室町時代の土器類も出土している。厚さは、浅いところでは10cm、深いところでは80cmある。上層は埴輪・土器類などの遺物を含み、10～20cmの厚さがある。なお、上層の直上は水田床土層であり、ここには埴輪類他の遺物はほとんど含まれていない。

このような状況から、埴輪が樹立されてから一挙に埋没する間には一定期間が存在したことがわかる。

次に、中層での形象埴輪の垂直分布は、下層直上から20cm間での集中が最も高く、これより上へ向かうほど低くなっていた。したがって、周濠底部が深い地点では同じく集中レベルも深かった。また集中地区では、一旦平面的に検出して取り上げると、折り重なって直下に埴輪が現れる状況にあった。ここからは、埴輪は短期間に一度に破損し、埋没していることがわかる。

平面分布状況 出土地点には一定のまとまりがみられた。形象埴輪の出土地点は、Ⅰ区・Ⅱ区東・Ⅱ区くびれ・Ⅱ区中央・Ⅱ区西・Ⅲ区・Ⅴ区西・Ⅴ区くびれ・Ⅵ区・Ⅶ区であるが、多くがⅡ区東から西、Ⅴ区西からくびれに集中している状況にある。後に、破片化した各個体の接合関係を検証していった結果、多くの個体は各地区内の一定範囲にまとまり、隣り合う地区を離れて接合する個体は少ないことが判明した。このことから、遺物は破片化しているが、無秩序に散乱している状態ではないことがわかった。

埋没に至る過程 上記の検討から、形象埴輪類は埴丘に樹立された後、ある時まとまって破片化し埋没したことがわかる。奈良時代や室町時代の土器とは同一層から出土しているため、その時期は明らかでないが、状況的には古墳の削平時である可能性が高い。古墳の削平に際しては、まず埴丘上の埴輪を表土層とともに削り取り、周濠に投棄した上で、順次封土を削って整地を行ったと考えられる。

b. 出土地点によるグルーピングと構成

グルーピング 形象埴輪類の中で主だった個体の出土地点、あるいは出土範囲を示したものが第62図である。図中に点で示されているものは、調査時に平板測量で各破片の位置を記録したものである。²⁾ただし、小さな破片が集中する地点では、30cm四方ほどのブロックとして取り上げを行った場合があった。図中ではこれも1点として表現した。そのため、1点とは必ずしも実数を示すものではない。また、同じ位置で上下に重複しているものも、図中では1点となっている。破線や一点破線などで示されている範囲は、複数破片が接合した個体の破片分布域をくくったものである。

先述のとおり、各埴輪は原地から大きく移動せずに出土状況が形成されたと考えられるため、この図から各埴輪の分布状況を検討すると、下記の5群に整理できる。

1群：Ⅱ区東～西から出土した個体、計19個体以上。

家 (1) : 入母屋三階建家1

人物(3) : 男子1 (D)、人物2 以上 (Eほか)

動物(5) : 馬2 (A・C)、鳥1、動物1 (動物A)、魚?1 (不明A)

器材(9) : 石見4 (A・C・E・F)、盾2 (A・B)、靱1、蓋1、太刀1

不明(1) : 鬚?1 (不明C)

2群 : V区くびれ・西から出土した個体、計5個体。

人物(3) : 男子3 (A・B・C)

動物(1) : 馬1 (B)

器材(1) : 石見1 (G)

3群 : II・V区から出土した破片が接合した個体、計3個体。

動物(2) : 馬1 (D)、猪1

器材(1) : 石見1 (B)

4群 : VII区から出土した個体、計2個体。

器材(1) : 石見1 (H)

不明(1) : 不明1 (不明B)

5群 : VI区から出土した個体、1個体。

器材(1) : 石見1 (D)

6群 : III区から出土した個体、1個体。

動物(1) : 動物1 (動物B)

1群の構成 構成を見て行きたい。器材埴輪には不明品を含めると6種10個体がある。盾・石見は複数個体、他は概ね1種1個体とみてよい。また石見以外の器材は1群に集中している。家は1個体である。人物は3体、動物には4種5体があるが、これらは比較的くびれ・中央付近に集中している。馬は2頭で、ともに馬具を装着する飾り馬である。動物には他にも鳥・脚を持つ動物(動物A)が1個体以上と不明埴輪が存在する。また、人物のうち1体は男子像である。帽子をかぶる男子(人物D)は頭まわりが他の人物よりも一回り大きく、他の人物埴輪とは性格が区別されている可能性がある。その他の人物(人物Eと破片)については性別不明である。

2群の構成 人物(3)と馬(1)、石見(1)がある。馬は手綱など騎乗に必要な馬具のみを装着している。人物A(男子)の右手を上方に挙げる所作は、馬子のようにも見受けられるが、断定はできない。³⁾ 人物Bは目の上下に入れ墨があり、怒り肩で他の人物の柔和な表情とは異なっている。武人もしくは盾持ち人である可能性がある。また、人物Cの手を前方に出して何かを捧げ持つ様は、巫女を想像させるが、振分け髪の剥離痕があることから男子像と考えられる。大きさが相対的に小さいことや装飾品を持たないため、職能者や農夫である可能性がある。

3群の構成 3群には馬・猪・石見がある。これらについては、樹立地点が前方部中央であり、破片が両くびれ部へ拡散したと理解することも可能である。まず、馬Dは、4個体の馬形埴輪中、最も法量が大きくなると推定される個体で、脚部が1本ずつそれぞれの区から出土している。石

見Bは、文様面の多くはV区から、基部の多くがII区から出土している。猪は、破片の大部分がII区からの出土であり、脚部1片のみがV区からの出土である。片側の区に大部分が集中する状況は前2者とは異なる。このように3群からは3個体が出土しているが、1・2群のようなまとまりをもった個体群であったかは不明である。

4・5・6群の構成 4・5・6群は、それぞれ1～2個体のみであり、個体群を形成していた可能性は低い。種類には石見形埴輪と不明埴輪・不明動物がある。

c. 配置の復元

配置パターン 以上、形象埴輪群は、墳丘に不均等に樹立されていたと考えられるが、多くの個体が集中して樹立されている地点と、1～3個体ほどで樹立される地点があることがわかる。これをそれぞれパターンに置き換え、前者を「群像型」、後者を「単独少数型」と呼ぶことにしたい。前者には1・2群の埴輪が相当し、後者にはそれ以外が相当する。なお、このなかで石見型埴輪は、唯一8個体と突出した個体数があり、1～5群にかけての広範囲から出土している。また、その間隔は比較的均等であることがわかる。この状況から、石見型埴輪は墳丘各地点に等間隔で配されていたと推測できる。これを「墳丘点在型」と呼びたい。

すなわち、形象埴輪の配置方法には、ある特定位置に配するブロックパターンと、線状に配されるラインパターンの2者があったと考えられる。

群像型 1群・2群の埴輪をそれぞれA・Bグループとする。その概要は下記のとおりである。なお、上述のように石見型埴輪は、墳丘点在型として扱うためここに含まない。

Aグループ：家+器材+人物+動物

[家・鞆・不明埴輪（鬘）・盾2・蓋・太刀・帽子を被る男子・性別不明人物・飾り馬2・鳥・不明動物・不明埴輪（魚?）]

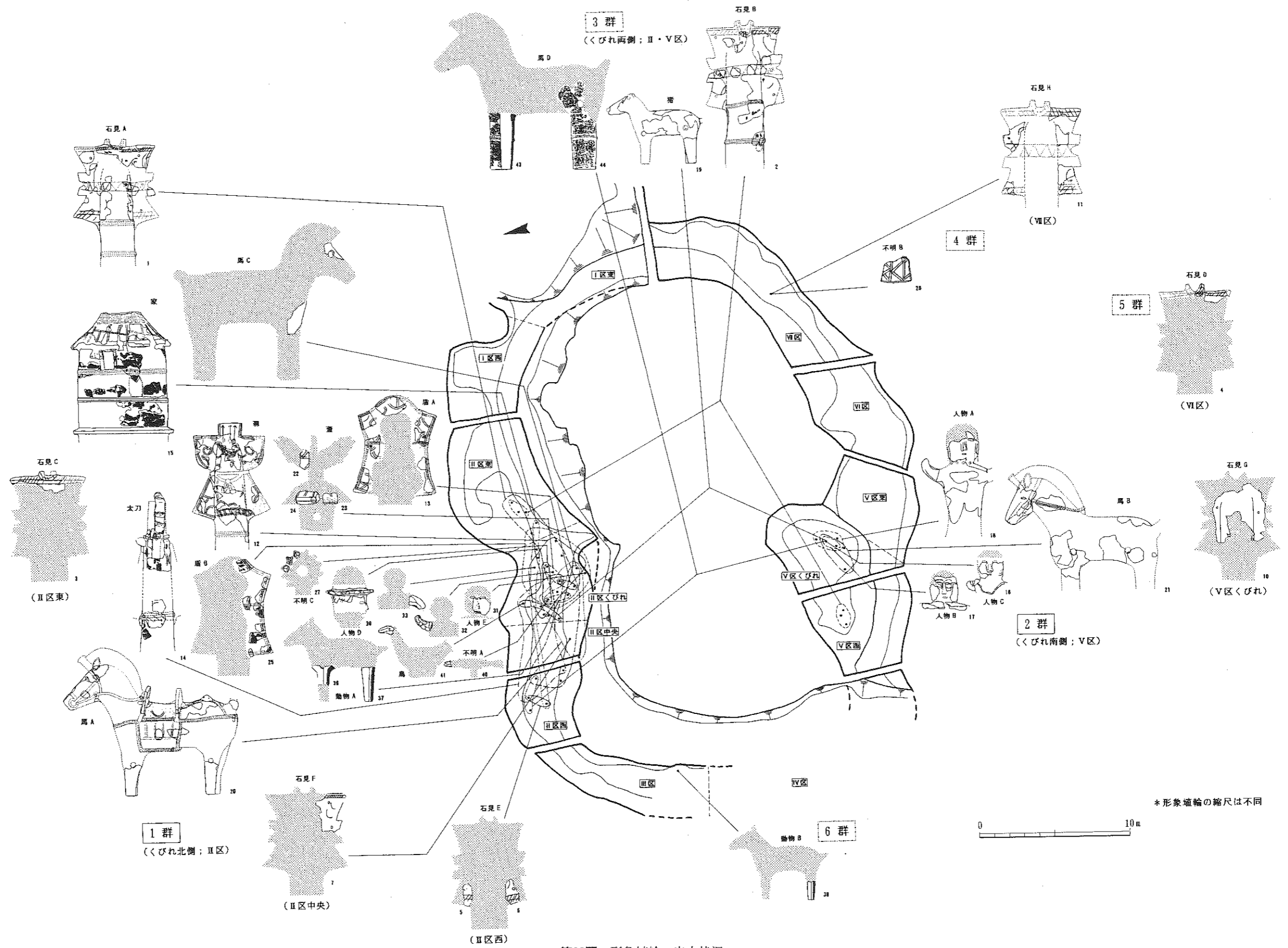
Bグループ：人物+動物

[右手を上げる男子・前方に何かを持つ男子・入れ墨男子・裸馬]

Aグループは15体、Bグループは4体によって構成されている。前者は、出土地点から樹立位置をくびれ部～前方部東半の北側斜面寄りに、後者は、造出もしくはくびれ部の南側斜面寄りであったと考えられる。なお、Aグループは、現状では、最も多くの種類が集中する地点である。ここでは概ね8mの範囲に20体の形象埴輪が集中することとなり、まさに群像としての表現がされていたと思われる。

単独少数型 現状では、3群の馬+猪と、4・6群の不明埴輪・不明動物が該当する。いずれも破片数は少ないため、詳細は不明であるが、群像とはならない単独あるいは少数個体群が前方部西側、後円部南側に配されていた可能性がある。

墳丘点在型 石見型埴輪の出土地点を拾いあげると北東からII区東～西（A）、II区東（C）、II区中央（F）、II区西（E）、V区くびれ（G）、VI区（D）、VII区（H）となり、墳丘各所に樹立されていたと考えられる。前方部円筒埴輪列の要所に、石見型埴輪が立てられていた羽曳野市軽里4号墳⁴⁾は参考例となる。



第62図 形象埴輪の出土状況

d. 小 結

以上のように、古墳における形象埴輪の配置について一定の見解を示すことができた。各配置パターン・グループにおける形象埴輪の構成を見れば、明らかに種類の組み合わせや数量が異なっており、各地点で形象埴輪が担った効果や役割が同一でなかったことが読み取れる。特に多種複数の「群像型」と「墳丘点在型」は異質である。

「群像型」の2グループは、概ね両くびれ部から前方部付近に樹立された蓋然性が高く、後円部や前方部西端には認められなかった。このことから、門ノ前古墳においては、両くびれ部が特に高い演出効果が求められたのであり、両地点中でも北側くびれ部から前方部にかけてが、最も重要な地点であったと考えられよう。

(吹田)

C. 出土陶棺の復元

門ノ前古墳からは3個体分の土師質亀甲形陶棺が出土しているが、いずれも細片化し、全体の形状や法量が明らかでない。ただし、山城地域から北大和地域は、方形区画を持つ土師質亀甲形陶棺の出土例が比較的多い地域¹⁾であり、類例との比較が一定可能な環境にある。そのため、ここでは門ノ前古墳出土の各個体について特徴を再整理し復元を試みたい。

なお、土師質亀甲形陶棺の棺蓋・棺身は、外表面が突帯によって区画されていることが特徴であり、区画の形状・段数により型式分類を行うことが有効であることは、既に指摘されているところ²⁾である。また、法量の大小についても、この分類に一定比例するものとみられる。そこで、ここでは主に突帯間区画の段数(条数)・幅・形状に着目したい。

a. 陶棺 A (第64図)

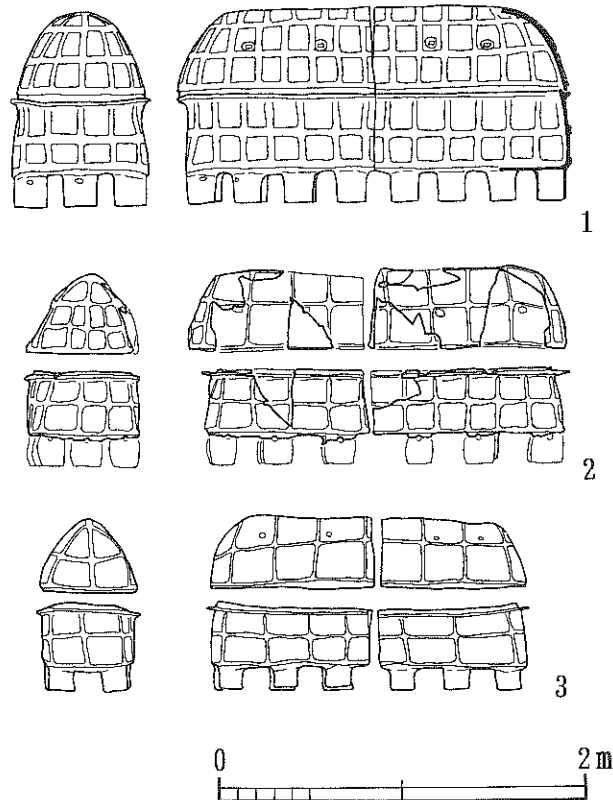
判明している形態上の特徴は下記の3点である。

①棺身・棺蓋からなり、成型後中央で2分割されている。

②棺蓋は、突帯によって縦方向2段以上に分割されている。横方向条数は不明。

③棺身は、突帯によって縦方向2段以上に分割されている。横方向条数は不明。

これらの特徴に当てはまる陶棺の代表例³⁾に、奈良市歌姫1号横穴墓奥棺⁴⁾(第63図1)、奈良市敷島町出土の陶棺⁵⁾(第63図2)、奈良市狐塚1号横穴墓陶棺⁶⁾(第63図3)などがある。前者は、突帯によって棺蓋が3段・棺身2段に、



第63図 陶棺の類例 (註1 森下文献より引用)

後2者は棺蓋2段・棺身が2段に分割されているものであるが、それぞれ法量・突帯間幅が異なる。陶棺Aの棺蓋の突帯段数を突帯間幅などから検討する。

棺蓋 破片7から横方向の突帯間幅が10.0cm、縦方向の突帯間幅が12.0cm以上であることがわかる。縦方向の突帯間幅は正確には判明しないが、縦突帯幅が横突帯幅を大きく凌駕する類例が他に認められないことから、ほぼ正方形に近い区画になるものと推定される。この特徴を上記3例と比べると、概ね歌姫横穴墓奥棺の特徴に該当する。歌姫棺蓋の突帯段数は3段である。

棺身 棺身の突帯段数は2段以上であることがわかるが、3段構成をもつ類例はなく2段構成であると考えられる。この点は上記3例のいずれにも当てはまるものであるが、突帯間幅から近似する例を探してみたい。破片13から横方向の突帯幅が約15.0cm、縦方向の突帯間幅が破片9から15.0cm以上であることが分かる。縦方向の突帯間幅は正確には判明しないが、棺蓋同様ほぼ正方形に近い区画になると推定される。この特徴は、同じく歌姫横穴墓奥棺に近い。

復元 以上の点から陶棺Aは、棺蓋3段、棺身2段の歌姫横穴墓奥棺とほぼ近い形態をもつものと考えられ、全体の法量についてもこれに倣って復元したい。

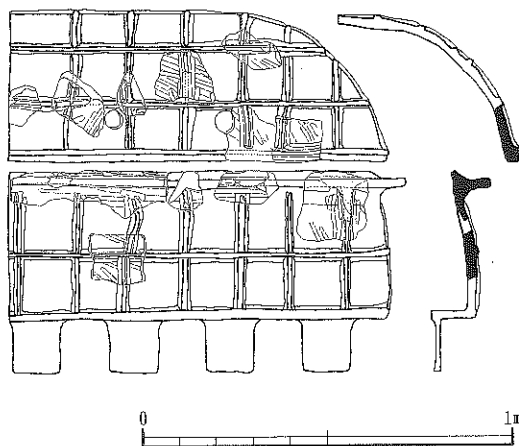
棺蓋は、概ね全長210cm（半身105cm）、器高42cmを測り、縦3段・横14～15条の突帯をもつ。長側面最下段に4か所、計8か所の円形の透かし穴が穿たれている。

棺身は、全長210cm（半身105cm）、器高40cm（脚部を除く）を測り、縦2段、横14～16条の突帯をもつ。棺身・棺蓋ともに内外面とも赤色顔料が塗布されている。受け部となる鐔は、長く大きく突出するのが特徴的である。なお、脚部は全て失われているため不明であるが類例に倣い、長辺8本に復元した。

b. 陶棺B-a

判明している形態上の特徴は陶棺A同様であるため、法量検討から行いたい。なお、棺蓋については破片数が少ないため、検討ができない。

棺身 突帯間幅が判明する破片がないため、復元が難しい。しかし、破片18から観察できる突帯は横方向が17cm以上、縦方向12cm以上を測るため、突帯間幅は陶棺Aを上回っていることがわかる。かつ、突帯幅そのものも広いため、Aと同法量であると仮定しても区画数は減じることは確かである。この点はAと比べて、型式的には新相であることを示している。上に挙げた例と比べると、敷島町例ないしは狐塚1号墓例に近似するが、縦方向の突帯が互い違いになっている点は例がない。



第64図 菟道門ノ前古墳陶棺A復元図

は確かである。この点はAと比べて、型式的には新相であることを示している。上に挙げた例と比べると、敷島町例ないしは狐塚1号墓例に近似するが、縦方向の突帯が互い違いになっている点は例がない。

他の特徴を列記しておく、受け部となる鐔は、長さ8.0cm・幅4.7cmと長く短く突出する、外面には朱が塗布されている、胎土は白褐色を呈するなどの点が挙げられる。

c. 陶棺 B-b

判明している形態上の特徴は陶棺 B-a 同様である。棺蓋は破片数が少ないため、検討から除外する。

棺身 突帯間幅が判明する破片がなく、復元は困難であるが、突帯間幅は、破片 22 から横方向が 12.0cm 以上、縦方向 8.0cm 以上であることがわかり、陶棺 B-a とほぼ同様の結論が得られる。以下に特徴を記しておきたい。

突帯幅は 5cm と陶棺 A よりも太く突出度が低い。受け部となる鐙は長さ 5.9cm、幅 3.0cm と太く短く突出するが、陶棺 B-a よりもやや薄く、角の稜線が丁寧に作り出されているため同一個体ではない。胎土も黄褐色を呈する。突帯は横方向の後に縦方向が付された可能性が高いが、直行するものと、互い違いになるものの 2 者がある。それぞれがどの位置に当たる破片かは明らかではない。脚部片とみられる破片が 1 片あるが、棺身の厚さに比べて器壁は薄く、釣り合いが悪い。

(西田)

【註】

第V章第1節

A. 古墳の概要と評価

- 1) 北大和・山城地方での類例をみれば横穴石室・横穴墓に伴う場合が多い傾向がある。
森下浩行 「土師質亀甲形陶棺小考」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』 奈良市教育委員会 1993
木村泰彦 「山城地方出土陶棺集成」『長岡京跡発掘調査研究所調査報告書』第1集 長岡京跡発掘調査研究所 1979
白石耕治 「畿内における陶棺研究序論」『西谷眞治先生古稀記念論文集』 勉誠社 1995
- 2) 田辺昭三 『陶器古窯社群 I』 平安学園考古学クラブ 1966
田辺昭三 『須恵器大成』 角川書店 1981
- 3) 南山城の類例では、赤塚古墳、宮ノ平 5 号墳（城陽市）などがある。
城陽市教育委員会 「平川廃寺・赤塚古墳発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第12集 1983
京都府教育委員会 『宮ノ平古墳群発掘調査概要』埋蔵文化財発掘調査概報 1974
- 4) 2)と同じ
- 5) 川西宏幸 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻2号 日本考古学会 1978
- 6) 高橋克壽 「山津照神社古墳の埴輪と 6 世紀の畿内の埴輪」『琵琶湖周辺の 6 世紀を探る』 京都大学文学部考古学研究室 1995
- 7) 1)と同じ
- 8) 近年、須恵器の実年代については活発な議論があり、TK43型式以降の実年代を田辺氏の年代観よりも新しくする傾向が一般的となっているが、ここでは実年代論については立ち入らない。
古代の土器研究会 「古代の土器研究—律令土器様式の西・東 5 7 世紀の土器—」『古代の土器研究会第 5 回シンポジウム資料』 1997
- 9) 榎大阪府埋蔵文化財研究センター 「蔵塚古墳墳丘の調査」『第 2 回駒ヶ谷・飛鳥遺跡現地説明会資料』 1997

B. 形象埴輪の配置

- 1) 多数あるが、ここでは以下を参考にした。
群馬町教育委員会 『保渡田 VII 遺跡』群馬町埋蔵文化財報告第 27 集 1990
若松良一 「四 形象埴輪群の配置復元について」『瓦塚古墳』 埼玉県教育委員会 1986
若松良一・日高慎 「形象埴輪の配置と復元される葬送儀礼（上）（中）（下）」『調査研究報告』第 5, 6, 7 号 埼玉県立さきたま資料館 1992, 1993, 1994
群馬県教育委員会 『塚廻り古墳群』 1980

第1節 菟道門ノ前古墳の検討

- 杉山晋作 「埴輪の世界—人物埴輪の背景—」『古代史復元』7 講談社 1990
日本考古学協会茨城大会実行委員会編 『シンポジウム2 関東における埴輪の生産と供給』1995
高橋克壽 「器材埴輪」『古墳時代の研究』9 古墳Ⅲ埴輪 雄山閣 1992
高橋克壽 『埴輪の世紀』歴史発掘9 講談社 1996
辰己和弘 『埴輪と絵画の古代学』 白水社 1992
高橋美久二 『特別展 京都府のはにわ』 京都府立山城郷土資料館 1991
黒崎淳編 『はにわワンダーランド』 栃木県立しもつけ風土記の丘資料館 1996
岡崎晋明・中村順子編 『大和の埴輪』橿原考古学研究所付属博物館 1984

- 2) 平板測量での遺物出土地点の記録は、周濠の輪郭検出後遺物が集中出土し始めた段階から行っているため、前段階である試掘調査時・精査作業時のものはマッピングされていない。これらについては、図中でも出土地区名のみを示している。
- 3) 垂髪の男子は、直接「祭りを行う人たち」のグループに入っている傾向にあることが指摘されている。
亀井正道 「人物・動物はにわ」『日本の美術』No.346 至文堂 1995
- 4) 羽曳野市遺跡調査会 『古市大溝（軽里4号墳）発掘調査概報』 1992

C. 出土陶棺の復元

- 1) 亀甲形陶棺は畿内では河内・和泉地域でも出土するが、棺蓋外面の突帯を波状に巡らせる特徴などの点で異なるため、比較資料からは除外する。
- 2) 畿内（あるいは北大和・南山城）出土の陶棺を集成した上で、型式変化の方向性を明らかにした次の2論考に詳しい。
森下浩行 「土師質亀甲形陶棺小考」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』 奈良市教育委員会 1993
白石耕治 「畿内における陶棺研究序論」『西谷眞治先生古稀記念論文集』 勉誠社 1995
- 3) 諸例の中でも、全体の形状が明らかな個体を扱った。
- 4) 奈良県教育委員会 「奈良市歌姫町横穴」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第12輯 1959
- 5) 奈良市教育委員会 「赤田横穴群の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和58年度 1984
- 6) 奈良市教育委員会 「山稜町狐塚横穴群の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和59年度 1985

第2節 菟道遺跡群の遺構変遷

今回の発掘調査では、既に報告してきたとおり、古墳時代から室町時代にかけての古墳・墳墓・集落跡などの遺構を検出した。またこれらの遺構は、時代あるいは時期ごとに違う局面を見せながら変遷していることも明らかとなった。当然、このような地域変化は孤立的に行われたわけではない。空間的にも時間的にも、より広い関連性を見据えた上での検討は当然必要であるが、ここでは、今回の発掘成果の要点を時代順に整理しておくことにしたい。

A. 縄文時代

今回の発掘調査で最も古く溯る遺物は、石錘・磨石・サヌカイト剥片などの石器類で、縄文時代に属するものとみられる。確実に縄文時代と判断できる土器片あるいは遺構の検出はないものの、これらの石器類は門ノ前地区から集中して見つかっており、付近に当該期集落が存在していた可能性については注意すべきであろう。

市域での縄文時代遺跡は、宇治川対岸の平等院旧境内に重なる塔ノ川遺跡¹⁾で後期の比較的まとまった土器群が発見されているほか、五ヶ庄地区の寺界道遺跡²⁾で後・晩期の土器や土器棺・貯蔵穴、隼上り遺跡³⁾で草創期の石槍と晩期の土器が発見されている。

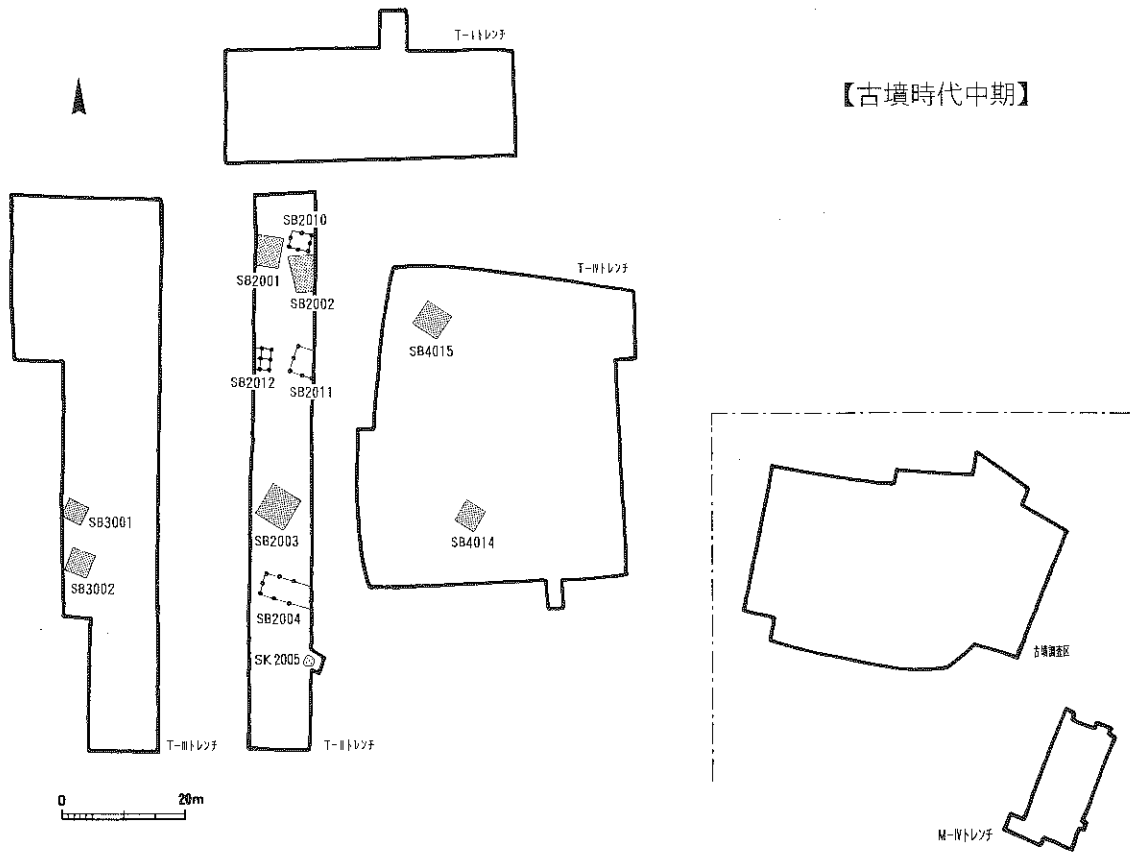
B. 古墳時代中期の遺構

集落の開発 菟道遺跡群では、古墳時代中期ころよりまとまった遺構展開がはじまる。この時期が当該地の土地利用の本格的開始期と考えられ、まずは集落として開発されたことがわかる。

同時代の遺構には、竪穴住居7基、掘立柱建物4棟、土壇1基があり、谷下り地区にのみ分布する。建物密度は30平方mに1軒程度である。比較的散在的に遺構が分布しており、建物の重複関係もない。建物はT-IIトレンチを中心に、T-III・T-IVトレンチにも認められる。調査区外への展開は、南側ではS K 2005を境に認められないこと、北西へは傾斜面になること、東側では戦川の氾濫原が想定できることから、そんなに大規模な集落であるとは考えがたい。またS B 2002を除けば、建物方位が概ねそろっている。

竪穴住居・土壇に残された土器類には、最も古相を示すものに布留式土器、新相のものにTK 208型式併行期の須恵器がある。ただし土師器は概ね布留式以降のもので占められており、布留式土器も須恵器と共伴して出土している。このような状況から、集落は、古墳時代中期初頭頃に開発が始まり、古墳時代中期後半ころには衰退したものと考えられる。実年代では、概ね5世紀の第2～4四半期を中心とする時期に想定をしておきたい。

竪穴住居群 住居の構造的共通点・相違点について、特徴が認められるのでふれておきたい。まず住居は平面方形である点で共通する。規模は一辺5mを境に大(S B 2001～2003)と小(S B 3001・3002・4014・4015)があり、大規模のものはIIトレンチ付近に集中している。構造的な特徴として、貼り床が施されているものが多い点があげられ、小規模のものには支柱穴が認められない傾向にあった。また、規模に関係なく、炉を持つ住居(S B 3001)、カマドを持つ住居(S B 3002)、炉とカマドの両方を併せ持つ住居(S B 2001・4014)の三つの組合せがある。ちょ



第65図 遺構変遷図1

うど炉からカマドへの移行期に相当する状況である。

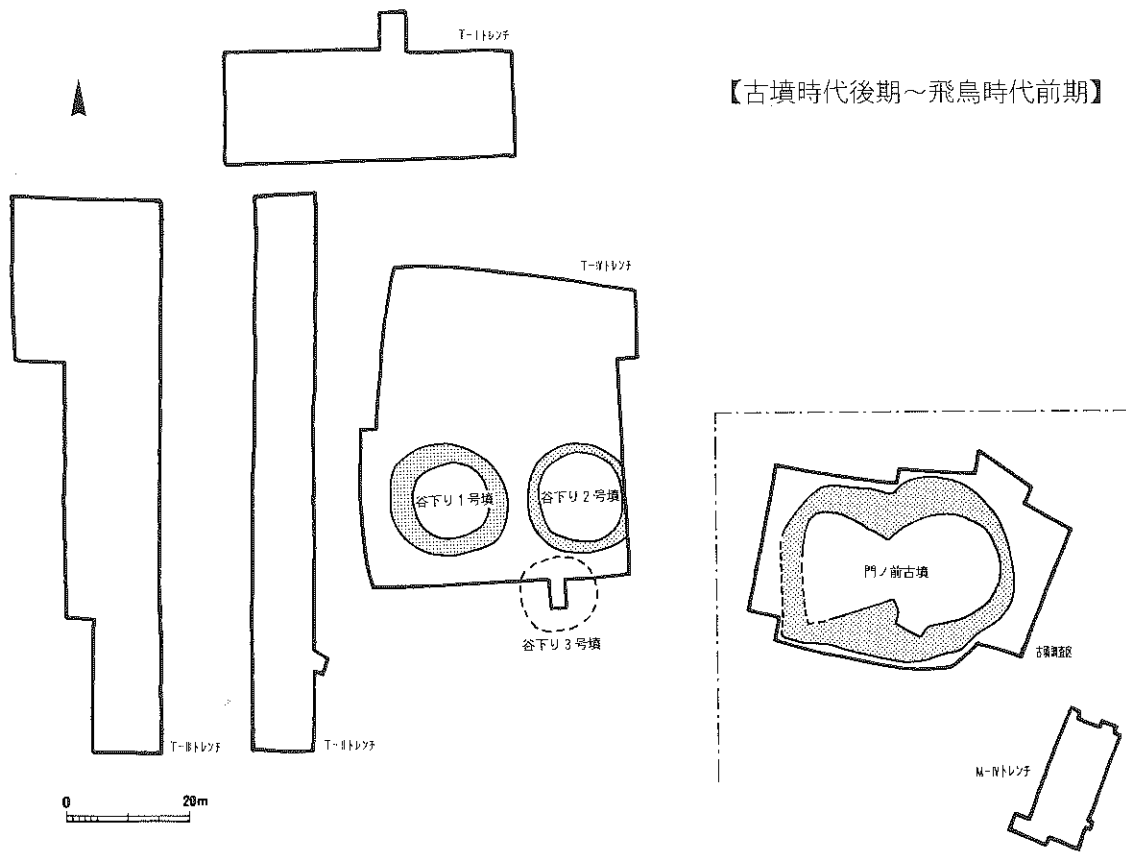
壁ぞいのカマド遺構には支柱石が遺残する一方で（S B 3002・4014）、いずれの住居にもカマド本体である焼粘土塊が認められなかった。通常の作り付けカマドの検出状況にはない。可能性としては、簡易な構造のため遺存しなかったか、移動式カマド（韓竈）であったかいずれかであろう。またカマド上面に小型高杯や土師器片が集中する住居（S B 3002・4014）があった。

掘立柱建物 2間×3間以上と2間×2間のもとの総柱2間×2間以上の建物とがある。いずれも柱穴は円形で、直径50～70cmと小規模な点が共通している。S B 2012のみやや方位を違える。

C. 古墳時代後期～飛鳥時代前期の遺構

集落廃絶と古墳造営 古墳時代中期集落が概ね5世紀代に廃絶した後、6世紀前半は遺構がほぼ確認できなくなる。耕地化した痕跡も認められないため、半世紀近く荒蕪地化していた可能性がある。その後、6世紀半ばにさしかかる頃、古墳が造営されるようになる。前方後円墳1基と円墳2基、小型の石室墳1基が、今回発掘されたものである。

門ノ前古墳 門ノ前古墳の造営にあたっては、まず予定地周辺を一定範囲で整地したらしい。この古墳は、全長35mを測るウジの最後の首長墓で、ウジ地域唯一の前方後円墳である。門ノ前古墳出土須恵器は、陶邑TK43型式併行期のものが主体を占める。横穴式石室を埋葬施設としていた可能性が高く、土師質亀甲形陶棺片が3個体分出土している。また円筒埴輪や形象埴輪を樹立する古墳としては、近畿地方でも最末期の一例である。



【古墳時代後期～飛鳥時代前期】

第66図 遺構変遷図2

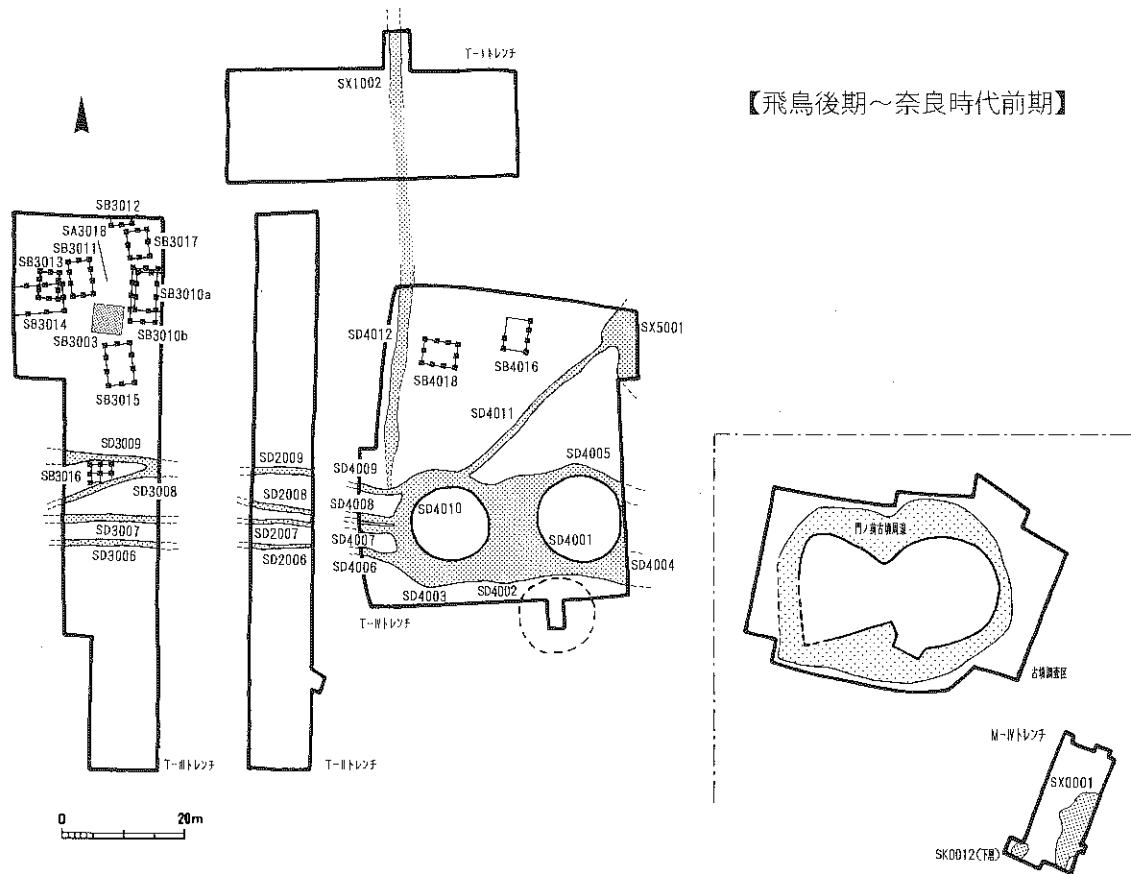
谷下り古墳群 続いて6世紀末～7世紀前半期になると、谷下り地区に古墳が営まれるようになる。谷下り古墳群は直径20m以下の円墳数基で構成される小規模群集墳であり、出土須恵器は陶邑TK209～TK217型式併行期のものである。今回の調査で確認したのは3基である。このうち2基は周濠の形状から円墳であることが判明したが、1基は周濠がなく墳形は不明である。いずれも全長6.5mほどの横穴式石室を内蔵している。

3基の古墳は概ね同時期に造営されながら、1・2号墳と3号墳の石室構造あるいは構築方法が異なる点は注目される。また、1号墳の墳丘は、古墳時代中期の竪穴住居SB4014の上に構築されていた。SB4014は深さ5～15cm程度しか残存しておらず、周囲を一旦整地した後に盛り土が行われたことが分かる。

なおT-IVトレンチSX5001からは、細片化した陶棺片が出土している。1・2号墳からは陶棺は出土していないことから、今回発掘された3基以外の古墳のものと考えられる。谷下り古墳群は、さらに未発見の古墳が存在しているものと判断される。

D. 飛鳥時代後期～奈良時代前期の遺構

集落の再開 7世紀後半代になると、再び集落としての利用がはじまる。この再開発が行われたのは、飛鳥地域の土器型式を基にすれば飛鳥Ⅲ期併行期以降であり、大枠としては平城Ⅲ期併行期ころまで集落が継続していたものと考えられる。実年代としては7世紀第2四半期～8世紀中頃までと想定しておきたい。また遺構は、谷下り地区全域・門ノ前地区M-IVトレンチに展開



【飛鳥後期～奈良時代前期】

第67図 遺構変遷図3

しており、今回の発掘調査地域全体の中に遺構が認められる時期でもある。当該期の主な遺構には、竪穴住居1基、掘立柱建物9棟、溝6条⁴⁾、不明遺構3か所などがある。

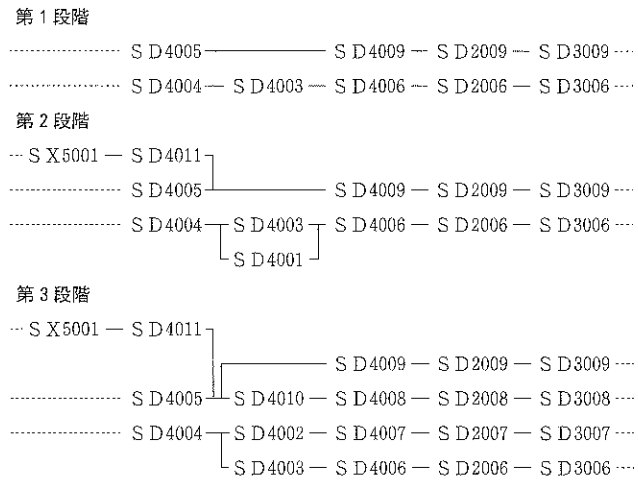
各遺構を少し詳しく観察すると、遺構間には切り合い関係が存在し、出土遺物にも新旧が認められるため、当該期間の中での変遷を追うことが可能である。特に、今回検出した遺構の中でも、東西4条の溝群は、前後の時代には認められない特徴的な遺構であるため、はじめに検討を加えておきたい。

東西溝の機能と変遷 溝の方向は、東への下降を表す等高線の動きに対して直角であり、明らかに標高の高い土地から低い土地に向かっている。また、概ね直線的に伸びていることから、基本的には導水の目的のために掘削されたものと判断できる。

次に、各溝のつながりから考えたい。流れの方向は、IVトレンチ東外側からSD4005・4004の2条に導かれ、以西でさらに4条に分かれてそのまま西流するのが基本である。なお、取水口は今回の調査範囲には含まれないが、既検出部東端をそのまま直線的に上流へ延長すれば、ほどなく戦川の流路と交差することとなる。

SD4005・SD4004-4003は谷下り1・2号墳の周濠を利用した溝である。両溝とも墳丘を迂回してほぼ直線的に西流するが、SD4004-4003は一定期間後に決壊し、両墳間の周濠部分に漏れ出したようで、1号墳周濠の東側の輪郭は原形をとどめていない。ただしその後、また直線的に西流する流路(SD4002)に再掘削している。なお北東側から合流するSD4011はSD4005側

面に合流点を持つため、SD4005に遅れて掘削されたとみるのが妥当である。両者はともに飛鳥Ⅲ期併行期の土器を上限とするため、この間は比較的短かったと考えられる。ここから先は、4条に分岐するが、SD4003はSD4006へ、SD4002はSD4007へとつながることから、開削時期は外側の2条が先行するものであり、内側の2条が後出すると考えられる。これらの溝が2条ずつ時期を違え機能したのか、4条が同時に機能していたかについては、決定できる調査所見を欠く。しかし次の点から後者の可能性が高いと判断できる。



第68図 東西溝の変遷過程

については、決定できる調査所見を欠く。しかし次の点から後者の可能性が高いと判断できる。

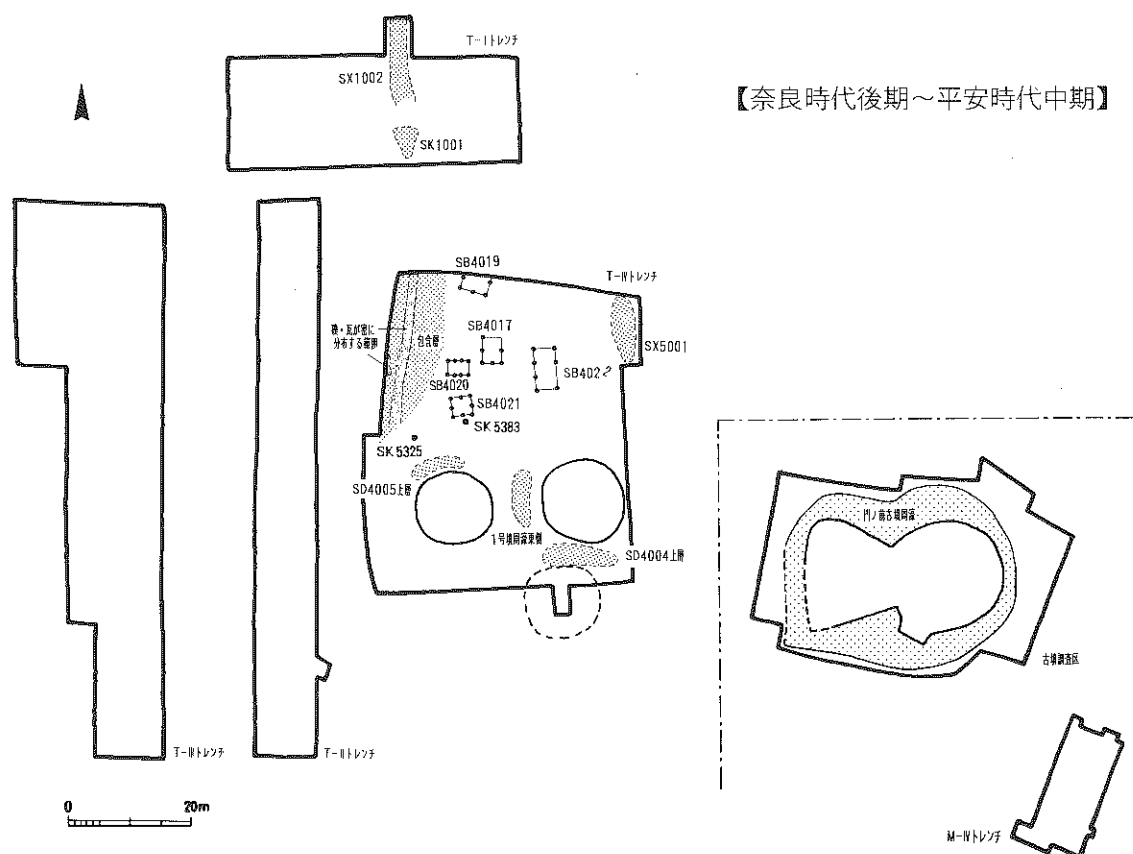
IVトレンチ以西では概ね4条は平行しているが、ⅢトレンチのSD3008はSD3009付近から、SD3007に向ってやや南西方向、つまり斜めに流路を取っている。この状況から、SD2008とSD2009とは、Ⅱ・Ⅲトレンチ間で合流していたと考えられる。仮にSD2009が埋没していたのであれば、このように合流させる必然性がないため、ともに機能していたと考えるのが自然である。なおSD3008は、Ⅲトレンチ以西の地点で今度はSD3007と合流するものとみられる。当然、このように溝が掘削されたからには、何らかの意図が存在したと考えられるが、それを解釈できる具体的な調査所見は得られていない。SD3009・3008合流点から、ほぼ一個体分のカマド破片が集中して出土したこと、焼けた礫のまとまりが伴出したことを指摘するにとどめる。

以上をまとめると、溝は大きくは3段階の掘削経過をたどり拡大したと考えられる(第68図)。以下Ⅱ～Ⅳトレンチにつながる溝を総称する時は、北から溝A(SD2009-3009-4009)、溝B(SD2008-3008-4008)、溝C(SD2007-3007-4007)、溝D(SD2006-3006-4006)と呼称することとし、出土遺物から溝の存続期間を検討してみたい。

東西溝の期間 各溝は全体的に多くの土器を含んでいたが、Ⅱ・Ⅲトレンチでは遺物の下限時期が概ね奈良時代に収まるのに対し、IVトレンチでは平安時代まで下る遺物が認められる。これは、IVトレンチでは奈良時代以降も集落が営まれていること、平安時代の土器は溝の上層だけで出土していることから、この辺りだけは溝が埋まった後もくぼ地状に残り、生活廃棄物の捨て場として利用されたものと判断できる。したがって、溝A～Dが機能していた下限を示す際には、平安時代土器は除外しておかねばならない。

集落側の溝Aからは多くの遺物が出土している。この中の最も古い土器群は、杯の形態からみると飛鳥Ⅱ～Ⅲ期併行期であると考えられる。下限は図示していないが、奈良期に通有な杯A蓋片や壺(143)などである。

溝Bには、飛鳥Ⅲ期併行期から奈良時代のものが含まれている。溝C・溝Dについても同じく飛鳥Ⅲ期併行期～奈良時代の土器が含まれている。このように、溝Aが若干先行する可能性があ



【奈良時代後期～平安時代中期】

第69図 遺構変遷図4

るものの、各溝の出土遺物の時間差は基本的にないといってよい。この点からも、各溝はほぼ同時に機能していた可能性は、高いものと考えられる。

また、溝内での土器の出土傾向として、各溝ともに飛鳥Ⅲ～Ⅳ期併行期のものが多いこと、これらは必ずしも下層からの出土ではなく、各層からまんべんなく出土することが確認できる。

南北溝の機能 東西溝の他に、南北方向の溝SD4012がある。このSD4012下層からは奈良時代前半期の土器類が出土しているため、前述の東西の溝と一時併存はしていたが、機能的には異なる。まず、南北方向の地形は南高北低であるため、流末は北へ向かうと考えるのが自然である。すると発端はSD4009との合流点となるが、両溝底は約60cmの差をもってSD4012の方が高く、通常はSD4009の水流がSD4012に向かうことはない。逆にSD4012からSD4009への排水も考え難い。水を流すことが主目的ではないと考えられる。

SD4012とSX1002の関係 SD4012を北へ延長した地点には、礫と土からなる土堤状の遺構SX1002が存在する。さらに北のIトレンチ北方は、戦川の主流路に向かって下降する地形となるが、SX1002はそのまま直線的にこの流路に向かって延びてゆく状況が確かめられている。

SD4012とこのSX1002は構造上は異なる遺構だが、位置的には直線的につながることに注意したい。SX1002のさらに北、戦川の対岸には古代寺院大鳳寺⁵⁾が位置しており、この寺院跡との関係が想起できるためである。今回発掘したこれらの遺構と大鳳寺跡との関係は次節に詳しいが、寺へ向かう道状の遺構ではないかと推測される。なお、SX1002の上面からは奈良から平安

時代の土器が出土しており、S D4012と時期的併行関係にある。

建物群の変遷 当該期の建物には、掘立柱建物7棟、総柱建物2棟そして竪穴住居1棟がある。概ねT-Ⅲトレンチ北半に集中しており、この辺りが集落の一つの中心居住域であることがわかる。これらの建物は、総てが同時期に存在していたものではなく、変遷を追うことができる。

竪穴住居S B3003は、飛鳥ⅡないしはⅢ期に併行する須恵器（第55図）が床面から出土しており、概ね7世紀中頃に廃絶したものと考えられる。掘立柱建物群は柱穴に遺物が含まれず、遺構からの時期特定は難しいが、全体的な土器の出土様相と建物の特徴を踏まえれば、南北溝群の存続期間に併行するものと考えられる。したがってS B3003と掘立柱建物群とは、土器からは併存も想定可能ではあるが、S B3003と掘立柱建物S B3010とは近接しており、同時期存在はまず考え難い。また、溝に切られているS B3016も掘立柱建物群に先行する。この状況からは、まず竪穴住居S B3003・総柱建物S B3016の組合せで集落が出現し、ほどなくして溝が掘削され、トレンチ北方の掘立柱建物群（S B3010～3015・3017）が成立したという順序で理解できる。このように当遺跡では、飛鳥Ⅲ期併行期に住居形式が竪穴住居から掘立柱建物へと転換したことで、集落の拡大とが、現象として同時におこっている。

掘立柱建物群S B3010～3015・3017については重複関係があり、これらの中にも前後関係が認められる。方位の同一性からまとまりを抽出すれば、S B3011・S B3012・S B3014・S B3015・S B3017の一群と、S B3010 a・S B3010 b・S B3013・S B4018・S B4016の一群となる。この場合、S B3014とS B3013とに見られた重複の前後関係からは、前者が先行する一群であると考えられる。

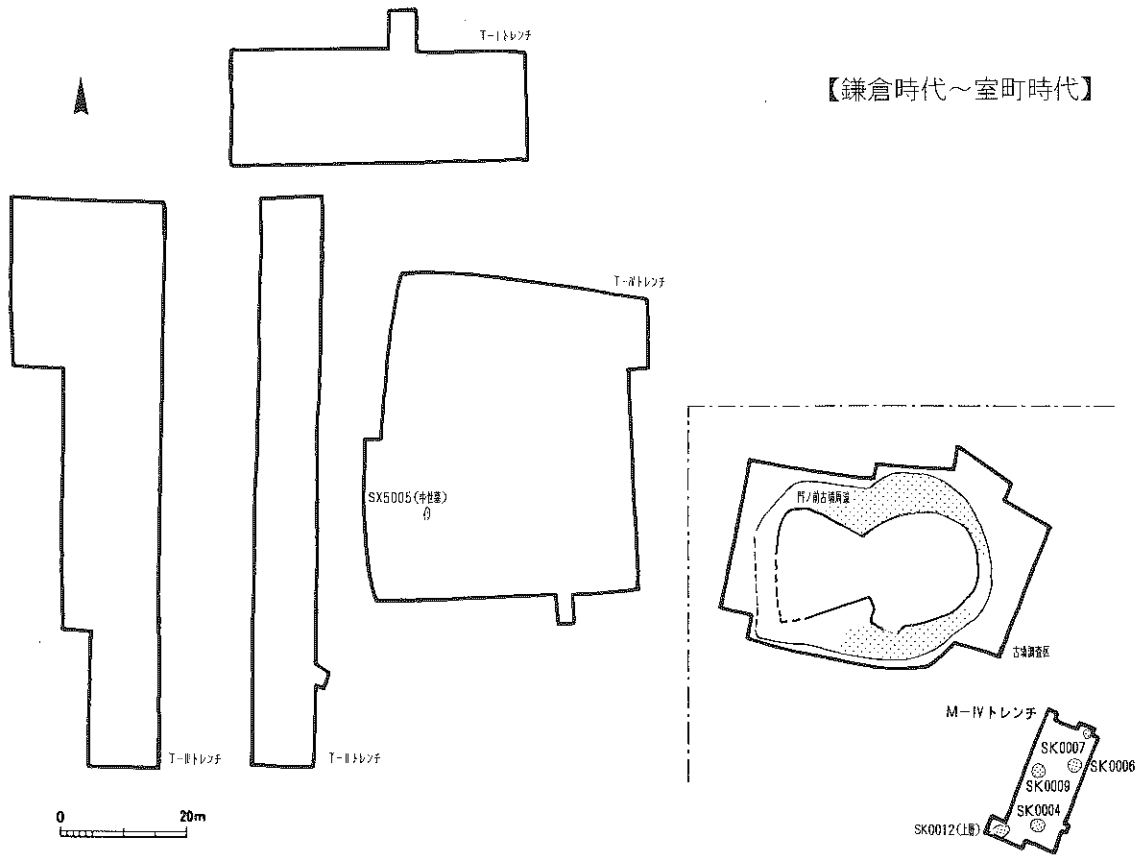
出土土器の特色 この頃、たとえば平城京では、京城は宮域に比べて土師器の使用比率が少ない傾向が指摘されるように、一般生活の中では須恵器が主な日用器であることが知られているが、今回の発掘調査にみる須恵器と土師器の出土量比は6：1ほど⁶⁾となり、前者が圧倒する。また、須恵器の中に使用不可能な焼け損じ品が目立つ点も、この遺跡の土器にみる特色として指摘できる。後述する自給的須恵器生産と関係する問題である。

E. 奈良時代後期～平安時代中期の遺構

集落範囲の縮小 8世紀後半頃を境に集落が大きく変化する。この頃の遺構は谷下り地区のみで検出され、なかでもI・IVトレンチにほぼ限定される。土器型式としては平城IV期から平安京Ⅲ期に相当し、実年代は8世紀後半代から10世紀後半代を想定しておきたい。ただし平城IVからVI期併行期ころの土器を主とする遺構は認められず、この期間を継続して追跡できない。

遺構にみる変化は、東西溝群の機能停止と埋め立て、Ⅲトレンチ西側の建物群の廃絶とIVトレンチ建物群の規模拡大である。掘立柱建物をみると、規模が平均一間ほど縮小し、柱掘方は方形から円形に変化し小さくなっている。遺物についても、I・IVトレンチ以外の地点では出土しなくなる。集落自体は前段階に比べて明らかに縮小傾向にある。

土器比率の変化 この頃の須恵器・土師器の比率を比べると5：7ほど⁷⁾となり、須恵器が日用器として突出した前段階の特色は、もはや窺えない。



第70図 遺構変遷図5

また施釉陶器などの奢侈品が比較的に見ついている。主に灰釉陶器と緑釉陶器とであり、灰釉陶器は主に猿投産、緑釉陶器は洛西・東美濃・近江各地域産のものが認められる。

格子タタキ目古瓦の分布と整地 この頃の土器は、溝あるいは土壇などの通常遺構以外に、くぼみに捨てられたものや、部分的に残存していた包含層からも出土する特徴がある。これらに含まれる遺物は、土器型式でいえば平安京ⅡからⅢ期、灰釉陶器では黒笹14窯式と90号窯式のものゝ主体を占めている。出土場所は、遺構検出場所と同じくほぼⅠ・Ⅳトレンチ内に限られている。

Ⅳトレンチ西端で検出された古墳時代の竪穴住居S B 4015や奈良時代の掘立柱建物S B 4018の柱掘方などは、他のトレンチで検出した同類遺構と比べて浅く、S B 4015は半分ほどがかろうじて遺存していたにすぎない。おそらく、集落がⅣトレンチ部分を中心に形成されはじめる段階で、この部分一帯で整地が行われた可能性がある。

またこの土器溜りや包含層中に、7世紀後半代の古瓦（図版48～50；2～5・8・11・13～15）が含まれている点は注意したい。特にS D 4004上層とS D 4012埋土上層に多く、後者と重なるS X 5004からは、完形の平瓦を含め大破片が10片ほど集中して出土した（図版50；13・15）。同様な状況はS X 1002埋土にも認められた。ここには底部糸切りの須恵器などとともに、軒丸瓦（図版48；1）をはじめとする7世紀後半代の古瓦が含まれていた。これらの瓦出土総量は整理箱13箱ほどあり、状況的には、土器溜りや包含層が形成されるより前に廃絶した、大鳳寺と関係する建物に使用されていたものと推測される。なお、道状遺構のS D 4012・S X 1002も、この頃には

本来的な機能はなくなっていたものと考えられる。

F. 鎌倉時代～室町時代の遺構

集落の廃絶 谷下り地区I・IVトレンチ付近を中心に展開していた集落遺構は、概ね10世紀後半を境に確認できなくなり、遺物も包含層に少量の破片が含まれる程度になる。7世紀以来継続してきた集落が、この頃に終焉をむかえたとみられる。

この後、13世紀に中世墓(SX5005)が造られる。この墳墓は、谷下り1号墳の墳丘が削平された後に、墳丘部分に造墓されており、このころ、谷下り古墳群は往時の姿をとどめてはいなかったことが分かる。当該部分で集落が途絶した以降に、この古墳群が削られたことはまず確かであり、おそらくは新たな開墾によって削平された可能性が高いものと考えられる。

中世集落の出現 12世紀末から14世紀にかけて、門ノ前地区に集落が展開するようになる。遺構はM-IVトレンチに限られるが、門ノ前古墳周濠埋土からもほぼ同時代の遺物が出土している。

ここで注目されるのは、土壌SK0004・0006・0009である。これらは人頭から拳大の礫が集積するもので、スサを含む焼土塊や鉄滓などが出土した。状況的には鍛冶炉であると考えられる。鍛冶場は複数の建物などによって構成されたものと想定されるが、今回の発掘調査範囲では、その状況を遺構として確認するには至らなかった。また遺構の範囲については、古墳調査区では関係遺構は全く認められず、調査区東側をはしる古道の存在を踏まえると、この道にむかって遺構がさらに展開している可能性は高い。

門ノ前古墳の削平 前述したように、門ノ前古墳は近世に至るまでに墳丘を削平されている。削平面上には水田床土であるシルト層が存在するため、古墳を削るという行為の直接的契機が水田開発にあったことが想定できる。この開発の時期は、周濠内から出土する遺物の下限が14世紀代であり、床土には近世陶磁器が含まれることから、この間であることは確かであるが、状況を勘案すれば、中世末から近世初頭にかけての時期が妥当なところだと考える。

なお、この頃には、M-IVトレンチの中世集落は廃絶しており、谷下り地区一帯は、古道ぞいに民家が散在しながらも、概ね水田が広がる光景が展開していたものと思われる。そしてこのような田園風景は、基本的には昭和40年代初頭まで続いてきたこととなる。(吹田)

【註】

第V章第2節

- 1) 宇治市教育委員会 『平等院旧境内多宝塔推定地発掘調査概報』宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第24集 1994
- 2) 宇治市教育委員会 「IV. 寺界道遺跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第10集 1987
- 3) 脚京都府埋蔵文化財調査研究センター 「京滋バイパス関係遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第7冊 1987
- 4) ここでは、II～IVトレンチの溝群のうち、つながっているものは1条と数えている。
- 5) 宇治市教育委員会 『大鳳寺跡発掘調査報告』宇治市文化財調査報告第1冊 1987
- 6) 実測した土器の比率を示した。なお実測に際しては全破片の中から、須恵器は図上で2/3以上の割合が示せるものを、土師器については1/3以上図示できるものを選んだ。基準に差を付けたのは、明らかに土師器の破片数が少なかったためである。特に供膳具は全て実測した。したがって、ここに示した数字は実数比ではないが、実態と大きく異なるものではない。
- 7) 実測した土器の比率を示した。なお実測に際しては、土師器は図上で2/3以上、須恵器は1/3以上図示できるものを選んだ。前代とは逆に須恵器の破片数が少なかったためである。

第3節 菟道遺跡群発掘の成果と課題

今回の発掘調査では、すでに報告したとおり多くの新知見を得ることができた。地域史的視点からこの成果の最大の意義をあげれば、古墳時代から中世に及ぶ、かつての「うぢ」中心域での土地利用の歴史の変遷が、初めて明らかとなったことであろう。

この7300平方m余から掘り出された各時代の活動痕跡は、周辺の諸遺跡との関連は当然のこととして、より広い空間・時間の中で連関した、過去の社会・文化の具体的反映の累積であることはいうまでもない。本節では発掘された遺跡状況を再度整理しつつ、周辺の遺跡状況を踏まえながら、発掘調査の成果と課題とについていく点か示し、本報告書のまとめにかえたい。

なお、第Ⅱ章で「うぢ」の中心域は平安時代ごろを境に、菟道地区から現在の宇治市街地域のいわゆる宇治へと移動することを述べたが、ここでは菟道地区が「うぢ」の中心であった頃の地域表記を「ウジ」とし、現在と概ね重なり合う「宇治」が示す地域概念と区別する。

A. 古墳の造営と居住域の変動

まず、古墳時代において注意すべきは、首長墳の変容と古墳造営場所の変化、また居住域の変動である。以下にこの点について概述する。

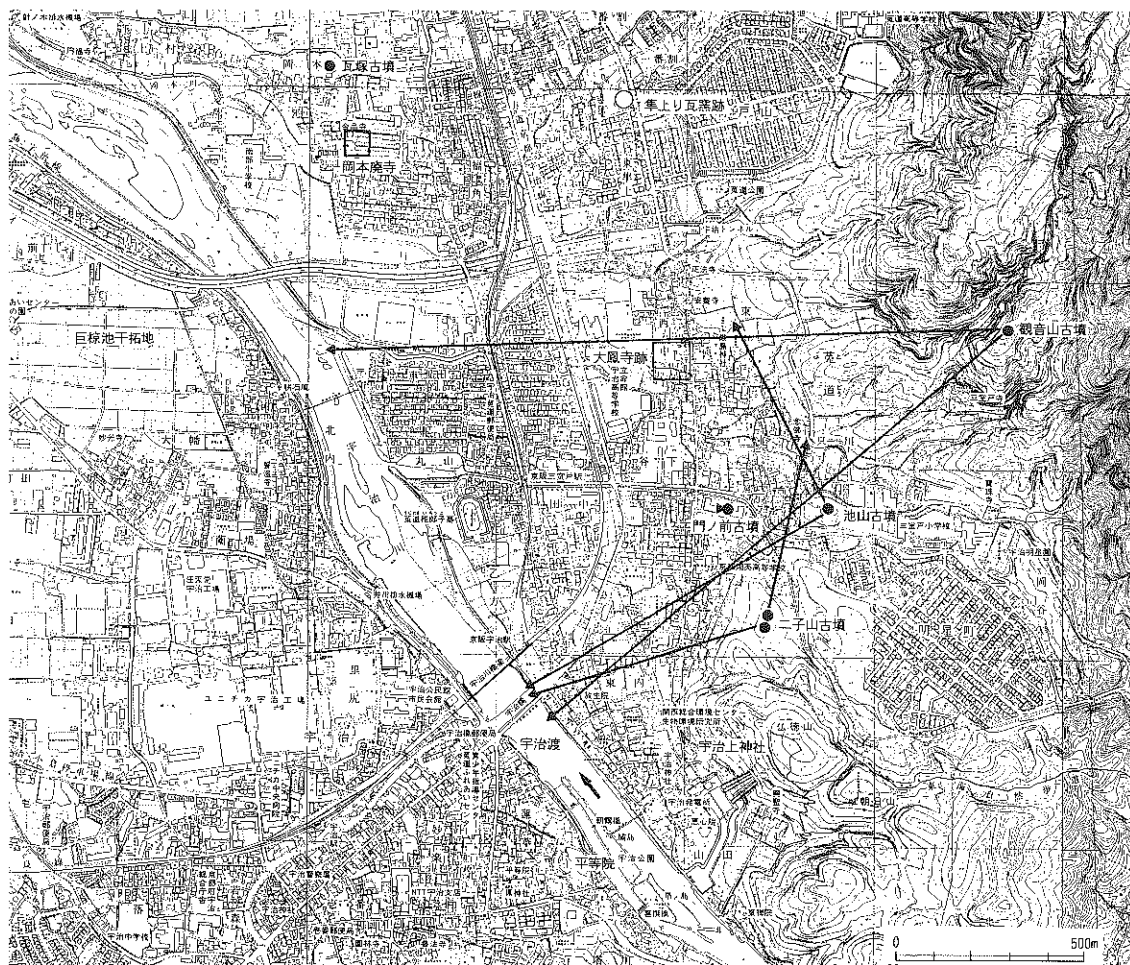
ウジの広がり 第Ⅱ章で述べたとおり、ウジにおける卓越した規模の古墳（首長墳）は、いずれも菟道平地面部周囲の山上あるいは丘陵上に位置し、一様に中規模円墳である。このような首長墳が、平野部からいかなる範囲で視認可能かを、ベクトルとしては古墳からの眺望角度として表現したのが第71図である。この図が示すとおり、各首長墳の眺望範囲は菟道地区平地部分と概ね一致し、この空間が歴代首長の基盤であったことが見てとれる。すなわち、ウジという空間領域を、首長墳を通して見た地域社会の広がりとして認識した場合、その範囲は東・南を山丘、西を宇治川・巨椋池、北を野としての台地（菟道野）という自然障壁によって限られた、まさに1平方km強ほどの菟道地区の平地部分として示すことができるのである。このような首長墳などに代表される政治的モニュメントを通して認識できる基礎的まとまりを、空間的広がりとして把握したものを「単位地域」と呼び、単位地域の首長を「地域首長」と呼んでおきたい。

ウジの歴代首長墳 さて、ウジの首長墳は概ね次のように築造されたと考えられる。

観音山古墳（4C中?）⇒池山古墳?⇒二子山北墳（5C前～中）⇒二子山南墳（5C後）。

観音山古墳は未調査であるが、ウジを一望に見下ろす山上に位置し、全長5～6mの竪穴式石室を内蔵すること、葺石は確認できるが埴輪はないらしいことから、古墳前期に所属することは間違いなく、現時点ではウジ最古の首長墳である。池山古墳の年代推定には情報が不足している。しかし、立地に着目すれば観音山古墳と二子山北墳の間に想定するのが、今のところ妥当であろう。二子山古墳は詳細な調査¹⁾が行われており、北墳は5世紀前～中葉に築造され東槨・中央槨・西槨の順に埋葬が行われたこと、南墳は単独埋葬で副葬品に馬具・長頸鏃あるいは横矧板鋌留系列の甲冑や挂甲を持つことから5世紀後葉に所属することが理解できている。

これらの古墳前期のある段階から中期後半にかけての首長墳の造営実態は、なお今後の調査研



第71図 ウジの首長墳とその眺望

究を待たねばならない点も多いが、再度ここで注意しておきたいのは、いずれにしてもこれらの地域首長墳は山丘上の選地、40m級の円墳という規範の中に存在することである。

菟道門ノ前古墳出現の意義 今回の発掘調査で発見された門ノ前古墳が、今まで知られていなかったウジの首長墳の一つであることに異論はないと考えるが、その内容は、従来までの首長墳と大きく違う点が二つある。一つは平地に築造されている点であり、もう一つは前方後円墳を採用していることである。ウジ地域唯一の前方後円墳でもある。

門ノ前古墳は、出土須恵器の古群の主体が陶邑TK43型式に併行することから、概ね6世紀中葉ころに築造されたと推定できる。したがって、二子山南墳から門ノ前古墳へと至る時間的経過の中に、ウジの地域首長墳の従来のあり方を変化させる何かがあったことになる。さらに注意しておきたいのは、二子山南墳と門ノ前古墳との間に、半世紀から四分の三世紀ほどの隔たりを、現状では想定できることである。首長墳の造営中断と空白期を視野におくべきだろう。

菟道地区には、門ノ前古墳の埴輪と編年上同期の川西氏編年V期の埴輪を焼成した西隼上り埴輪窯²⁾が存在するが、この埴輪窯から伴出した須恵器は陶邑TK208～TK23型式に併行し、実年代では5世紀後半期に比定できる。いわば、西隼上り埴輪窯の製品は門ノ前古墳で使われることはなく、二子山南墳への供給も可能性としては低い。未だ当地区には5世紀後半期の未確認古

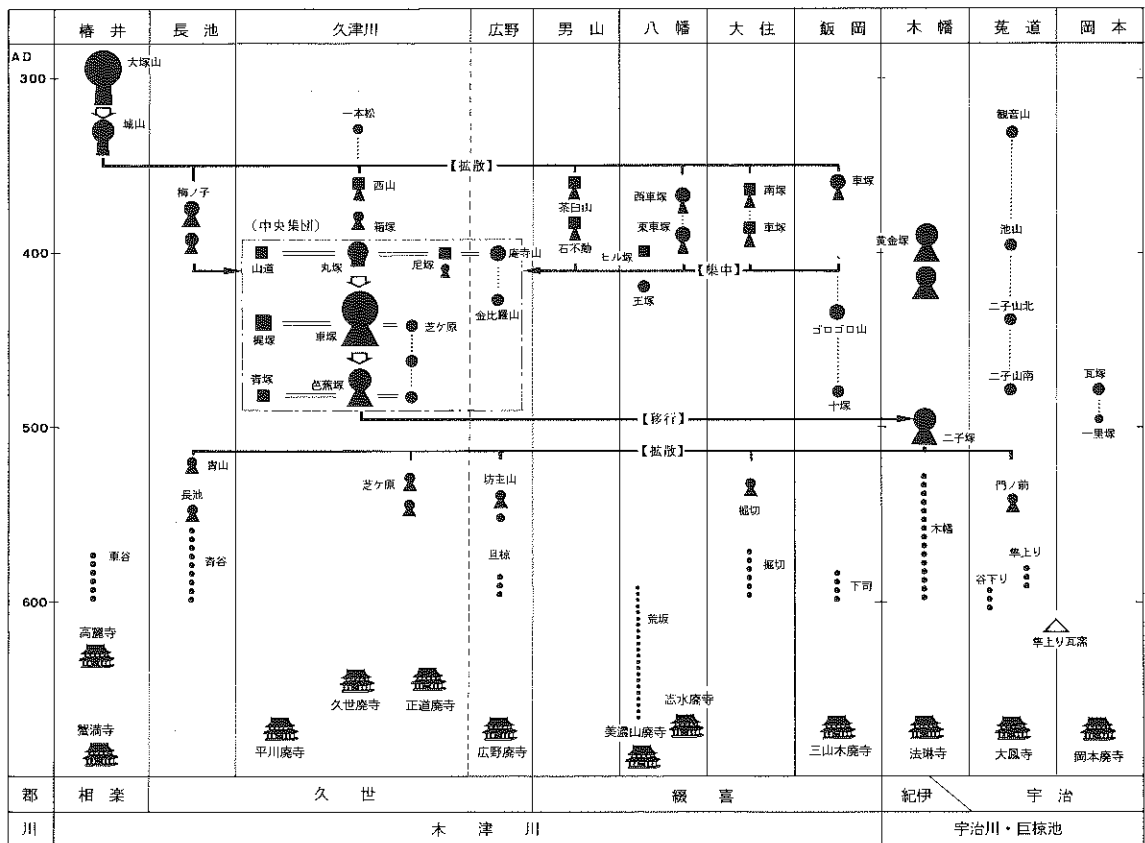
墳が存在していると見てよいのだろう。しかし、この存在を考慮したとしても、門ノ前古墳へ至る空白は埋まらない。門ノ前古墳には、伝統的な地域首長墳が途絶した後に、今までとは違う姿をまとい出現した、新たなウジの首長の姿が反映されている。

居住域の変動 このように首長墳が変動している時、じつは集落でも変化がみられる。谷下り地区の発掘調査で確認できた古墳時代に所属する竪穴住居7棟の年代は、5世紀前半ころから後半ころまでの幅に限られ、6世紀代には住居跡はもちろん土壌・溝などの生活痕跡でさえ調査地では確認できなくなる。再び人々がここで生活を始めるのは7世紀中頃である。すなわち、二子山南墳が造営された5世紀後半ころには、この場所は人々の日常的活動域から外れ荒地化が進行したと考えられる。

6世紀中葉に至り、荒地化した一角に門ノ前古墳が造営され、さらに陶器TK209型式の須恵器を初葬とする谷下り古墳群が6世紀末ころに造墓を開始する。

変化プロセスと背景 古墳時代において最も注意すべき調査成果は、門ノ前古墳という全く知られていなかった首長墳の発見以上に、前述した地域の具体的変化の把握である。そしてこの変化は大枠として、5世紀後半期を最後とする首長墳の断絶と居住域の変動、首長墳の空白、新首長の登場というプロセスを経たと理解できる。

目を周辺地域に転じてみれば、5世紀後半期という時期は、南山城地方の主要古墳のあり方にも大きな変化が見て取れる。同地方の5世紀は、城陽市の久津川地域に全長180mを誇る車塚古



第72図 南山城における地域大首長の変動模式図

墳を中心とする地域大首長の奥つ城、久津川古墳群が造営された時である。しかし当古墳群の大型前方後円墳の築造も、5世紀後半の芭蕉塚古墳を最後に終焉をむかえる。

そしてこの後、大型前方後円墳が築造される地域は、宇治市菟道地区北方の五ヶ庄地区に移り、全長112mを測る五ヶ庄二子塚古墳³⁾が築造される。山城国最後の100m級前方後円墳である。後円部が早くに失われ、築造年代を窺う良好な資料に恵まれないが、墳丘内から陶器TK47型式に併行する須恵器が出土しているため、5世紀第4四半期よりは新しい古墳と考えてよく、埴輪に川西氏編年のIV期とV期の両者が認められることを踏まえると、6世紀初頭から前葉にかけての年代比定が妥当なところとなる。

いわば、5世紀後半期の久津川大首長墳の断絶とウジの地域首長墳の断絶とは同時期であり、ウジの地域首長墳の空白期と五ヶ庄二子塚古墳の造営時期にも同時期性が存在する。さらに門ノ前古墳の造営は、五ヶ庄二子塚古墳に後出することは間違いないところであり、6世紀前半から中葉にかけて南山城地方の複数の単位地域で30m級の前方後円墳が造られ始める現象と通じるのである。

このように見ると、先に指摘した5世紀後半から6世紀中葉にかけての段階的な変化とは、より高度な政治的変容から引き起こされた広範な社会変化の、ウジでの具体的な反応であると理解できるのである。

継体即位と山城南部 芭蕉塚古墳を最後とする久津川古墳群の衰退と、それに続く五ヶ庄二子塚古墳の出現については、継体新王統の成立との関係で理解⁴⁾されている。紙幅の関係で詳述はしないが『記紀』によれば武烈天皇を最後とする王統断絶のあと、北陸からオオド王が迎えられ西暦507年に即位したとする。継体天皇である。しかし彼は和歌山に入らず山城南部や北河内の諸宮にながく留まることとなる。このように、武烈から継体即位を通して欽明即位前後までの期間、ヤマト王権は大きな動揺期にあったと考えられている。いわゆる継体・欽明朝内乱と呼ばれる事件である。ちなみに継体の没年は即位25年後の西暦531年とされる。

この王統交替が、まさに先に見た古墳の消長に反映されていると考えられている。五ヶ庄二子塚古墳が、継体天皇の真陵である高槻市の今城塚古墳と相似形と考えられることや、今城塚古墳の埴輪窯である撰津新池埴輪窯から一部の埴輪が供給されていることは、二子塚古墳被葬者と継体政権との関係をものがたる。

しかし、五ヶ庄二子塚古墳の出現については継体天皇即位との関係が高いとしても、5世紀後半期の久津川大首長墳の断絶やウジの首長墳の断絶と継体即位との間には、無視できない時間的な隔たりが存在する。門ノ前古墳の造営年代に関しても、現状の須恵器年代観からすれば継体後のこととなろう。

すなわち、先に指摘したウジの段階的な変化を、このような歴史的イベントと対比させて叙述する場合、継体即位というエポックだけで説明するには少し無理があり、継体即位に至る前段としての雄略期、継体後の欽明期における政治状況を踏まえ、一連の歴史過程として把握する必要があることを示していよう。

B. 古代集落の成立

京都南部では6世紀末から7世紀初頭ころになると、古墳時代の集落とは違った場所に新たに集落が出現する現象が認められる。この集落を「古代集落」と呼んでおきたい。

建物群の景観 すでに見てきたように、谷下り調査区の古代集落の形成は、7世紀中葉から始まり、7世紀後半から8世紀前葉に頂点をむかえている。門ノ前調査区Ⅳトレンチでも同様な状況が看取できる。さて、この時期の建物の配置状況は、古墳時代の様子とは違い偏在する特徴がある。いわば凝縮された居住空間が形成されているのである。「建物群」と呼んでおこう。

Ⅲトレンチ北部建物群は、現状では9棟の掘立柱建物、1棟の竪穴住居とで構成されている。この建物群の広がり、周辺の地形と調査状況から考えて北・東へはわずかであるのは間違いなく、調査地外にさらに幾棟もの建物が存在するとは思えない。また、発掘状況が示すように南は用水路である溝群を越えていない。この溝は土地利用の境界的目安でもあるようだ。建物群が広がる余地を残すのは西側だけとなる。同トレンチ北部建物群の全体像は、調査で確認された内容をさほど上回るものではないと推測してよいだろう。

7世紀中葉に比定できる竪穴住居を除き9棟の掘立柱建物を見ると、方位と重複から3期ほどの遺構の累積が読み取れる。S B 3011・3012・3014・3015・3017の一群とS B 3010 a・3010 b・3013・4016・4018の一群であり、後者には重複が存在する。それぞれの建物構成の大枠は、前者に見るような若干の規模差を持ちつつも2間×3間無庇という一般的構造の、おそらく5～6棟の掘立柱建物に、倉庫と思われる総柱建物が伴うものではないかと考える。

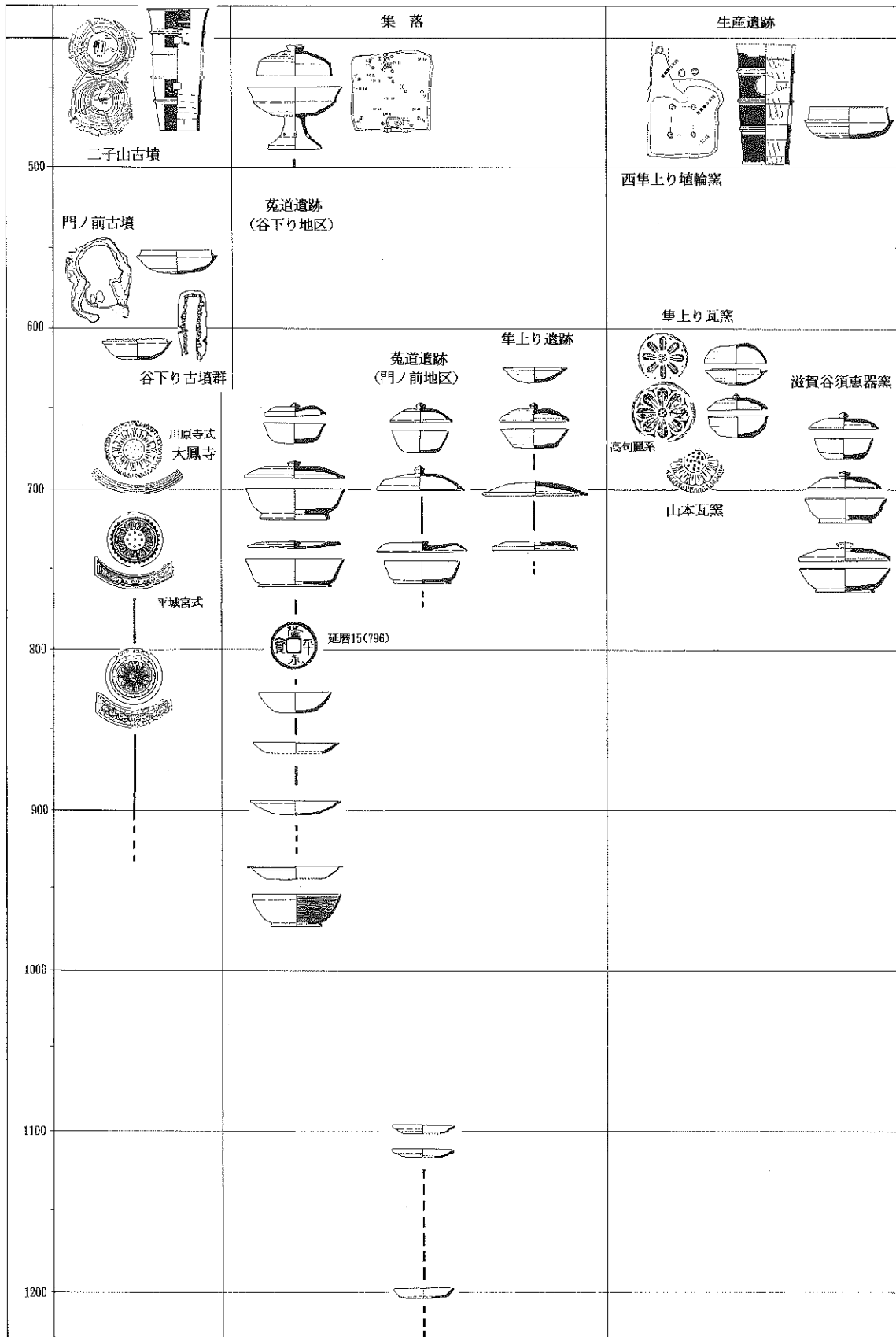
すなわちⅢトレンチ北部建物群の予想される景観は、戦川と水路群との間に複数棟の通常の掘立柱住居と倉庫から構成される小規模な居住単位が営まれ、水路群の南にはおそらく耕作地が展開し、東には後述する大鳳寺へと続く道を挟んで隣の掘立柱建物群などが存在する、と復元できるものとなる。

郷戸と建物群 律令国家による公民の編成は「戸」によった。地方行政の基礎単位は戸50をもって1里とした。五十戸一里制である。この制度は霊龜元年(715)に里を郷に改め、郷の下に新たに里が設けられた。郷里制である。さらに天平十一年(739)と天平十二年の改正により国郡郷制となっている。

戸は、戸籍・計帳の検討から、父系を軸においた複合大家族の形態をとることが理解される。学術的にはこれを「郷戸」と呼び、郷戸を構成する家族単位を「房戸」と呼んでいる。戸籍・計帳に記録される郷戸のあり方が、当時の家族のかたちの直接的反映なのか、五十戸一里制における法的擬制的な関係であるのかの議論はさておき、Ⅲトレンチ北部建物群の推測されるあり方は、複合家族の共同的居住空間とする評価が適当である。いわば今回の建物遺構は、当時の公民編成の基本となった「郷戸」の実体を垣間見せているのではないかと考える。

C. 古代集落と生産活動

集落と用水路 建物群と伴に注目すべき遺構として、調査区を東から西へいく本も通る溝がある。この溝は、古墳の周濠を利用して設けられたS D 4002・4005などと、S D 4011が谷下り1号



第73図 菟道地区の遺跡の消長

墳西側で結合分流し西へ水を導く。農耕目的の用水路と見るべきであろう。

水源は、IVトレンチのSD4011取水口遺構の状況からみて、戦川旧流路であるのは間違いなく、川に堰を設け水位コントロールを行いつつ取水したものと推定できる。堰の類似遺構として、おそらく道路堤であろうがIトレンチのSX1002がある。隼上り瓦窯跡の発掘調査⁶⁾でも、工房跡において堰の存在を想定しない限り機能しない導水施設が確認されている。

今回、堰の存在を推定する手掛かりとして特に注意したいのは、SX1002東側の滞水部の標高とSD4011取水口の標高であり、後者の方が1m以上高い点である。このような高低差の中に水を落とし込んだ場合、SD4011取水口付近の遺構状況で取水することは困難であり、この比高差を解消しつつSD4011に導水するには、戦川のSD4011下流部に堰を設けることが最も効率的で現実的な方法であると想定するのはたやすい。SD4004・4005の上流がどのようなようになるかは、今後の延長部での発掘調査で明らかにしなければならないが、やはりその取水口あたりにも別の堰を想定できるのでないかと考える。

平野の開発 以上を踏まえる中で強調しておきたいのは、古代集落の出現は、人々が再びこの場所を住居空間として利用したという現象ではなく、河川に関与し、水路を通して西のおそらく段丘下段域へと農耕用水を導く行為を随伴している、という点にある。すなわち、当該地が再び集落として利用されることと、段丘下段域での耕地開発とは表裏の関係にあることが理解できるのである。この時、ウジは広範囲に土地利用の再編が行われたと見たい。

さて、南山城地方の古代集落の成立には、同時期性が認められることが指摘⁶⁾されている。須恵器を物差とすれば陶器TK217型式併行期に時期的中心があるとされ、実年代では7世紀前葉ころとなろうか。また、台地上を選地すること、その結果として集落内に古墳が含まれてしまうケースが多いことなど共通した現象も指摘されており、なべて台地上に出現する理由については、平野部の耕地開発との関係が指摘されている。

菟道遺跡の場合、集落の成立時期はこれらにやや遅れるが、その他の要素については類似点が多く、大枠としては南山地方の全体的動向の中にあるものと考えてよいだろう。このような古代集落出現時期の同時性のメカニズムについて、ここで論ずる用意はない。今後、各遺跡での具体的な検討を踏まえつつ、古代集落の成立が地域のいかなる現象と連動しているかを念頭においた議論は、ますます必要であろう。

自給的須恵器生産 谷下り調査区出土の7世紀後葉から8世紀前葉の須恵器には、焼け割れや焼け歪みなどを持つ個体が含まれている。器形は甕あるいは瓶が多く、鉢・杯にも認められる。傾向としては用水路からの出土が多いものの、場所が特に集中するわけでもない。山キズを持つ須恵器が集落遺跡で出土すること自体は特に珍しくもない。ただ、今回の調査の中では、全く使用不能なほどの山キズを持つ個体が目立つ点で状況を異にする。

じつは発掘調査地の真西500mほどの丘陵裾斜面に滋賀谷須恵器窯⁷⁾がある。この窯は7世紀中葉ころから8世紀前葉まで、同じ場所で造り直されながら操業した単独窯である。登窯の前は谷川氾濫原となり、その場所で安定した平坦地の確保は難しい地形にある。この須恵器窯の存在

を踏まえ、使用不能な焼け損じが集落で出土するという点を積極的に評価すれば、滋賀谷須恵器窯操業に伴う製作諸作業と生産品管理は谷下りの集落内で行われている、という状況が想定しうる。窯の基数、集落内から出土した破損品数を踏まえれば、生産体制自体も集落内の自給の手工業生産と質的にさほど差異ないものであったと思われる。供給範囲も宇治郷域にとどまるものではなかったにしろ、さほど広いものであったとも思えない。

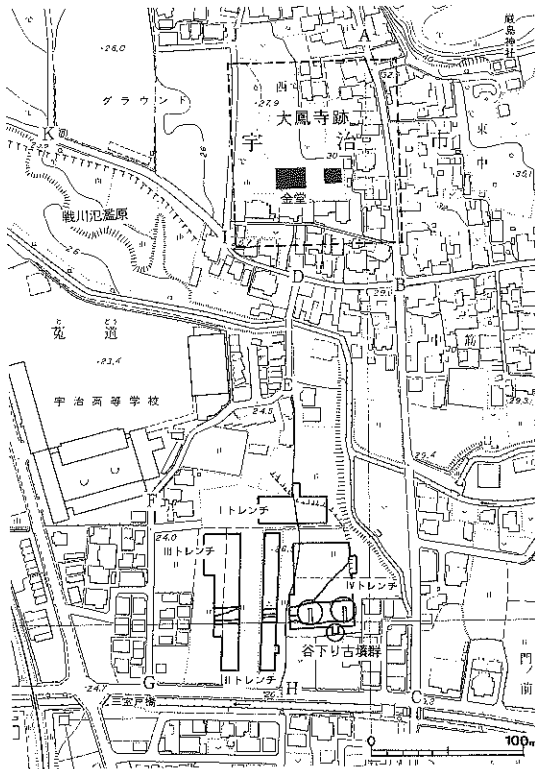
後の隼上り瓦窯陶工 このような須恵器生産が古代集落の成立期から行われている前提として、四半世紀ほど前に開窯した隼上り瓦窯の存在を念頭におく必要がある。この瓦窯の製品は、飛鳥豊浦寺へと供給されている。瓦窯の変遷は、まず3基の瓦陶兼業窯と須恵器窯1基の組み合わせで始まり、須恵器を併焼しつつ瓦生産を次第に縮小させ、7世紀中葉ころに廃窯している。遺構的には窯跡に付随して工房跡が発掘されており、少し離れて複数の掘立柱建物・倉庫からなる集落的施設（隼上り遺跡⁹⁾）が発見されている。

このいわば豊浦寺建設用瓦生産工場の廃絶と滋賀谷須恵器窯の築窯とにみられる移行現象は、隼上り瓦窯の生産体制に随伴していた陶工の動向を考える上でも注意すべきであろう。

D. 古代集落と古代寺院

谷下り調査区と戦川を挟んだ北岸部に7世紀後半創建の大鳳寺跡⁹⁾がある。距離にして200mほどである。今回の発掘調査では、大鳳寺と同範瓦などの遺物が出土し、遺構の上でも興味深いものもある。ここでは近接する古代寺院との関係に目をむけたい。

寺院と参道 遺構として注意したいのは、IトレンチSX1002とIVトレンチSD4012である。既に報告したように、SX1002は戦川流路および氾濫原を横断する遺構の南岸部分を検出したもの



第74図 大鳳寺付近地形図

ので、状況的には堰というより低い土堤である。またSD4012はSX1002の南延長線上にある溝状遺構である。両遺構の構築時期の特定は難しいが、廃絶時期に関しては土器から10世紀ころと見てよい。このSX1002・SD4012の位置と、大鳳寺跡を含めた周辺土地区画や道路のあり方を見比べると、大変興味深い事実を発見できる。第74図を基に説明をしよう。

まず、大鳳寺跡の範囲は、発掘調査によって概ね理解できており、図中の点線範囲が寺域と推定できる。主要伽藍として瓦積基壇の金堂跡を発掘しており、その東隣に塔跡と想定できる基壇を確認している。このような発掘調査の結果、当寺跡の範囲は、A-B、B-I、I-Jという、現在の地割りに反映されていることが理解される。

この点を踏まえると、寺城南のB-Iの中間の

D点より南に延びる道に注意がゆく。この道はE点まではほぼ直進し、そこからF点まで斜行、そして再びG点まで真っ直ぐに南進している。『宇治市史』5巻所載昭和34年9月撮影の航空写真を見ると、道としてはD-E-F-G経由であるが、EからHに向かって真っ直ぐ南に延びる里道状畦畔が確認できる。この里道状畦畔はH点よりさらに南へ途切れつつも続いている。第74図に用いた昭和50年測量図では通常の畔表記になっており、この地割りを実線で示した。

いわば、大鳳寺南面中央付近D点よりE-F-Gと続く道は、本来はE-Hへと真っ直ぐ南へ延びるものであったと考えてよく、S X1002・S D4012はE点からH点への里道状畦畔とほぼ重なる遺構であることが理解できるのである。すなわち、S X1002は大鳳寺南門へ延びる「参道」の、戦川に造られた道路堤の遺構であり、S D4012も参道遺構であることとなる。ただし、S D4012自体が道であるのか、側溝状遺構であるのか発掘調査の状況からは判然としない。

後世、この道がE点より西へ屈曲しF点へ至るものへと変わったのは、おそらくE点とIトレンチまでの間に存在したであろう川筋を回避するためであったと思われる。

集落内の瓦葺建物 谷下り調査区の各トレンチから、白鳳時代から奈良時代にかけての瓦片が整理箱で30箱ほど見ついている。集中して出土したのはIVトレンチS D4012であり、IトレンチS X1002の表面にも瓦片の散乱が認められた。

まず、大鳳寺跡出土瓦について簡単に説明しておこう。創建瓦は川原寺式と重弧文の組み合わせで、軒丸瓦はNM01の1範である。したがって寺跡出土のNM01は、範キズのないものから、かなり範キズの進行したものまで連続して存在する。重弧文軒平瓦には、四重弧と五重弧の両者が認められる。補修瓦には、西暦745年の平城京遷都後の造営に用いられた平城宮式と、平安時代前期の平安京所用瓦を主体とする二者がある。

このような寺跡出土の瓦と今回出土の瓦を比較すると、いく点か様相を異にするあり方が指摘できる。まず、川原寺式軒丸瓦については、大鳳寺NM01と同範であることは間違いないものの、いずれもごく早い段階の製品のみである。また、組み合う重弧文軒平瓦も技法・文様の特徴からみて大鳳寺跡と同じと考えてよいが、文様は四重弧のみである。奈良時代の稚拙な唐草文を施す軒平瓦は大鳳寺跡では出土していない。瓦磚も寺跡では出土していない。すなわち、出土数の少なさという資料的制約を考慮しても、谷下り調査区出土の瓦群は、実態としては大鳳寺跡とは違うと言わざるをえないのである。大鳳寺の創建当初期に、その瓦の一部を充てて造営された瓦葺建物を付近に想定すべきであろう。

この建物が何であったかはわからない。注意したいのは、S D4012内からは瓦と伴に多くの灰釉陶器類あるいは帯金具が出土し、その北側のIトレンチ部分では隆平永寶や緑釉陶器類などが出土していることである。このような奢侈品・銭貨あるいは官人の存在を推測させる遺物がまわって見ついているのは、瓦が集中していたIトレンチ東部からIVトレンチ北部と概ね重なっている。土馬の出土もIVトレンチである。これらの遺物群は、想定する瓦葺建物の性格と無関係とは思えない。

遺物の出土状況を踏まえれば、その場所は瓦が集中する範囲から大きく外れることはないと考え

えられるが、この付近一帯が、水田開発に伴って一定の削平を受けていることからすれば、軽易な礎石建物であった場合、遺構として残されている可能性は低い。

古代集落と寺院の終焉 谷下り調査区の古代集落の形成が、7世紀中葉から始まりつつ、7世紀後半から8世紀前葉には盛時をむかえていたことは既にふれたが、この状況も8世紀後半から9世紀に一旦変化をする。現象的には、まずⅢトレンチの建物群が廃絶し、Ⅳトレンチ北部に建物が集中するようになること、また掘立柱建物構造も梁行が1間の建物が中心となり、柱掘方も小さく柱間も不規則なものになること、用水路が機能しなくなっていること、土器の出土量が相対的に減少することなどがあげられる。それまでの古代集落のあり方とはずいぶん違う。続いて土器を追えば、10世紀も引き続き出土量は漸次減少傾向にあり、ついに10世紀後半を最後に認められなくなる。11世紀に集落を想定するのは、もはや困難といってよい。

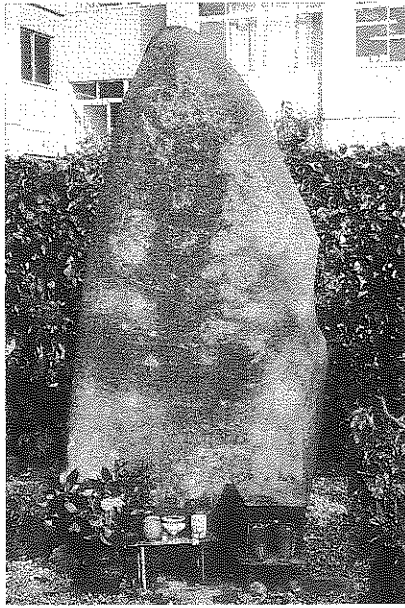
瓦から見た大鳳寺の変遷は前述した。発掘調査では9世紀前葉の改修において、寺域外郭溝が埋め立てられていることが判明しており、創建以来の主要堂塔は維持されつつも、境内の様子は創建期から変化している。寺院の廃絶期を土器から類推¹⁰⁾すると、まず境内出土の灰釉陶器の状況は、黒笹14号窯式段階は椀・皿・瓶の良好な個体が認められ、続く黒笹90号窯式段階では減少しつつも椀・皿類が認められる。9世紀代は寺の存続が肯定できる。しかし10世紀前半期になると全体的な土器の減少が始まり、10世紀後半期では土器の出土が激減する。この時、寺の存続は疑問と言うほかない。仁平二年(1152)の「東寺文書」に記載される「大鳳寺」が、宇治の大鳳寺のことであったとしても、その実像は「大鳳寺跡」とされる遺跡とは直接に結び付くものではないだろう。このように、10世紀後半という時期は、大枠として維持されてきた古代的景観がこの地域から消滅した、まさに時代の転換期であったといえる。

さて、9・10世紀は律令的組織・土地支配の崩壊期とされる。この過程の中に出現する現象としては、農民の逃亡、私営田領主の台頭、荘園の広がり、国司の台頭、郡司層の没落などがあり、この一連の歴史過程の中で、律令的支配体制の基盤をなした古代的な村落が崩壊したことが指摘されている。当然、宇治郷での集落・寺院の廃絶も、基本的にはこのような歴史的動向の中から引き起こされたものである。今回の発掘調査成果は、その具体的な有様を窺う良好な資料であるといえよう。

E. むすびにあたって

藤原氏関係遺跡への期待 中世期についてはふれなかったが、むすびにあたって門ノ前古墳周濠から出土した七重瓦塔の笠部破片への注意を喚起しておきたい。遺物の年代は12世紀代と考えてよいだろう。ちょうどこの頃、宇治では藤原摂関家によって、多くの別業・寺院が造営されている。四条宮寛子によって創建されたという白川金色院などはその代表であるし、平等院の大修理も一連の中にある。これらの造営には、河内産瓦が盛んに使われた¹¹⁾ことがわかっている。

河内産瓦は門ノ前地区Ⅳトレンチでも断片が出土し、三室戸寺子院跡や宇治上神社近くの源氏物語ミュージアム建設付近からも見つかっている。当地区においても12世紀に藤原摂関家による造営が行われていたことが推定できる。



第75図 かげろう石

今回の発掘調査では、際だった12世紀の遺構は発見されていない。しかし、この七重瓦塔は同時期の遺跡が付近に存在することを想定させる。特に門ノ前調査区の南にある阿弥陀三尊を刻んだ「かげろう石」には注意を傾けておきたい。この石造品は民間浄土信仰の所産として評価されることがしばしばであるが、近年の考古学的情報は、かげろう石周辺に12世紀の藤原撰関家に関係する別業あるいは寺院を予測させるものが多いことは事実だ。かげろう石自体が、造立当初から民間信仰にかかわるものであったか否かは検討を要する。

菟道遺跡と文化財保護行政 さて、現時点で宇治市教育委員会が周知の埋蔵文化財包蔵地「菟道遺跡」として行政的対応を行っているのは、北は大鳳寺跡あたり、南は門ノ前調査区あたりまで、東は山裾、西は府道醍醐宇治線を越えない範囲

である。今回も、この認識における文化財保護法上の措置として手続きがなされ、発掘調査を実施している。しかし、現行の菟道遺跡の範囲は、平野の広さと比べるとずいぶんと限られたものとなっている。法的保護を図る範囲が実体的な遺跡範囲と整合しないことは、今回の発掘調査成果から理解できるようになった。実体としての遺跡は、現行の周知範囲よりさらに広い。

第Ⅱ章でふれたように、菟道地区の開発は比較的早く、本市教育委員会が遺跡の分布調査を行い『宇治市遺跡地図（改訂版）』を刊行した昭和61年段階では、当地区平野部の多くに住宅が建ち、自然を残す場所は少なくなっていた。分布調査での土器等の採集可能地は限られ、発掘調査も未だわずかな中では、現行の範囲で菟道遺跡を暫定的に示すしかなかった実情がある。

遺跡地図刊行後、現在に至るまで、市内での埋蔵文化財保護に係る発掘調査件数は100件を超え、その蓄積された成果を基に、市内平野部における遺跡の実体的なあり方が、ある程度推測できるようになってきた。

菟道遺跡も今までに試掘調査や立会調査、あるいは周辺遺跡での発掘調査などがいく度も実施されており、今回の発掘調査成果を含め、より実体に即した範囲の変更が一定可能になりつつある。また、早い段階の開発地は、盛り土による宅地造成のため、遺跡が地下に温存されていることも概ね理解できるようになった。今後、より効果的で質の高い文化財保護行政を目指して、埋蔵文化財包蔵地の認定と取り扱いには十分な検討を行ってゆきたい。さらに埋蔵文化財保護行政のフロントとしての発掘調査事業の効率化を進めつつ、今回、関係各位のご協力の中で三室戸小学校に移築保存が実施できた谷下り1号墳の石室のように、今後とも積極的な文化財の保存と活用について取り組み、ふるさと宇治の発展に寄与してゆきたい。

最後に、今回の発掘調査の実施と本書作成に関してご理解とご協力をいただいた関係各位に心から感謝し、本書のむすびとする。

(杉本)

【註】

第V章第3節

- 1) 宇治市教育委員会 『宇治二子山古墳発掘調査報告』宇治市文化財調査報告第2冊 1991
- 2) 宇治市教育委員会 『西牟上り遺跡発掘調査概報』宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第33集 1995
- 3) 宇治市教育委員会 『五ヶ庄二子塚古墳発掘調査報告』宇治市文化財調査報告第3冊 1992
- 4) 宇治市教育委員会編 『継体王朝の謎－うばわれた王権－』河出書房新社 1995
- 5) 宇治市教育委員会 『牟上り瓦窯跡発掘調査概報』宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第3集 1983
- 6) 近藤義行 「南山城の古代集落」『平安京歴史研究』－杉山信三先生米寿記念論集－ 1993
- 7) 宇治市教育委員会 「東中遺跡・菟道遺跡・滋賀谷窯跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第10集 1987。
- 8) 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 「京滋バイパス関係遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第7冊 1987
- 9) 宇治市教育委員会 『大鳳寺跡発掘調査報告』宇治市文化財調査報告第1冊 1987
- 10) 杉本宏 「土器からみた宇治大鳳寺の終焉」『京都考古』第34号 1984
- 11) 杉本宏 「平等院古瓦の新相－河内系軒瓦の様相・年代・背景－」『平安京歴史研究』－杉山信三先生米寿記念論集－ 1993

新旧遺構名対照表

門ノ前古墳調査区

新遺構名		旧遺構名
S K01	←	S X07
S K02	←	S X09
S K03	←	S K35
S K04	←	S K30
S K06	←	S P130
S K07	←	S K24

T-II トレンチ

新遺構名		旧遺構名
S B2001	←	S H2001
S B2002	←	S H2002
S B2003	←	S H2003
S K2005	←	S K2003
S D2006	←	S D2009
S D2007	←	S D2008
S D2008	←	S D2007
S D2006	←	S D2010

M-IV トレンチ

新遺構名		旧遺構名
S X0001	←	S X01
S K0002	←	S K02
S K0003	←	S K03
S K0004	←	S X04
S K0005	←	S K05
S K0006	←	S X02
S K0007	←	S K01
S K0009	←	S X03
S X0010	←	S X05
S K0012	←	S K12

T-III トレンチ

新遺構名		旧遺構名
S K3019	←	S X3001

T-IV トレンチ

新遺構名		旧遺構名
谷下り1号墳	←	S X4003
谷下り2号墳	←	S X4002
谷下り3号墳	←	S X4001
S D4011	←	S D5001
S D4012上層	←	S D5005下層
S D4012下層	←	S D5005上層
S D4013	←	S D5002
S B4014	←	S B4001
S K4023	←	S K4001
S X5005	←	S X4006

T-I トレンチ

新遺構名		旧遺構名
S K1001	←	S X01
S X1002	←	礫敷遺構
S D1003	←	S D07
S D1004	←	S D04
S D1005	←	S D01
S D1006	←	S D02